
貴方は神を信じますか？

作者さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方は神を信じますか？

【Nコード】

N6794K

【作者名】

作者さん

【あらすじ】

大きな世界という河に、転生者という石が投げ込まれた。それは世界を少しだけ歪ませていく。

英雄『千の呪文の男』の息子の一人と、ある変態不良クソ神父を主人公とした、『魔法先生ネギま！』の二次創作です。

第 話 起源（前書き）

注意書き

- 1、この小説は二次創作です。原作とはまったく関係ないです。
- 2、この話はよくある『神様に頼んで特殊能力付きの転生』ものを含みます。
- 3、主人公はネギま！？二次創作にお馴染みのスプリングフィールド兄弟です。
- 4、オリキャラの強さはかなりの凶キャラです。
- 5、上記故に能力やネタなどがクロスしています。
- 6、具体的に言うとな型月成分を含み、オリ主お馴染みのチート能力があり、例としては主人公が魔術回路持ちになります。
- 7、一応原作キャラクターのカップリングがあります。…たぶん。
- 7・5 これはないわ、というカップリングがあるかもしれません
- 8、………にアンチがあります。
- 9、すこしイラッ っとする主人公かもしれません。
- 10、これは練習作でそんなにクオリティは高くはありません。読んでくれる人が少しでも暇を潰せて貰えれば嬉しいです。

11、最近詐欺が多いですね、皆さんは気を付けてください。ハハハ…。

ここまで読んでOKな人は次話に進みください。

それらの要素が嫌な人は…読んでいって暇を潰せれて、ついでに好きになってくれれば嬉しいです。

第 話 起源

ある日、おれは車にはねられましたとさ。

第 話 起源

俺の名前は青野蒼介^{あおのそうすけ}、高校卒でいたって普通の社会人二年目兼アニメスキー長年である。

さて、結論からはつきりと言ってみよう。

まあなんだ、いきなり結論なんて勢いの良いことを言われてもウザいのは理解している。俺だってやられたらウザい。

正直そいつの顔面殴りたくなる。だがその一言、それを言うだけでこの無色の単語の羅列に意味が吹き込まれると思うんだ。

いいか、いくぜ？

おれ死神に殺されちゃったんだお！

「てつめえふざけんじゃねえ！」

おれは目の前にいる黒いフードを被った、人間の形をしたなにかに向かって殴りかかった。

おれば荒野に少し用があつてバイクで出掛けている最中、車に跳ねられて死んだ。理不尽な死に魂の状態でここに来たとき、苛つているおれに現れたコイツは言った。

「俺がお前を殺した」

そんなこと言われたら殴つたって仕方がない。

辺りは真つ暗な空間に地面は透明なガラス張りのようで、なんの抵抗もなく死神は倒れた。

「……………」

しかし無言で立ち上がった死神は、やっぱり無言でおれをじつと見つめる。とりあえずおれも睨み返す。

しかし効果はなかったようだ。相手もじつと見るだけでなにも変わらない。思わず舌打ちしたおれは、とりあえず死神に話しかけた。

「おい、おまえ死神だよな？」

「いや、違う」

は？ と呆けるおれを無視して死神は言葉を続けた。

「俺になんらかの言葉でくくる種族は無い。故に死神ではない」

…わけが分からない。だけどそんなどうでも良いことを俺は聞きた
いわけじゃない。

「あーまあそんなどうでも良いことはやっぱりいいや。おれが聞きたいことはとりあえず一つ。おれ生き返られんの？」

「無理だ」

うざっ、速攻で答えるなよ！ 身も蓋もねえ！

「あーそれじゃあ別世界に転生とかは？ ほら、二次創作とかでよくあるマンガとかの世界に」

「…可能か不可能かで答えるならば可能だ」

よしキタ！ 転生フラグゲットだぜ！

「じゃあ、おれになんかゲームとかの能力を付けて転生とかもできるよな？」

「ああ、可能だ」

よし最強フラグゲット。

まじかよ、これならハーレム作るのも夢じゃないよな？

「そんじゃあよ！Fateの士郎の魔術回路と投影と、月姫は志貴の七夜の肉体と直死の魔眼、あとらつきよからは…式も直死の魔眼だから荒耶の仏舍利を埋め込んで送り出してくれよ！あーあと魔力とか最大で！できれば不自由しないように幻影呪文やら技術やらの知識もオマケでさ、外見は…イケメンが良いけど型月の言峰とか荒耶とかやめてくれよ。まあそんな感じで頼む」

「…………まあ可能だ。何個かできなくなることもあるが、問題は無いだろう。だが直死の魔眼はやめておけ」

「は？　なんで？」

「廃人になるぞ」

「う、それは両儀式の肉体とかでなんとか…」

「悪いがあれば無理だ」

く…まあそれだけ色々特典を貰えるならそれぐらいは仕方ないな。

「よしそれなら仕方ないな。じゃあ世界はリリカルなのはかネギまで頼む。できるよな？」

「わかった」

よっしゃあ、とおれは叫んだ。

別に元生きてた普通の世界が面白かったわけでもないし、好き勝手にできそうだ。

見ると、おれの身体がキラキラと光り、足元から無くなっている。

しかし不安はない。むしろワクワクしている。

思いっきり原作を壊してアンチしようかな」

ニヤリと笑って死神を見ると、相変わらず無表情だった。

が、その無表情が口を開いた。

「旧名青野蒼介、貴方に問おう
貴方は神を信じますか？」

なんだそんなこと、とおれは思い答える。

「生まれてからそんなもん祈ったことも信じたこともねーよ」

そう答える。

相変わらず死神は無表情。なんなんだよ、と思ったとき——俺の

意識は暗転した。

河に投げた石は、一瞬だけ変わるうとも直ぐに元に戻る

可能性は無限、その石は何も起こさず終わるか、それとも大きく変えていくのか。

世界は元に戻ろうとする。

いかなる矛盾のプラスに対してマイナスが起こる。

さてどれだけ世界は変わるのだろう。

「貴方は神を信じますか？」

男は、死神は、そのとき初めて口を歪めて嘲った。

第一話 麻帆良の学校（前書き）

少し書き溜めが在りますが、書き直しなどあるため、次話は少し待ってください。

第一話 麻帆良の学校

その人の背中はどこまでも大きくて、その両肩には目に見えない何かを背負っているように見えた。

背丈は中肉中背、黒の僧服に紺色のコートのような法衣を着て、首から銀の十字架を吊り下げ左手には数珠があるという、何者かうまく特定できないようなちぐはぐな姿をしている。

だけど、色々な人達に声をかけながら歩くその人は、どんな人からも歓迎されて、称えられていた。若者に、老人に、子供に、男女関係無くそれも全ての人に。

そんな人たちに微笑むその人は祈りを捧げ、そしてまた歩き続けた。

今度見えた風景は戦場だった場所だ。

荒廃した大地は戦いの後をそのままの状態で維持し、魔力の残留は拡散して宙に濃く残り、所々に壊れた武具や体ごと吹き飛ばされている防具が見えた。

そこは戦場だった。

木は折られ川は壊され大地は蹂躪されている。子供がおもちゃ箱をひっくり返したように人にしても機械にしても残骸が散らかっている。

そんな中、その人は倒れている人間を見つけた。

生きていたか、答えは否だ。

所々が炭化しているその体は、驚くほどに辺りに固まって広がる血

の量が少ない。

右腕はなく、強い衝撃があつたらしき身体からは肋骨が顔を見せていた。

これは死体だ。

言われようもなく当たり前のこと。何も言わず何も動かない。そこにあるのはまさに死の象徴だった。

その人は胸の十字架をぎゅっと掴み、右手の指に挟めるように三本、剣を魔力によって創り出した。

その白い刀身が、その垂直に交わる柄が表しているのはまるで十字架。神々しい輝きを放つそれをその人は物言わぬ死体の三ヶ所に突き刺す。

血さえも枯れたように見える死体からは血も声も何もなく、ただ革が破れるような、物体に剣が刺さる音だけが聞こえた。

「救われないか」

その人は苦笑を浮かべ呟く。

そこに浮かぶ表情は分らない。哀にも見えるし怒にも見える。

だけどそこに確かに在るのは悲哀、ただ左手を握り締めて悲しんでいる。

救われない、そうこの人は救われる事はないのだろう。そこにこの人の意思はすでに存在する事は無く、これ以上先は無い。

だからこそ、この人は呟いた。

「なら、私が救おう」

告げる――

その人はただその一言だけを呟いた。

目を瞑り、神様を相手にする神官のように頭を垂れる。

その瞬間、突き刺さった剣からは炎があふれ出し、その身体を燃やしていた。

熱いわけでもなく、凶暴な力の象徴でもなく、ただそこに存在する炎は神々しい。

そしてその人は魔力を込め、言葉を続ける。万物の神の言葉を代行するかのよう。

「私が救い、私が見守り、私が祝福を捧げよう。そこに死を知る人がいなければ、異界にへと見送る者がいなければ、私がこの死に祈りを捧げよう」

炎が一段と燃え上がり、その死体の身体を灰にしていく。

煙を出すまもなく、そこにあったはずの身体は既に灰の白と大地を焦がす黒に変わっていた。

そして風が全てを吹き飛ばす。風にのった灰は何処かの大地にその姿を散らし、気が付けばそこには黒以外には何も変わらない、大地の一部が見えている。

ただその風景にその人は黙祷を捧げていた。

そうして祈りを捧げたあと、ゆっくりと目を開いてだれにでもなく呟いた。

「この魂に哀れみを」

一話 麻帆良の学校

「……へんなの」

「…へんなのって、寝ばけないでよマジ、もう到着してるんだから急いじっ！」

一定のリズムで心地よい電車の震動とはべつの、自分がよく聞く弟の声を聞いてボクは目を覚ました。

最初は多く居た人達はもうとつとくに降りたみたいで、ガランとした車内にはボクらしか居ない。

だからボクの視界に入ったのは、背中に沢山の荷物を持っている前髪が赤毛の少年、ネギが焦ったようにボクをゆすって起こす姿だった。

齢10歳ぐらいにしか見えなくて、ボクに似た顔を持つネギは紛れもなくボクの弟。ボクの毛が茶色で黒くて薄いコートを着ていることと、拳二つ分背が高い以外は殆ど同じ容姿。だから思わずボクもネギを自分と重ねてしまう事も暫しある。中身は全くの別物だけだね。

と、起きたのは良いけどのんびりしているボクを見て、寝ぼけているのと勘違いしたらしく、さらに身体をゆすってくる。

だからボクはあたふたと慌てるネギをボクは見て苦笑し、思わず、くしゃっと頭を掴んでぐりぐりと撫でた。

「うん、ありがとうネギ。大丈夫、もう起きたよ」

ボクは微かに笑ってからゆっくりと腰をあげて、出口に足を向かわせた。

それに合わせてネギもボクの後ろを慌てたように付いてきて、肌を冷やす冷たい外の空気に触れたんだ。

日本という国は時間に対して敏感な人たちだと聞いた事がある。

それは正しいようで、周りに見える人たちは殆どの人が走ってる。

そして改めて電車から下りて見る麻帆良の光景は…絶景だった。色んな意味で。

人、人、人。それも全員が学校に向かつてる通学者。

まさに人の激流、このまま激流に身を任せたら同化する前に轢かれそうで、思わずネギと道の端に寄った。

歩行者もいれば…もとい、歩いている人とかだれも居ないよ。絶対に人波に轢かれそうだ。

走行者もいれば、バイク自転車路線電車にスケートボードにローラースケート、うん凄く自由な通学なんだと思う。なんだよ移動購買部って。万が一転んだりしたら商品が散らばって後ろも大惨事になるんじゃないかな。

「うわぁー、日本の学校の通学って凄く個性的なんだね、マジ」

心底感心したというか、驚いたようにネギはボクに声をかける。

うん、多分これが日本の通学路の光景なんだと思わないほうが良いと思うんだ。

だけどネギがこういった勘違いで驚いたり恥ずかしがったりすると、表情がころころ変わって面白いので、自分で気がつくまでは言わな

いことにしている。

そんなボクの内心は知らず、ネギは辺りの風景をキラキラと田舎者の眼差しで見えていた。しかし出身は田舎ゆえに致し方なし。

と、放送で盛大に遅刻は止めましょう宣言をしていたような気もするし、流石にぼんやりしすぎて遅刻はまずいな。

「ほら、新任の先生が遅刻なんてダメだろネギ。急がないと」

「ああつ、そうだった！……って、マギも先生になるじゃないか！ほら、早く行こう！」

少し待って、と言う前に、真っ先に走って行ってしまったネギ。

張り切ってるなあ、と一人呟いたボクは、少しだけ気を身体に纏い、多くの人達をごぼう抜きしているネギの背中を追いかけた。

ボクの弟、ネギ・スプリングフィールドはいわゆる天才といえる人物だった。

メルティアナ魔法学園を首席で卒業、オマケに跳び級二年という驚きの速さ。

だけどそれ以上にネギは勤勉で、魔法の知識だけじゃなくて一般的な学力も高い。一流大学生以上だと思っただければわかりやすいと思う。

知識を蓄える巧さ、魔力量、そして基礎の密度、魔法の扱い、なにかを扱うということ言えば、天才の中の天才だとボクは思う。魔力を制御はできてないけどさ。たとえばくしゃみで武装解除がでてくるとか。被害者はアーニヤとか。

一方ボクは魔法に関して凡才程度だと思う。

魔力もそんな多いわけじゃなくて、魔法の知識が深いわけでもないし、それでも学力はネギよりも低い。

唯一の例外を除けば魔法の構成もそんなにレベルが高いわけじゃないし、そのあたりには自慢できるものが無いんだ。

勿論跳び級なんてできるわけがない。むしろ留年したのだから。それどころか魔法の授業に関しては殆どの曖昧で知識を詰め込んだだけだから、活用できそうなものなんてない。

無い無い尽くしの凡人、多分そうなんだと思うし、学校では殆どの人がそう言っていたような気がする。

顔の形は似ているけど、ネギが赤と茶の髪に対して僕は赤茶単色。兄弟に見られるのは普通の容姿だ。

だけどもうまでも差があるとボクとネギは本当に兄弟なのだろうか
と疑問だった。

先生も生徒も、本当に呆れて言っていたのか皮肉で言っていたかなんて知らない。知りたくもなかった。

ただネギと、英雄の息子と比べるのがどうしても嫌で、ボクは魔法

が嫌いになったんだと思う。

ああ、でもボクはネギは嫌いじゃない。

大事な家族であり、大事な弟で、誰よりも自慢できる弟だ。

でも最近というか昔からアーニヤにはブラコンだと呼ばれてる。昔からボクはただ甘えてくるネギの相手をしてるだけなんだけどなあ。

（二人ともブラコンなのよ）

うん、そう言われると返すすべが無いや。

この修行も良い機会だし、ボクもネギもお互いに良い道を探せるといいな、と。ボクはそう思っている。

ちなみに、ボクの修行内容はネギと同じで麻帆良で教師をすることだった。一応ボクは数えて14歳だけど、10歳のネギに教師をさせるってどんな冗談なんだろうね。

正解は現実という名の冗談です。ぶっちゃけ笑えない。

さて、そうしてネギに追いついたボクは、少々悲惨な物を見ているようで現実逃避したくなった。

大事な家族であり、大事な弟であり、誰よりも自慢できる弟が、髪

を鈴の飾りの付いた紐のようなもので纏めた見知らぬ女子中学生に左手でアイアンクローをくらって宙にぶら下がっていたからだ。

うん、なにしたんだろネギ。朝っぱらから相手が因縁をふっかけてくるとも思えないし、隣にいる大和撫子の見本でもあるような長く黒い髪の女性は、呆れているのと少し慌ててるとの入り交じった表情をしている。

まずはボクの考えていた、日本の女性は大和撫子と言って美しい存在、という日本の理想郷は鈴の少女の左手でその幻想をぶっ壊す状態になってしまった。

ネカネさんやアーニヤと一緒に女性は怖いものなんだなあ。しみじみ感心してしまう。

「あ！ ま、マギ！ 助けて！ たすけ！ て！ 」

うわあ、大事な家族であり、大事な弟であり、誰よりも自慢の弟の頼みだけど、今は半径3メートル居ないには近づきたくないなあ。

ほら、鈴の女の子がこっち見た。擬音がジロ、じゃなくてギロ、なんだけど。目からビームでるんじゃない？

実に嬉しくないオーダーを頼んだネギの方に止まっていた足を動かした。

「あの、ネギが何をしたかはよく分かりませんが、できればその辺りで許してもらえませんか？」

相手から散歩ほど離れた所からボクがそう言うと、鈴の女の子は手を放し、なにか値踏みをするように此方を睨んだ。

それと同時にネギがボクの後ろに隠れる。うん、ボクにも隠れ場所をおくれ。視線の斜線上にいたら灰になってしまいそうだ。今度はすこし恨んだように強くぐりぐりと頭を撫でる。

「…あんた、もしかしてこいつの兄弟？」

「ええ…あの、つかぬことを聞きますけど…、なにがどうなってネギがアイアンクローの餌食になってしまったんでしょうか？」

「どうしたもこうしたも無いわよ！このガキが私に失恋の相が出てるって言うてきたからそうなったの！」

鈴の女の子が指差す方向にはボクの後ろに隠れたネギがいて、ビクンと後ろで身体が跳ねたような気がする。

うーん、これはネギが悪いなあ。

少しだけ前にアーニヤに、この手の悪い結果は多少オブラートに包んで、怒らせないように言うべきだと聞いたことがある。

あとはボクの占いは当たらないから真逆の事を言つと良いって言うてたような気がする。失礼しちゃうな。

「えーと、ごめんなさい。ほら、きつと許して貰えるから一緒に謝ろう？」

ボクがそう言つとネギは後ろからおずおずと顔を出す。

どうも踏ん切りのつかないネギにボクは片膝を上げて目線を合わせて、心配ないよ、と安心させるようにゆっくりと頭を撫でた。

「で、でも…」

「大丈夫だよ、そんなに悪い人じゃないから」

本当はわからないけどたぶん大丈夫だろう。

ネギも少しは落ち着いたのか僕の前に出て一礼する。

「えっと、粗相をかけてしまって申し訳ありませんでした」

む、と呟いたけれども、やがてやれやれといった様子で腰に手をあてため息をつく鈴の女の子に、よかったなあ、とネギに微笑む黒い髪の子のの様子を見ると、どうやら許してくれたと思う。

まあ鈴の女の子はまだなにか釈然としないように見えたけれど。

それでもボクは、よくできました、とネギの身長に顔を合わせて頭を撫で、少しだけ笑った。

やっぱりネギの頭は撫でこたえがある。ボクもネギも安心できる行為とあって、やはり今回も落ち着く事が出来た。

ネギはえへへ…と少しだけ恥ずかしそうに微笑み返す。

「……………ブラコン？」

「ほえ、中のええ兄弟なんやなあ」

と、つい癖でやってしまった。

呆れるようにこちらを見る鈴の女の子に、感心してうなずく黒い髪の子が見える。

ネギも心なしに少し顔を赤くして恥ずかしがっているようにも見える。

うん、ボクもやってて少しだけ恥ずかしくなった。絶対に顔が赤くなってるんじゃないかな？

まあとにかく…

「やっぱりボクはブラコンなのかな…？」

「うーん、そうでもあらへんよ。まだギリギリ中のええ兄弟やないかなあ？」と、明日菜も初対面の人にそんなこと言っちゃだめやで？」

「う、これはつい出ちゃっただけで…、さっきそのガキが言ったのであいこよ、あいこ！」

うん、これで貸し借りは無しだね。余計な恨みとかは買う必要がなくなっただけで一安心することができる。

ネギも安心したのかおずおずと話しかけている。

「あ…、それなら僕は許してもらえたんですね？えっと、明日菜さん？」

あんな状態だったけどネギに話しかけられたのが少し意外だったのか、間をおいて返す。

「なんで私の名前…って、木乃香が言ってたわね。まあ二度とそんなことを言わなければ許すわよ」

「はい！ 大丈夫です、失恋の相はかなりどぎついですけど、まだなんとかなると出てますから」

「このガキやゝまだ言うか！ だからそういうのを言うなっていつてんの！」

わあ、凄く和む人だ。木乃香さんって言うのか。

多分大和撫子っていうのは正にこういうおしとやかな日本の女性を言うんだらう。思わずこちらの心まで癒される。

ネギ？襟を持たれてガクガクと揺すぶられてるね。気にしたくないし気にしてないから勝ちだと思う。

ネギにつける薬はないってね。ネギだって薬味みたいなものだし、自分で何とかするだらう。

ボクは軽く思考放棄していた。

「そういえば自己紹介がまだやったな。私は近衛木乃香、それであそこでガクガクと揺すぶってるのが神楽坂明日菜や。二人は何て言うん？」

「あ、ボクはマギ・スプリングフィールド、あそこで神楽坂さんに

ガクガクと揺すぶられてるのがボクの弟で、ネギ・スプリングフィールドです」

まあガクガクしてされている人たちは置いて、あまつた者同志でいろいろ話しかけることになった。

なんでも二人はボクらを迎えに来るはずだったのだけれども、ちょっと寝坊して遅れてしまったらしい。タカミチ、人選ミスだよ。深読みしてタカミチが頼んだぐらいだから今回はたまたまなのかもしれない。

それにしても和む、癒される。隣でガクガクされてるのが無ければここが時間に忙しい日本とは思えないね。

「それにしてもマギくん、ネギくんか。なんか美味しそうな名前やなあ。あ、そや。二人はここになににきたん？ このあたりは一番奥の女子校のエリアやえ？」

確かに、このあたりは女の子が多いとは思ってたけど、そういう理由があったのか。

どうでもいいけど、ネギ・スプリングフィールドは日本語訳で春原ネギ、新鮮そうな味がしそうですね。

「そう言えば言っていないませんでしたね。ボクらは今日からここで教職につくことになったんですよ」

「教職…って先生！？ はあゝ二人とも私たちよりも年下やる？」

やはりこの年で教職というのは珍しいのだろうか。関連について認

識を緩和するの結界があつたけど珍しいという事は、多分異常レベルだと思う。

まあそれでもボクがすることは変わらない。ただ目の前の事をこなすだけだ。

「はいボクが14歳でネギが10歳ですね。だけどやるからには頑張りますね」

「そうなん、大変かもしれんけど頑張つてなあ二人とも」

その言葉が木乃香さんにとっては本心だったのだろう。その微笑みは綺麗だと思つたし、凄く嬉しいと思つた。

「うん、ありがとう近衛さん」

ボクもそう言つて笑つた。

「ところでネギくん助けんでええの？」

「近衛さんも、神楽坂さん止めなくていいんですか？」

「明日菜もちよつとムキになつてただけやからな。だけどネギくん涙目になつてるやろ？ マギくんネギくんが大切みたいやからなんでかつて思つたんよ」

「うわーん、マジにーさーん、たーすーけーてー」

「ほら、呼んでるえ?」

「凄い偶然ですね近衛さん。ボクも似たような幻聴が聞こえるんですよ」

「現実逃避はアカンよマジくん?」

「でもしたいときもありま…っと、木乃香さん、少し下がった方がいいですよ」

ガクガク揺すぶられてるネギだけでも、自分の髪の毛が鼻にでも入ったのか、くしゃみをしそうになってるね。

流石にボクは大和撫子のような女の人を裸にはしたくないし、ボクもなりたくない。

「いいからさっさと訂正しろー!」

「わあっは…っはっ…ハクシュンっ!!」

え? その後の事を聞きたい?

分かりやすく言うなら毛糸のクマさんパンツだったよ。

ネギの目を塞いだ代償にボクの左の頬に紅葉が咲いたんだ。理不尽だと思う。

ちなみに迎えに来るはずのタカミチは、こっちの様子を窓から覗いていたみたいだけど、ネギのくしゃみを見てすぐに目をつぶったらしい。

以前遊びに来た時に新調したスーツが粉碎したから、その時の教訓だろうね。

うん、でも迎えの人選を明らかに失敗したせいで殴られ損のボクは、ちょっとだけタカミチを恨んだ。

第二話 自己紹介などを（前書き）

誤字などあつたら教えて下さい。

第二話 自己紹介などを

「ふむ、これはすごいぞマギ」

「そうなのかな。ボクにはよく分からないや」

そこは森の中でも開けた場所で、ボクが鍛錬によく使っていた場所。人が来ることも少ないその場所は、ボクにとってはサボり場所であり、唯一誰も気にせずにいられる場所だった。

だけどそこにはよく先客がいる。

東洋人的な顔つきの見かけが20代後半から30代前半ぐらいの男の人。

紺色の法衣をこよなく着こなす、どこにでも居そうに無いおじさんのような人だ。

髪は茶色のくせ毛で目はブラウン。その厳格そうな顔に似合わず気軽な人で、初対面の印象とのギャップには驚かされた。

動きを褒められたけれども、別にこれはいしたことはない。

ただひたすらボクは型をなぞるように身体を動かしているだけだった。

気を使った移動術、コレは瞬動というんだったかな？ 気を使い一瞬で思ったところに最小限の動きで移動する、ボクにとってはただその程度の術だ。

そこからの掌打、回り込んでフェイント込みを仮想した上段蹴り、そこから吹き飛んだ的を瞬動で回りこんで地面に叩き付ける。そして最後に剣を抜刀して斬撃を加え、動作を終了した。

本当に簡単な一連の動作、自分ぐらいの年齢で言えば早いのだろうけど型を理解して識っているボクにとっては、それが凄い事なのかも分らなかったんだ。

それに入りがまったく分らないほど縮地を完璧な型で使いこなす人間が言っても説得力が無い。

「いや正直驚きを隠せそうにないな。習得速度、練度をその年齢で考えるなら、凄い通り越して変態の域だろう。誇ってもいいのではないか？」

「…そうなのかな？ ネロ以外はそういうことを言わないから、比較しようがないよ」

正直、他の人の前では使いたくない。いくら上手く身体を動かせても、誰かを倒すすが上手かったとしても、そんな力を誰かの前で使うことがないんだから。

いかに上手く魔法を使うことが、あの学校では重視されるし、この事を知ってる人なんてお爺さんとネカネ姉さんぐらいしか知らないしね。

「魔法はやはり嫌いかな？」

「うん、嫌い」

ボクはすぐにそう答える。

「……やっぱりみんなは父さんやネギと比べるんだ。ネギはもうボクには追い付けないし場所にいるし、ボクはこうやって身体を動かす方が好きだから」

それをネロが聞くと、なにやら気難しそうな顔をして悩んでいた。

魔法が嫌い、なんてことも学校では言えない。一度先生に言ったら酷く怒られて、みんなから変な目で見られることになった。

ネロさんもそうなのかな、と。ボクは意識とは別にぼんやりと考える。

「…なににも魔法が嫌いでも悪いと言っわけでもあるまい」

「そうかな？ みんなは立派な魔法使いになるために勉強するって言ってるけど」

「ふむ、それも一利在る。そしてナギの血はマギを魔法使いへと仕立て上げるだろう。だが、マギは好きなことを行なえばよい。子供が考えて人生など決まるものでもあるまい。だったら子供である今は好きに生きたらいい」

好きに生きたらいい…か。

でも、いざそんなことを言われたらどんなことをすればいいのだろう。普段あまり考えない問いだけに、ボクは少しだけうねった。

「なにもそんなに考えなくともいい。地面を珍走団の如く走り回るのもよし、海に漂うクラゲの如くぼんやりするのもよし、その時にふと思いついた行動をすればいいのだ」

分りにくいたとえただけど雰囲気だけは分ったような気がする。

「…そっか。わかったネロ。今から少し手合わせしよう」

「……………まあいいか。マギ、アロンくんは使ってもいいが怪我をしないよう気をつけろ」

うん、たしかにそのときは学校に行けと言つべきだったのだろう。

けどなにも言わず付き合ってくれたことが少し嬉しかった。

第二話 自己紹介などを

「——というわけじゃ。マギ、聞いておったかの？」

「…すみません、少しぼんやりしてました。もう一度お願いします」

白夢中、そんな言葉が似合うように放心状態だったボクは、相手には失礼だとは思いつつも聞き直してしまった。

ここは学園長室、ボクが聞き直したことに、ふおっふおっふおといふ個性豊かな笑いで説明してくれる仙人こそ、この麻帆良の理事を勤めている近衛右近衛門さん。

誰もが考えると思うけど、正直学園長の頭が凄く気になります。知識の詰め込みすぎが原因だともうけど、ネギもあなるのかなあ。正直ここで2―Aの副担任をすることの説明は聞きました。なんでも前担任がタカミチだそうで、クマぱ…もとい、明日菜さんがネギと学園長にすつごく文句言ってます。あ、睨まれた。

たしか、どう考えても先生ってまだコイツ子供ですよ！できるわけないじゃないですか！とかなんとか。うん、それアーニヤにも言われてたからあんまり責めないで欲しいな。ほら、ネギがすつごく落ち込んだ。あ、木乃香さんフオーア리가とうございます。

「そ、そんな…。じゃあ担任のタカミチ先生はどうなるんですか？」

「ふむ、知つての通りタカミチ君は多忙で、何回も出張で不在のことが多かったじゃろう？ この際担任から外して誰かに任せようと思つてたんじゃ」

タカミチが居ないのは出張してたからなのか。でも正直迎えに来るという職務を放棄するのは良くないよね。根に持つてる？ そりゃあ未だに頬が紅葉型に赤ければそう思つても仕方ないよ。

「でも、こんな子供に先生なんて…」

じろりとネギとボクを睨んで、あんたらに教わることはないわよ、
とでも言いたい視線を向ける。

ボクはなんともないけどネギがさらに落ち込んだ。木乃香さんがこの明日菜さんと並んでいると天使に見える。

ほら、ネギってボクと違ってあんまり悪く言われないからさ、こう
いった敵意がまだ苦手だと思っただよね。芯は強いけど。

「大丈夫じゃ、ネギ君は既に大学を跳び級で卒業しておるし、マギ
君もそれに近い知識を持つておる」

疑わしそうにこちらをみる明日菜さんに、ほおわっ感心してして
いる様子の木乃香さん。

うーん一応それぐらいの知識は貯めたとは思っけど、少し不安なと
ころもある。副担任はサポートぐらいだと思っし、その辺りは安心
する。

なおも食い下がるうとする明日菜さんに、木乃香さんが、まあま
と落ち着かせる。

二人とも仲が良いんだな、と。学校での親友がアーニヤぐらいしか
居なかったボクは、少しだけ羨ましく感じた。

ネギはネギで先ほど明日菜さんのアイアンクローとガクガクが効い
たよう、少しだけ怖がっている節がある。

やっぱり疑わしそうにネギを見る明日菜さん。ネギも視線が合わさ
っただけで、びくつと反応しなくても大丈夫だよ…多分。

しかしそんな様子をふおっふおっふおと微笑ましそうに見る学園長。
なあにこれ。

そろそろ話を進めてほしいと切実に思う。

「おおそうじゃ、言い忘れてた事があつての、実はネギ君を木乃香のところに置いて欲しいのじゃが」

「…はあ」

「はいっ!？」

「ええっ!」

「んゝ、ええよ」

撤回、なぜ話を進めたしこのクソジジイ。

四者一様に返事を返したものの、空間は時間が止まったように膠着した。

が、やっぱりそれを動かすのは明日菜さんだった。

「ちよっ…、ちよっと待ってください! こいつらが先生なのは百歩譲って認めますけど、なんで私たちのところに住むって話になるんですか!? だいたいマギ先生の所に住ませればいいじゃないですか!」

「そ、そうですね! 何で僕だけ明日菜さんのところで!？」

先程と同じぐらい理事長に鬼気迫る明日菜さん。今度はネギも喰らいついたようだ。
でも学園長はどこ吹く風といった様子でふおっふおっふおと笑つて
る。

「しかしの、今現在現実的に教職員用の寮がどこもいっぱいでの。
マギ君はほれ、思春期の入りたてじゃろう？ 寮が空くまで学校の
使つてない場所を寢床にしてみらおうかと思つておつたんじゃが…、
なにしろかなり狭いんじゃ」

申し訳なさそうに見えるようにいう学園長。そこは管理者としてど
うなんだろうかと。ボクは思う。

しかしこの人がそんなボカを簡単にするような人とは思えない。あ
つちのおじいさんの親友とも聞いた事があるし…。だとしたらなに
か理由があるのだろうか…。

「狭いって…どれぐらいの大きさなんですか？」

「うむ、生活空間は六畳程度じゃな。布団を敷けばさらに狭くなる
がの」

うーん、別にそんな大きな部屋が必要なわけじゃないけれど、二人
で暮らすには狭いと思う。

「う…、六畳って…」

「うむ、流石に二人は住ませられん。すまんが暫くの間ネギ君を住まわせてやってくれんかのう」

と理事長が言つと、ここで気まずそうにしながらもしぶしぶ明日菜さんは了承した。

まあでもボクも言いたいことは少しはある。

「うーん、ボクは部屋を貰う立場ですし神楽坂さんと近衛さんに失礼ですからなんとも言えないけど、ネギはどう思う？」

一応ボクは構わないとしても、ネギはどう思うだろうか？意見も言わずに話が進むのは可哀想だと思う。

「えつと…少し怖…」

「あゝっ？」

「ひい！？」

うん、確かに怖い。素直に思ったことを言っちゃうあれは直した方がいいね。

明日菜さんも、だからガキは嫌いなものよ…とか言わないで。

「まあまあ明日菜も落ち着いてな。なあーネギくん、明日菜も少し怒ってるだけで、実は凄く優しい子なんやで？」

「そ、そうなんですか？ そうは見えませんが…」

そして火に油をそそぐネギ。プルプルと震えている明日菜さんの拳がこちらに向かいそうで怖いです。

「はは…まあそうや、だから時間がある時に少し話してみるとええよ。ああ見えて凄く面倒見がええんやから」

なんだろう…だんだんと木乃香さんが聖母に見えてきた。そうなんですか？ と言う風に見上げられた明日菜さんは、ふん、と怒ったようにか照れたように顔をそらした。

「話がついたようだなによりじゃ。では、教室に行って構わんよ。二人ともご苦労じゃったな」

と、ここでようやく本格的な事務の話になるということで、明日菜さんは一礼してからぷいっとそっぽを向いたように、木乃香さんは笑って小さく手を振って退室した。

それを見計らって学園長は資料を取り出し…

「ふむ、ところで二人には…彼女や恋人はおるかの？ 居ないのな

ら木乃香と……………」

と、そこまで理事長が言いきったところで、どこから飛来した金づちが理事長の近くにある筆立てを粉碎して、非常に乾いた音をたてて床に転がっていた。

「ややわあゝじいちゃんったら」

……………ボクは、考えるのを止めた。

せつかくのイメージが粉碎玉砕代喝采しそうだったし、なによりあとちよつとで筆立てじゃなくてボクの頭を粉碎しそうだったので、気にしないことにした。

「…ふむ、最近は何も木乃香もやんちゃになって困るのう」

「このやんちゃのレベルって凄く高いですね」

ネギは何が起こったか分からないといった様子で慌てて、ボクはそんな学園長にため息をついたのに、学園長はやっぱりふおっふおっふおと話をはぐらかす。

そんな学園長だけでも間をおいて、少しだけ真剣なふうに机の上で両手を組み訪ねてきた。

「ふむ…これは個人的な質問なんじゃが、二人は木乃香のことをど

「う思ってるかの？」

「木乃香さん、ですか？ 凄く優しい人だと僕は思います」

これはネギだ。

優しい、うん確かに僕もそう思う。

「ボクも同じです。近衛さんは将来好きになったら結婚したいぐらいです」

と何故か本心の言葉にネギは顔を赤くして、理事長も少しだけ驚いた様子だった、…まあすぐにまたふおっふおと笑いだしたから大したことじゃないとは思っけど。

「そうか…二人とも、先生という立場からあまり鼻屑はできんじゃろうが、仲良くしてやってくれんかの？」

「はい！」

「ふう、分かりました」

それを聞いて理事長も満足してるように見えた。

余談だけど木乃香さんは学園長のお孫さんらしい。

東洋の遺伝子の神秘って凄いと思いつつ、木乃香さんに有害な遺伝子が行ってなければいいな、とボクは思った。

まあ…後々に有害ではないけど凄く厄介な遺伝子を継いでしまったと言っことを知ることになるけども。

今現在ボクたちは源しずな先生に麻帆良学園の2・Aまでの道のりを案内してもらっている。

この学園は正直地図が無ければ迷子になってしまいそうなほど広い。案外それは的外れというわけでもなく、来たばかりの新生は何回か迷子になることもあるらしい。

慈悲と母性溢れるしずな先生は、辺りを物珍しそうに見るボクを、あらあらと微笑ましそうな視線でにっこりと笑っていた。

…うん、少しだけネカネ姉さんのような雰囲気だったから、間違えそうになったのは仕方ないよ。怒ったら怖いような気がしてたまらない。

「ここがネギ先生とマギ先生が担任となるクラスです。お二人とも頑張ってくださいね？」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「案内ありがとうございました、源先生」

柔らかな笑みを浮かべる先生に、ネギも名簿をたたんで一礼し、ボクもすつと頭を下げた。

先生が…、正直ボクは先生というのがあまり好きじゃなかったけれども、今度はボクがその立場に立つと思うと少し可笑しい。ただ、先生は苦手だけど教えるという立場が嫌いなわけじゃないから、自分のできる限り頑張ろうと思った。

「それじゃあ行こう、マギ」

「ん、そうだね…っとちょっと待って」

ボクは教室のドアに挟んである黒板消しを確認すると、仕掛けた人を裏切るようにひょいっと取ってしまった。

ささいないたずらだろう、だけどこの程度ならボクが作ったほうがいいかな。

ネギは驚いたようにそれを眺め、ボクと顔を見合わせる。

ボクはにやりと笑って拳を突き出し、ネギも口元でクスリと笑いぐつと親指を立てて教室に入った…。

ぐい

「……は？」

あ、ありのままに起こったことを話すと、ボクはネギに先に行くように促してみると、なぜかネギが前のめりに倒れかかっていたんだ。そしたらネギはあろうことかボクのコートをむんずと掴んだんだ。

おまけに無意識のうちに魔力で腕を強化してボクを投げ出したんだ。うん、分かりやすくなったかというところ…

「うわわあああああああ！」

「そおっい！！！」

バケツに弓矢にその他諸々の罠に引っ掛かってしまったボクらは、そのまま纏れて教卓裏まで転がっていた。

矢、被弾三発。バケツ、直撃プラスに水にのまれる。教卓、頭をぶつけてひどくいたい。

上も下も分からない、川の濁流に巻き込まれたように上下感覚を奪われたボクは、ようやく止まった様子で目を開けた。教壇に直撃して止まるネギ、そのまま教壇の後ろを通り過ぎて顔面

から床に滑り込むボク、そしてそれを取り巻くのは爆笑の渦。なあにこれ？

新手のテロかと勘違いしてしまいそうになったね、うん。

しかしネギはなおも何事もなかったように自己紹介しようとして…金ダライを頭に直撃していた。けっこ痛そうだ。

しかしそれでも自己紹介を続けるネギは凄いと思った。とりあえずネギが自己紹介したらすぐにボクもしよう。

「えーと、コホンっ。今日からこのクラスの英語を担当することになりました、ネギ・スプリングフィールドです。様子見て3月末までになりますが、今日からよろしくお願いします」

「はい、その兄のマグ・スプリングフィールドです。主にネギのサポートになりますが、分からないことがあったら聞いてください。じゃあこれからよろしく」

あの転校生が来たときと同じようなテンションを回避するために、殆どすぐに自己紹介をすませる。

しん…と静まり返る教室。

それがいつも巻き込まれることに定評のあるボクが、嵐の前の静けさのように感じてしまったのだ。

……なるほどボクの予感はずがいないんじゃない。

その瞬間、教室が声で爆発したかと思った。

「「「「「かわいいiiiiiiii!!!」」」」」

「「「「「かつこiiiiiiii!!!」」」」」

ああ、絶対に……まちがいなんかじゃなかったんだから……。

余談だけれど、ネギはあの歓声というか叫びというか、まあそれに伴って下りてきたクラスの皆さんにもみくちやにされてました。

ボク？ 14歳は可愛いの対象ではないと思うし教室の教壇の後ろが空いているタイプのもので助かったとだけは言っておきますね。

ネギはスケープゴートにしたけど、明日菜さんのクマぱん事件の借りを返してもらったということにしたいと思った。

第二話 自己紹介などを（後書き）

学校に住むというのは少し変だとは思いますが、場所などは昔先生たちが夜間泊まっていた休憩室のような場所を思い浮かべて欲しいです。

1話 よくある勘違い（前書き）

漢数字は少年編です。英数字では神父編となります。

1話 よくある勘違い

気がつけば俺と言う存在はその世界の1つとなっていた。

その世界、と現すからには世界が複数あることは想像してもらえらるだろう。

ここでのいう世界の数は2つ、今現在俺がいる世界に昔俺が居た世界。その2つはイコールで結ぶことはできず、俺は元居た世界からは切り離された存在だと言えるのだろう。

「…どこだよ、ここ」

視界にいきなり入ったのは月がよく辺りを照らす木の葉、それが目を醒ました瞬間に入ってきたのがそれだと理解すると、光合成をした気が酸素を出しているからか、少しだけ気分が良くなったような気がした。

（葉は夜は二酸化炭素を出します）まあ多分気のせいだろうけどな。

背中からはガサガサという擬音とともに、首筋を辺りの枝がつつく。星がやけに近いと思っではいたが、現在木の上で寝そべっていたとは予想外だ。

「…痛い」

針葉樹なのかよく分からないが、服の隙間の皮膚に葉が当たるせいで、動こうとするたびに地味にチクチクと痛みが走る。

混乱している、まあ落ち着いているように見えるかもしれないが、

俺はかなり混乱してるようだ。訳が分からなすぎて動こうとも思えん。混乱のキワミである。

だからこそ静かにいられたのだろう。中途半端に訳がわからないではなくて、なにもわからないから驚きようがない。

そこで俺は大きく深呼吸をして、今一度辺りの風景を見直した。

今俺は木の上にいるらしい。辺りには同じように木の頭がいくつも見え、辺りは森といったところだろう。

満月がやけに近く見えるのは木の上にいるせいで、木の葉に俺は寝転がっているおかげでなんとか落ちずにすんでいる。

となれば今動くのは間違いだな。下手に動くと落下するだろう。とりあえず丈夫そうな枝を見つけたためそこに避難しつつ、目をつぶり思考を続けた。

目を瞑れば視界は無くなり見えるのは瞼の裏、しかし光がわからないため何も写らない。

だが見えないはずなのに頭の奥になにか引っかかるようなものがある。あると言う事が理解している。

それはパソコンで言う圧縮されたファイルのようで、それは俺の意思という解凍ソフトが無ければ開く事ができないらしい。

らしい、というのは俺自身がそれを元々“知っていた”わけだが、そんな人間に現れない知識を俺が知っているはずがない。だから第三者の形になる。

とりあえずそのファイルを俺は解凍した。

どうやったかは説明できないが…、感覚で言えば忘れていた筈の単語を偶然思い出したような、そんな感じた。

だが俺は忘れていたことがある。
ファイルを解凍する際に気をつけることは、ウィルスのチェックだということ。

その言葉の通り、開いたファイルにあるのはこんな文章だった。

『ダウンロード確認。』

貴方は転生する資格を得て、この世界に転生しました。
身体、精神、および魂の混乱の回避のため、過去の知識、経験以外を除外しました。

以下の経験を追加します

- ・ 型月における七夜の暗殺術
- ・ 思考の切り替え技能

以下の知識を追加します

- ・ 七夜の体術における身体の機動方法
- ・ 投影、強化、解析等の魔術の運用法

解凍から一分後、自動的にダウンロードされます。

外見特徴からの追加技能

- ・ 黒鍵の投合法の知識
- ・ 辛さに対して旨み補正

現在の身体特徴

- ・ 右腕へ埋め込んだ仏砂利での加護
- ・ 退魔衝動の除かれた七夜の肉体
- ・ 衛宮士郎の魔術回路
- ・ 型月における物質倉庫の知識
- ・ 自己に対する幻術
- ・ 現在年齢は転生に限りなく近づけるため、三歳とさせていただきます
- ・ 現在幻術により外見年齢を二十歳となっています
- ・ 四点目につきましては、物質を完璧に理解し、投影が可能となります
- ・ 外見特徴は知識からの検索結果……」

それを最後まで読む事は叶わなかった。

なぜならすでに情報のダウンロードから一分が経過、つまり知識に関する情報が脳内に落とされ始めていたからだ。

知るはずのない事を無理やり詰め込まれたことにより、脳に酷い圧迫を受けるような、そんな状況に陥っていた。

それに伴う痛みは正直訳がわからないの一言につきる。

自我を無くすような程の情報量じゃないのをいいことに、意識が在中でギリギリ気絶しないほどの激痛。それが知識を無条件で手にする条件とはいえ、望んでないのに勝手にやられたほうはたまったものではなかった。

なんとか情報を落とすことは終了し、なんとか辺りを見渡す事が出来るレベルまで頭痛が治まったときは、とつくに木の上から落ちて木と木の間の地面に転がっていた。

いまだに木から木への飛び移り方だとか、魔術の運用法だとかが意識の中に自覚無しに存在しているが、まともに何かを考える事はできよう。

そのため俺が確認した事は、まず今現在どんな姿でいるのかということだった。

理由は極めて単純、どうやら俺の外見のモデルは俺の知っている物語の姿にしているようで、その名前をついさつき確認してしまったからだ。

さて、解かりやすく言うなら格好はぶっちゃけ胡散臭い格好だと言える。

まずは背の高さ。どこからどう見ても大人の姿ではあるが、これは幻術らしい。すぐ解けるしもういちどかけられるため、三歳児の姿は後でいいだろう。

次は服装、これはいたって変人のようで、黒い僧服の上に紺色のコートのような法衣を着込んでいる。

見方によれば神父の姿にも見えなくはないだろう。というか神父にしか見えない。胸には大人の手には小さいぐらいの大きさの十字架が、首から紐を通し吊り下げられていた。

さて、神父と言えば聖職者、無宗教で有名な日本人の俺には縁も所縁も無いと思っている人種の格好だ。

とりあえず、意味不明だよ。なにがって？ なにもかもがさ。

「…なぜだ、なぜよりによってこの男を選んだ。TSではないだけ

まじだろうが、……なぜよりによって言峰なんだあああああ！
」

くう、自分で言ってるんだがなんて素晴らしいダンディボイス！
自分で声を発しているせいで違和感があるが、それが今の俺の現状
がいかれていることを再確認することになった。

姿のモデルとされてしまったのは、言われるまでもなく、型月作品
の某ド腐れ外道神父言峰綺礼その人。

型月作品のFateでは全てのルートでRASUBOSUを勤めた、
俺の中の名悪役である。

いくら自分の姿が神父に見立てたようなものであるうとも、このよ
うな状況に置かれたら神でさえ殺してみせなくなるのは仕方ないだ
ろう。

だって今現在俺の本当の肉体年齢は三歳児らしい。だが三歳児のシ
ョタコトミィなど需要が欠片も見当たらぬ。

憑依と言う現象ではあるが、どこぞの二次創作のイケメンじゃある
まいし、につこり笑ってポツ、通称ニコポなどできん。だっておれ
の外見は言峰だぜ？ そりゃあ確かにかっこいいけどさ。

まあ外見なんて今現在どうでもいいことだ。悩みだとか云々を考え
るのはあとにするか。

今現在俺の状況は二次創作でおなじみの憑依か転生という現象なの
かもしれない。

だが、憑依とはもともとその世界に居た人物の魂と入れ替わることだ。ここが訳のわからない森で、三歳児の状態で、言峰がこの場所にいることがおかしい。まあ一応頭には入れておこう。

次に考えられるのは転生。

これは自分が赤子の状態になって生まれてくるというものだ。

知能の追加、つまり突拍子もない話になるけれど、転生トラック（笑）などに撥ねられて、それで神様に知識や力を与えられてどこか違う世界に送られた……という二流どころか三流の自作小説のような時に多いものではあるが……。

「知能の追加などという馬鹿げた現象が自分に起きたなら、考えられるのはこの線かもしれない」

しかし生まれるシーンが空から落ちてきました、か。どんな神様が俺になにをしてくれたかは知らないが、随分不自由な状況に生まれさせてくれたものだ。

とりあえずこの世界の世界観がなんであるかで俺はかなり行動を考えなければならぬ。

こいつがいたって普通の世界なら万々歳。もしも型月作品などというデンジャラスな世界だったら、自己をそれなりする必要があるだろう。

幸いなことに身体はチートだ。知識だけでなく経験までつけてくれたのだから、よほど酷い状況でなければ……たぶんある程度戦える。恐怖心で混乱しなければだが。

「…前途多難だな…、戸籍もどうにかして手に入れなければならないと、いやまず是人に会わなければ話もできないとはな」

まいったな、とぼやいて天を見る。

いい加減月明かりが綺麗に森に差しているのが見えるが、俺の口から漏れたのは感嘆の息ではなくため息だった。

それにこの世界が普通の平和な世界だったなら、俺の持つチート能力なんてケツを拭いた紙以上に意味が無い。

常人以上の力なんて、それこそ強盗対策か、俺が強盗になるかぐらいしか役に立つことがないのだから。

最後にため息をついてから行動を起こそうとした矢先、

大地を揺らすような爆発音が辺りに響き渡っていた。

俺の脳内に、貴方は神を信じますか？ などという問いが頭をよぎった。

「誰が信じるかクソが。信じて欲しければ戸籍出せ、金出せ、この面倒ごとを消去してみろやファック！」

そこは転生した男が意識を取り戻した場所とは200メートルほど離れた地点にある、小さな広場だった。

木の角度などの問題から見ることでできずに居たが、そこには年齢的には小学生に見える二人の影があった。

片方は少年、利発そうな顔付きにもやはり歳相応の幼さがある、日本的な黒髪の少年だった。

もう片方は少女、やはり外見は少年と同年齢程度に見え、和服である白衣に長い黒髪が少女らしさを減らし、月夜ということもあって美人に見せている。

時刻はもう午後の十時を過ぎていた。本来ならば外へ出る時刻ではなかったのだが、わけあってこの場所を訪れていたのだ。

それは少女の小さなお願いだった。

彼女の父親は魔法使いではあったが、その地域では殆どの人物が陰陽道を学んでいて、彼女もまた未熟とはいえ陰陽師だった。

しかし彼女の父親は家から離れたところで仕事をしているため、なかなか会う事ができないのだが、今日は久々に家に帰ってきたのだ。

ただ単に彼女のお願いとは一つ、父親にナイショで式神である鬼を呼び出せるようにしようと、夜中に抜け出して練習をしていたのだ。

対して少年はそれの付き添いだ。この少年は幼くとも神鳴流という

魔を退治する者たちの流派の剣士であり、その才能もまた常人を一つ頭を突き抜けたものを持っていた。

不審な人物なら普通の者は勿論、裏の筋のものであっても熟練者でないなら勝てるほどの才能をもち、それゆえ少女も少年に頼んでいたのだ。

少年も頼まれたことはまんざらでもなく、万が一が起きても大丈夫であろうとは考えていたのだが…

「ッ！！ くっ……そお！」

甘かった。

少年はその異形の者と対峙する。

それは大人の人間に良く似たまったく別の生き物だ。背丈は大の大人と同等だが、金棒という武器を持つ腕は人間の二倍以上にも見えるほどの筋肉が覆い、腕だけでなく上半身もまた然り。刃さえ通さないといわんばかりの肉体だった。

もつとも、人間でないという決定的な場所は頭部、額からはいびつな形の角があり、その顔も外殻に覆われたような強面である。

鬼、それも制御が出来ていない上に強力な存在で、ただ狂っている有様からはその視線に自分達が写っているかどうか疑問視するほどだ。

少年はまだ少年であつたということか、今まで感じたことのないほどの強大で生々しい殺気は少年を動揺させるには十分なもので、その一瞬で迫ってきた鬼に少年は木へと叩きつけられていた。

常人なら即死、だが少年は氣と呼ばれるものを纏っていたために外傷は少なく、立ち上がって戦いを続ける程度のことは可能だった。

（左腕が… たぶん折れたか）

戦えなくなつたわけじゃない。だが状況は芳しくない。

自分の背には少女がいる。少女を庇いつつ、片手で鬼と戦うのは力不足だった。

それは単純に打ち合うには少年の筋力が足りないというだけの話だ。本来なら知能の低いこの程度の鬼は倒せたのだから。

だとしたら自分にできるのはまずは少女を逃がすこと。

「お嬢様！ 俺がここを抑えます！ 早く逃げてください！」

自分の少し後ろで震えているだろう少女に大声で叫ぶ。

少年は理解していた。どのみちここで押さえなければならない。

あれは召喚した鬼としては異常だった。

本来式神とする鬼は実体がない。致命傷を与えれば有るべき場所へと送還されるために、本体が式神となることはない。

ただし今回は『はずだった』という語尾がつく。

元より呼び出したのは自ら狂ってしまうような力の弱い鬼のはずだ。だが今回は違う、本体を降ろしてしまったのだ。本来式神にした場合の劣化が無く、魔力や気が尽きたら消えるわけではない。

だからあれは此处で止めなければならない。街、いや人が住んでいる場所に逃がしたら被害が出る事は明白であり、二人ともそれは理解していたのだ。

「で、でもそのままやと…」

「大丈夫、俺のことは心配いりませんから！」

少年は無理やり笑みを見せると、少女は泣きそうな表情で怒鳴る。

「大丈夫やない、大丈夫なんかじゃないやないか！ 私はいやや！
このまま詠春くんを見捨てて逃げるやなんて！」

「近衛さ……くっ!？」

少年は急に迫る金棒を太刀で受け止める。

もとより刀は打撃武器を受け止めるような使い方はできない。真正面から行ったら確実に折られるだろう。

だから流れに逆らわずそのまま弾き飛ばされる。

刀に問題はなく、距離もまた取れた。それでも余裕なんて無い。

相手をじつと警戒していると、左腕に暖かいものを感じた。

簡単なものではあるが、少女は治療呪文をかけていたのだ。

骨が折れたのが治るとはいかない。だが痛みは少しだけ治まって楽になってはいる。

「詠春くん……」

少女は不安そうにこちらを見る。

逃げなければ、少女は必ず死んでしまうだろう。そしてここに護れるものは自分しかない。

やるんだ、と少年は一度柄を掴む手を握り、少女に笑みを浮かべて答えた。

「大丈夫、それなら俺が……俺が近衛さんを守るから」

当然だが鬼は律儀に待つてはくれない。

ただ愚直に突進してきた鬼を身体を強化し少女と一緒に避ける。そして静かに少女を地面に下ろした。

速い、だが瞬動らしき移動術は入りも気の練り方もたらめ、だから速くとも疾くはなかった。

本来この程度の鬼に少年が遅れを取るはずがなかった。今回の怪我は完璧な不意打ちと少年の経験不足が原因だったのだ。

だから、倒せる。少年はそう確信している。

少年は空いた距離を一気を詰めて零にし、その勢いとともに太刀を降り下ろした。

少年の行なった歩行は瞬動と呼ばれる、気を使つての高速移動術。

一度入れれば一直線にしか動けず、方向転換が効かない。だが少年は着地地点を長く取り、鬼に特攻するかのように突っ込んだのだ。

威力の嵩増し、右手しか使えない状況で威力を最大にする。一撃で倒し一切の危険を排除する。それが狙いであり、それは目論見通りに成功した。

「神鳴流、斬鉄閃!!」

神鳴流の技の中では、威力は高いものではない。だが現在少年片手で完璧に使えるのはそれだけしかなかった。

だが結果は成功。

たとえ気を纏わなくとも鉄を一刀できるその太刀筋は、鬼の金棒でのガードごと斬り落とすことができたのだった。

やった、と口の中で呟く。

肉を切り裂く手ごたえを手の中に感じ取り、少年は思わず深く息を吐いた。

神鳴流は退魔の剣。ともに決まり斬撃が通ったなら、相手を倒すことができるはずだった。

そう、また『はずだった』だ。

「…………あれ？」

少年はそんな間抜けな声をあげる。

異様な感触、いや感触すら少年は分らず、気がついたら宙を舞っていた。文字通り気がついたら、だ。

やけに宙に翔んでる時間が長い。だからなにが起こったのか確認しようとした瞬間、身体は地面に叩き付けられた。

体の腹部をを挽き肉にされたかのように激痛が走る。

吐き気とともに内蔵から込み上げてくるものを吐き出すと、胃液に混じった血が月の光に照らされて黒い光が反射する。

見れば鬼はまだ生きていた。

深く身体に入った筈の傷からはどす黒い血が溢れ、右手で斬られた顔面を押さえ、左腕をただ暴れるために振り回していた。

あの振り回していた腕に巻き込まれた、油断と偶然が重なり、自分はこうして血ヘッドを吐くになったのか。

また、油断。

実際には斬撃が入った瞬間、反射的に動かされた腕がクロスカウンターのように直撃したため油断もなにもなかったが、それを知る余裕は少年にはない。

少年は静かに理解し、もう一度吐き気と共に溢れる血を口から吐き出した。

「詠春くん!？」

少女が駆け寄ってくるのが分かって、来るな、の一言さえも言えなかった。

少女は少年の身体を起こして手を握り、治療呪文をかける。

傷が深い。肋骨は何本か折れた。痛みで力も入らない。

だがそれも無理はない。彼ほどの年齢では気があることから、実戦で受けた怪我など大きいものでも打撲、骨のヒビが精々だった。

痛みに馴れるわけがない、それが油断にも繋がったのだが、既に後の祭り。

鬼の視線が此方をとらえる。

傷を付けた敵に対して殺気を高め、それはそのまま身体を動かす勢いに変わり、此方に向かってくる。

殺される。

殺される、間違いなく殺される。

それでも痛む身体を無理矢理動かし、少年は少女を庇うように覆い被さった。

「成る程、まだ闘志があるとは喜ばしい」

その声はどこまでも重く、静かな口調で辺りに響き渡った。

なにも起こらないことが違和感となり、少年は身体を再度倒し、少女は瞑っていた目を恐る恐る開く。

そこには、鬼がいた。

だが数秒前と違うところと言えば、月の光を反射して光る銀色の剣が鬼の頭に植えられ、それは腕、腹、両足、と的確に突かれていることだろう。

頭を腕で庇ったのだろう。ちょうど線を繋げば三角形になるように両目と喉を狙われた場所に、剣が突き刺さっていた。

「
——ッ——!!」

声にならない叫び声が辺りに響き渡り、それでも新たに視界に入ってきた男は何でもないように、静かな足取りで鬼の元に近づく。

恐らく二十代ほどの成人男性だろう。

その後ろ姿は黒の僧服に紺色の法衣を着ていると言うこと以外は、目立つところの無い普通の人間に見える。

だがそう見えるだけだ。異常なほど静かに、足音もせず、そこに本当にいるのかも不安にさせるほど少ない気配でだ。

さらに両手に三本ずつ、計六本の剣を指の間で握む様はさながら白い爪を持った怪鳥のようで、無意識のうちに少年の身を震わせてい

た。

鬼は目で射殺さんばかりに男を睨む。

しかし恐らくその視線の先に見えたのは、今にも目を貫かんと飛来する剣だった。

生きてたもう片方の腕で防いだその剣は当たり前のように突き刺さり、手に持っていただろう残りの剣も、それぞれその役割を果たすように体の節へと刺さっていた。

「ほう、流石にこれは堪えるか。ならばその苦惱、私が解き放とう」

——
告げる

少年にとってその光景は、神父と言う姿の者が行なったこととは対照的に、慈悲など微塵に感じられないものだった。

新たに放った六本の剣から一斉に炎が溢れ、その身体を焦がしていたのだ。

悶え、苦しむ。そんな姿に嫌気が差したように、その男は新たに剣を作り出し、止めと言わんばかりに投合する。

頭があつたであろうところにその剣は吸い込まれ、完全に鬼を沈黙させた。

動かなくなった死体を炎はあっという間に燃やし、黒い炭の塊に変化させたのを見て、少年はこう思った。

火葬、さながら異端者を殺す執行人その人ではないか、と。

その男がこちらにゆっくりと視線を向ける。

そこに見える人間は少年にとって神父などというものには見えなかった。

少年は何とか立てる程度に回復した身体を立ち上がらせると、剣を持ってその男と対峙した。

1話 よくある勘違い（後書き）

バトル成分が少年編だとなかなか出ないので、こちらは補う形で行なっています。

少年のほうの名前はどっかで聞いた事あるかもしれませんが。

少女の方はオリキャラとなりますが、べつに物語に深く関わるわけでもありません。まあちよくちよく出てはきますが。

テンプレを打ち砕こうとした結果がこれになってしまったようです。

第三話 マギ・スプリングフィールド（前書き）

二話に分けるつもりが合併してしまいました。

少年編は最初はほのぼのなので勢いがありませんが、それでも暇を潰せてもらえれば嬉しいです。

誤字などあったら報告お願いします。

第三話 マギ・スプリングフィールド

「マギはネギのことが好きなのだな」

「？ ネロさんって変なこと言うんだね。兄弟同士仲が悪いことってあるの？」

「さて……世界は広い。それゆえ私としては非常に残念なのだがあるのだ」

やれやれといった様子でネロさんはタバコに似た魔法薬に火をつけた。

甘いような苦いような香りがするその灰色の煙は、ゆらゆらとタバコの先から空に昇っていく。

最初は苦手だったその臭いも別に身体に害が無いと分かった瞬間に、そんなに嫌いじゃなくなった。

第一その臭いもネロさんを構成する一部だと分かるから、それを含めてボクはネロさんが好きだった。

ただ僧服とカソックを来て、首から十字架の首飾りをしているバリの聖職者のような見かけの人が、不良みたいにタバコを吸っているのは違和感がありすぎて寧ろ似合って見える。

「はー、今は別に良いが年齢重ねたらあんまりだれにでも好きって言つのを止めておけ、特に男には」

「どうして？」

「そうだなあ……私の出身国だと稀に腐ってる女という、男同士の恋

愛の漫画を鼻血をたらすほど興奮して読む女もいるのだ」

腐ってる女の人？ たぶん比喻表現だとは思うけど…なんなんだろう。

「でも、男同士でも互いに好きなことはあるんじゃないかな？」

「ふむ、それがライクならかまわない。価値観がラブなのはレッドラインだ。私も若い頃ははいじり…いや、ふざけて男色があるようなことをしていた記憶もあるが、友人に変態と言われて殴られていたよ」

「？ 男同士で愛してる？へんなの」

「ああその通りだ。しかし私は神父であるが故に隣人を愛さねばならぬこともあるのだが」

グシャグシャと頭を撫でる手は凄くゴツゴツしていて、少しでも苦い匂いがしたけれどボクはその手で撫でてもらうのは好きだった。無骨で気遣いもないような乱暴な手つき。それがボクにとって凄く優しく、想いの籠ったものではないかと思う。

「でも、なんでネロはそんなことを聞くの？」

「ん？…ああ、兄弟が仲が悪いと言うならば、大抵はどちらかの才能に劣等感を持つことが多い。有名な漫画のかませ犬も『兄より勝る弟などいねえ！』と言うほどだ。だからマギはネギのことをどう思うかと考えてな」

うん、たしかその問いにはこう答えたんだ。

「ボクはネギが好きだよ。大事な家族だし、神様にも誰からも羨むような凄い才能をネギに与えてくれてありがとって言いたいぐらい」

それをネロが聞くと、一瞬呆れるような顔をして、ボクの頭に手を乗せた。

そしてまた無骨な手つきで頭を撫でながらこう言った。

「マギは強いな」

「そうかな？ ボクにはよく分からないや」

「いや、分からなくともかまわない。ただ、誰がなんと言おうがお前は誰よりも強く、優しく、才能があると私が保証しよう」

そういつてぐしぐしと髪の毛を弄るネロの言葉が嬉しくて、ボクも久しぶりに心から笑ったような気がする。

多分ボクはその姿を、一度も見たことのない■ギお■さんに重ねていたんだ。

第三話 マギ・スプリングフィールド

マギです。

源先生が治めてくれたお陰で形式的には授業にもってけることができました。

だけどやっぱりネカネさん属性があったらしく、少しだけ怖くなってきました。

授業はネギの身長が少し足りなくて台を借りた以外は、わりとサクサクと続く…わけでもなく、まあ色々あったね。

質問を受ける場面ではまずはネギに質問が集中しているときはいいけど、こっちに興味が湧いてしまったらもう大変。

興味心に煽られたのかどうでもいいことまで聞かれることになってしまった。

ただ、頼にある紅葉はどうしたのかという質問には、名誉の負傷ですと答えておく。

明日菜さんが少しだけホツとしたような気がしたから目を合わせる、すぐにプイッとそっぽを向かれてしまいました。

まあとりあえず授業は進んだし、明日菜さん消しゴム珍事、少しだけ暴走ぎみの委員長さんの雪広あやかさんと明日菜さんがキャットファイトをしてしまうなど、少しだけ教室を揺らす事件があったぐらいで何事もなかった。

うん、何事なんだと思うけど少しぐらい現実逃避したってバチは当

たらないさ。うん。初っ端から授業崩壊という学級教育崩壊現場を確認してしまった。

ボクといえば、まずは先程から見忘れていた名簿表を確認することや、進行に合わせた授業等を考えてノートに纏めることだった。

ネギは恐らく授業のことではいっぱいだろうから、ボクは第三者から見える授業の様子や授業の仕方などをノートにとった。

気がついたことは色々あるため、ノートもなかなかの勢いで埋まっていく。

恐らくボクのこれからの仕事は、対話文の相手や個人的に質問したいことなどを教えること、あとは授業とは別にプリントを作ったり、小テストの丸付けなどだと思う。

あとは気になったことの確認ぐらいかな。

とりあえず授業で行われている…もとい、授業と言う名のリアルファイトのせいで殆ど確認はできなかったけど、少し気になることがあった。

殆どの人はリアルファイトを煽っている。

だけど何人かはやれやれと言った視線でそれを見ているのだ。えーと桜咲さんとか龍宮さんとか長谷川さんとか。

ザジさんは…わからない。操草さんも…わからない。表情から読み取れないって怖すぎる。

まったく興味が無いといった様子で空を見ている人がマグダウェルさんだね。名前覚えるの難しい。まずは気になった人から覚えよう。

まああとはマグダウェルさんがただ少しどこかこの教室と“ずれて”いるような気がするけど…。立ち振る舞いというかなんというか

…ありきたりに言えば直感で。

べつにただ無視している人なら他にも何人かはいる。だけどその姿が目に入ったのは、どこか昔の自分を見ているような気分させられたからだと思う。

ほんの少し前、ボクもあしてクラスの皆とは交じり合わず、ただぼんやりと空を眺めているか魔法以外の知識を蓄えることぐらいしかしていなかったような気がする。

こう考えては少し悪いような気がするけど、やっぱり他の人たちとは少しだけなにかがずれているような気がする。

これは多分確信。ネギもボクもすこしだけずれていた人物だったから、それはなんとなくだけど分るような感じがした。

「マクダウエルさん…か。今度話してみようかな」

思わずボクは呟いていた。

これは受け売りだけどネロさんに、“どんな事象にも極めれば犯罪だし、元をたどれば必ず解決できる”という言葉聞いた事がある。

だからどんなことでも絶対に解決できないなんて事は無い、と言われた。

自分が知っている分なんとか楽しくできたらな、とボクはそう思っ
てノートに目をおろし…

「っ！」

背筋が凍りつくような思いをしていた。

心臓を冷たい手でわし掴みにしたような、今にも止りそうな心臓を再起させる為に激しい鼓動が耳に響く。

なんとなくコレと似たような感覚を感じたことがある。固有名詞でいうならコレは殺気だった。

ボクはすぐに物音を立てずに席を立ち、右手を手をかぎ爪のように固定し腕を下げた。

魔術回路は正常、すぐに起動可能。身体能力に欠如なし。

気、正常、一瞬で身体強化は可能。敵の特定は不可、薄く気を身に纏い身体強化をしつつ現状維持。

戦闘、主用武器の欠如、最適な戦闘は不可。投合と体術を主体に教室を…、いや…

そこまで思考をすすめていた脳を一旦沈めてボクは肺に詰め込んでいた空気を少しだけ洩らしていた。

ここで戦う？そんなのありえないにきまつてる。

第一魔法の秘匿はどうする？周りの被害は？そもそもここで行動を起こして騒ぎを出さずに済ます事ができるのか？

それに、タカミチや学園長のいるこの学校で行動を起こすなんて下手な真似はしないはず…。

気の身体への補充の停止、一瞬の殺気でボクだけに抑えたのか、その出所が他に気が付いた人が居るようには見えない。

たいていの人は明日菜VS雪広制限時間一時間目終了一本勝負に目が行っている。

だが気を纏ったことに気が付いた人は何人かいたのだろう。視線を感じたけどすぐになくなった。

でもその殺気が誰なのかが分からない。それでもボクは、彼女と視線が合ってしまった。

（聞かれていた？）

そうとしか思えず、背中から滝のように溢れる冷や汗を笑うように、先ほどの何もかも無関心だったように見えた彼女とも違う。

そうして目が合ったエヴァンジェリンさんは、面白いものを見つけた子供のようにこちらを見て口元を吊り上げた。

授業が結局收拾が付かないまま終了し、ボクは先ほどの殺気について少しだけ思案していた。

考えは三つ、一つ目は第三者が外からボクに直接殺気を浴びせた。二つ目はクラスの中の誰かがボクに殺気を浴びせた。三つ目、ボクの勘違い。

三つ目はともかく残りは嬉しい状況じゃないよね。ここはたしか凄く警備がしっかりしているから殆ど一つ目は無い。

だけど…二つ目だとしたらやっぱりエヴァンジェリンさんなんだろうか。だとしたら何故？そんなにボクが気にするのがいやだったのだろうか？

「考えてても仕方ない、かな」

で、今現在は職員室に至る。

様々な雑務、主に書類の作成などだけでもパソコンを完璧に使いこなせないボクにはハードルが高いし多すぎる。

手書きの小テストとか宿題ってボクぐらいしか作ってないみたいだし、機会があったら作れるようにしたい。

まあそんな問題はさておき、今はただ終わったことの喜びを楽しみながらぐったりしよう。

なんか瀬流彦先生やしずな先生が苦笑してるけど、このぐったりだけはやめられない。

今日はすることも特に無いだろうし、あとは帰宅して荷物を整理するだけだろう。それを考えると少し憂鬱になった。

「こんにちは！失礼します、 あっ！ いたいたマギ先生、今って時間有るよね？」

と、そんなボクのぐったり時間を無駄ア！と刈り取ってしまうのが生徒の無邪気と言う名の怪物ですね。

しかしこの声は恐らくは生徒であり、ボクは教師として上に立つ者ですから、こんなナリをして対面しては失礼だね。

「えっと今ですか…大丈夫ですけど。 え〜と貴女はたしか出席番号3番の……………」

「そう！、朝倉和美、しがない学校新聞をしている報道記者ってやつです」

と、ボクが思い出そうとする前に朝倉さんの方からやれやれといった様子で腰に手を当て答えてくれました。

髪を後ろで纏めてあげて見せているところなんかから、活発そうな性格なんじゃないかと思った。

それでも報道記者というぐらいだから、ところどころ冷静だったりするんじゃないか…と、そこまで人物像を想像して、ボクは軽く目を閉じた。

目の前にいるのにその人のことを考えなくてもいいか。

「えっと、ではその報道記者さんがボクに何か御用ですか？ ボクはまだ犯罪は起こしてないと思いますけど？」

「まだっていうのは発言的に結構やばいよ？ と、自己紹介が悪かったかな。ちょっと理由はいいないけど…まあなにも言わずに着いてきて欲しいんだよねえ」

ほんの一瞬の出来事だった。

ボクがちよっとだけ呆けている、隙にボクの手と鞆をとって廊下まで出されていたんだ。

一瞬の早業、超能力だとかそんなちゃちいものじゃなくて、暗器術かと思わせるほどの手つきには感服したくなる。

一応職員室を出る前に、お疲れ様でしたー、と挨拶したけど、瀬流彦先生と新田先生が苦笑いをしながら返事を返してくれた。

と、そんなことで一瞬で廊下を歩くはめになってしまったのは、もうなんもいえません。

うーん、まあ現実逃避はやめておこう。

「さてさて、いやー先生を呼びにきたって言うのもあるけど、ちょっと質問させてもらっよ？ マギ先生」

ものすごい良い笑顔で朝倉さんは歩きながら質問をしてきた。

「は、はあ。ですけどなんでまた…、授業前に結構聞かれませんでしたっけ？」

「いやいや、マギ先生たちに結構質問がとどいてんのよ」代表して

聞きに言っつていうのが。マギ先生にネギ先生のこととか、兄弟の目でみたイイネタあるんじゃないかってさ」

ほう、素晴らしい。つまりボクにネギのことを聞きたいと。

いいでしょう、ボクにネギのことを語らせたら、一晚寝かせない自身があります。

ちらりと朝倉さんの視線を向けると、偶然視線が重なり、朝倉さんはパツと笑顔を見せた。

「いやいや、こういう本人じゃなくて第三者からの情報は信憑性が無いんだけど、やっぱり大衆民衆のニーズにはこたえないといけないじゃない？ 協力してくれるよね？」

信憑性が無い？ このボクの、ネギに対する、情報で？ ここ二年までの中なら、ネギのことは大抵は分かる。

それに対して信憑性が無い、と。ブロン期間は終わりで、今日からは一応自立した人間として見ると決めているが、それまでの期間のことを言われるのはゆるせない。

だがそれなら、嘘を入り混じろう。その信憑性の無い話をどれだけ信用するか、その腕にかかっているのですから。

「ふ、甘いですね朝倉さん。いいでしょう、なんでも話しますよ？」

ネギの好物や穿いているパンツの色から女事故の数まで全て。ボクの情報は噂のような、そんなつまらなく甘いものではないですよ。もっとも、全て本当かどうかは分かりかねますが。……ついてこれますか？」

「…ふ、マジ先生。そこに嘘と本当が複雑に絡み合ったネタがあるのなら、何を使ってでも仕分け、そして感動するのが報道記者の仕事だよ！、先生のほうこそついて来なさい！」

でもぶっちゃけその話のネタはネギなわけで、ボクにはあまり被害がないんだよなあ。それにちょっとだけ誇張表現があったような気もするけど気にしない。

ただし、その後創られた新聞をネギが読んで追いかけられたのは予想外だった。

さて、しばらく質問と応答の牽制をしつつ廊下を進むと、A・2のクラスの前で、ちょっと待ってと待たされていた。

暫らくするとネギと明日菜さんが来て、教室に入ることになったんだけど…

『麻帆良にようこそ！ネギ先生＆マギ先生！！』

と、いったいなんの騒ぎかと思ったら、ボクたちの歓迎会を開いてくれていたらしい。

正直そういった会を開いてくれた事は凄くうれしかったし、ネギも驚きと感激が入り混じっていたのは分かったけど、すぐに騒動の中心になりました。

先ほどの朝倉さんとの会話で体力やらなんやらを使い切ったボクには、正直ついていけそうにありません。というかノリが良すぎるこのクラス。

だからボクはというと…

「このノリはついていけないよネロ…ネカネ姉さん」

「はは、お疲れ様。たぶんマギ君は書類の処理の方かな？ 瀬流彦くんが疲れてるんじゃないかって心配してたけど」

「えーそうですね高畑先生。精神的にすこし来てますけど、特に問題は無いと思います。ああ、源先生も整理しやすいプリントをありがとございました」

「ええ、どういたしまして」

先生達と一緒にのテーブルに座りぐだーっとしていた。

だつて凄く疲れたんだから仕方が無い。

何なんだよネギ、なんだよ『ま、魔法使つてるとこばれちゃった！』
つて。ボクを一日目から心労で胃に穴をあける気か？ どうしよう
と言われてもそれは本人同士で話し合うしかないから、どうしても
駄目なら誰かに記憶を消してもらうしかないよ。

まあ一応そういったからあとはなんとかすると思う。過保護イクナイ。

「今日は迎えにいけなくて迷惑かけたね。初授業は大丈夫だったかい？」

「ええ、ちよつとしたキャットファイトがある以外は。元気なのも
少し行き過ぎると疲れますよね。日本茶が飲みたいです」

どうぞ、としずな先生がお茶をコップに注いで渡してくれた。そう
いう意味じゃなかったけど、喉が渴いてたからちょうどいい。

「マギ先生はあの中に混じらないの？ネギくんはもうクラスに馴染
んでいるように見えるわよ？」

しずな先生がネギを一目見てからボクに話しかけた。

その視線の先はもみくちやにされたり、宮崎さんにお礼を言われたりするネギの姿がある。

あれはいわゆる学校でいう転校生が来るときのノリだろう。

みんなと仲良くなりたいとは思うけど、あれは嫌だな。…にぎやかなのは嫌いじゃないけど得意でもない。

「源先生はあの中に入りたいと思いますか？ あ、異性に、もみくちにされている状態のネギの場所へ」

ボクは不思議だと言わんばかりにしずな先生に尋ねた。

その意味を読み取ったしずな先生は、少し冷や汗をかいて一言、

「……ごめんなさい」

ボクはいいですよと答えてから目の前の紙コップに入ったお茶を口に含んだ。苦かった。

まああれはボクも嫌だから言いたいことは察してくれただろう。

あのネギの立場になりたいですか？

そりゃあ普通にもみくちやにされるぐらいなら構わないけど、全員女子生徒となるとちよつと話が変わってくるかな。

ネギを見てれば女性のトラブルに巻き込まれそうで、少し遠慮したい。だからアーニヤがむくわれないんだ。

「このクラスは元気な子が多いからね、やっぱり少しは不安かい、マギ先生？」

そう話しかけたのは、さっきぶりのタカミチ。

両手を組んで軽く辺りを見渡す様が、なにかを懐かしむ大人の雰囲気を感じさせる。

確にかっこいい。未だに独身なのが信じられないと思う。

「少し、不安ですね。どう接していけば良いかはよく分からないから、あの中に進んで入るうとは思わないです。まあ他にも理由はありますけどね」

ボクは視線を騒動の中心に向ける。

雪広さんと明日菜さんが また懲りずにキャットファイトを行っているのを見て、タカミチもしずな先生も思わず苦笑した。

この馬鹿お猿！

馬鹿って言った方が馬鹿なのよーっ！

という感じのがケンカ…もとい、キャットファイトの始まりらしいです。

「あらあら」

「ハハハ…、ネギ先生はもう馴染んだみたいだね。マギ先生はゆっくりと打ち解けていけばいいんじゃないかな？」

目の前で行われていることを無かったようにタカミチとせずな先生は話を進めた。

ボクもそれに賛成と言うことで話を続ける。

「焦ることはありませんね。マギ君はマギ君のペースがあるんですから」

「そうですね、ありがとうございます源先生。

でもやっぱりネギは凄いや。遊ばれてるみたいに見えるけどもうクラスに馴染んでいるんだから」

そういうネギはそのケンカを止めようと四苦八苦しているけどね。

ボクは少し目を閉じて昔の事を思い出す。

思えばネギは弄られやすく、撫でやすく、モテやすい完璧な子供だ。純粹のところとか、そこから派生した愛くるしい動作だとか、礼儀正しいところだとか、兄のボクでさえネギのことは好ましいと思うてしまう。

「確かにネギ君は礼儀正しいし、弄りやすいつてところもあるかもね。マギ先生は自然体に隙が少なすぎるんだと思うよ？」

「やっぱり高畑先生もそう思う？でもネギは可愛いし流石だなと思うな」

「ですって。どうしますネギ先生？」

へ？ ネギ？

ふとしずな先生が声かけた方向を見る。

そこには少し顔を赤くしてなにやら言おうとしているネギの姿があった。

「ま、マギ。ボクは男だし可愛いはちよつと恥ずかしいよ」

「ん？そうかな。けどほら、ネロが『君にふさわしい衣装はこれだ！』って言うって着させたスカートが凄く似合ってたような気がしたから、可愛いの方が似合わない？」

「に、兄さん！？」

思わず叫んだネギだけど、少し遅かったのか彼の後ろの生徒さんたちは見逃さない。

キュピーン！ という音が響きそうなほど目を輝かす人もいれば、委員長さんのように想像して鼻血を出す人もいる。

まあ明日菜さんだけはなにやらネギに熱い視線を送っている。

「なにやってるんだあの人は…」

タカミチは額を押さえてそうばやき、そんな様子を見てしずな先生は、あらあらと苦笑した。

うん、その後？

再度もみくちやにされそうだったネギを救出したせいでボクに質問が飛んできたのは言うまでもなかった。

そんなボクを苦笑して眺める先生二人が少し恨めしかったけども、みんなとの距離を少しだけ縮められたのが少しだけ嬉しかったかな。ネギ？なぜかは分からないけど怒ってた明日菜さんを追いかけてた。魔法がバレたのは彼女だったから仕方ない。

余談としては宮崎のどかさんがネギの好きなモノはなにか聞いてきたのが印象的だった。日本のお鍋と答えると、なにやら悩んで行ってしまった。

あとは朝倉さんが『ネギ先生の小さいころの写真ある？』という質問に、あるよ、と答えてしまったのが失敗した。

見せて〜！ と迫ってくる皆が物凄く怖くて、思わず下敷きに挟んだ一枚の写真を見せると、欲しい〜！ という叫び声に変わってすぐに鞆に戻した。

『言い値で買おう！幾らで譲ってくれる！？』と某白竜を見つけた社長のように迫る皆に、『ふふん、ネギの写真の価値が十や二十程

度だと思っ?』と言ったら雪広あやかさんが人をビンタできそうな札束を目の前に突き出した。

流石に引いたのでやんわりと異なったらマジ泣きした。

ボクにどうしろと言っのだろう…。

まあそんな混乱の中だったけど歓迎会も終了して解散した。

ネギと明日菜さん、それに木乃香さんにネギを任せて、ボクは理事長に貰った使われていない相談室に向かう。

そこは大きさは八畳程の空間で、隣の小さな部屋に入るためのドアが1つある。この部屋がボクの部屋らしい。

ダンボールがいくつか山になってるけど、とりあえずボクがやらなきゃしかたないよなあと、ため息をつきつつ、ボクははさみを隣の相談室から借りてきた。

s a i d ネギ

「じゃあ迷惑をかけるかもしれませんけど、ネギをよろしくお願いします」

寮の手前で兄さんは明日菜さんと木乃香さんに一礼すると、頑張れ

よ、と僕の頭を撫でてくれた。

そうして立ち去る兄さんに明日菜さんは軽く手を振り、木乃香さんも、また明日な、お辞儀をしていた。

僕の頭から離れる手が少しだけ寂しいと思ったけど、これから僕も先生としてみんなの前に立つんだと思うと、ずっと兄さんといっしょにはいられないと思う。

でもやっぱり兄さんだけ違う部屋が取れたと言うのは、ずるいんじゃないかと僕は思った。

「なんていうか、あんたのお兄さんってちょっと変わってるわね」

寮の二人の部屋に向かう最中に、明日菜さんはふと思い出したようにそんなことを僕に聞いてきた。

「そうなんですか？ マギはマギだから誰かと比べたことがないからよく分らないですけど……」

「んゝネギ君は確かにそう思うかもしれないなあ。こう言ったらなんやけどマギ君は全く隙がないんやな」

隙……ですか？ 確かに兄さんは私生活でもネ口に茶化される隙を全く与えない……代わりに僕がいろいろ巻き添えをくらったんだっただけな。兄さんにはなんの被害も無いのに。

「ああ武道の隙とかそういうのとちゃうよ？　なんというか…ほら、ネギ君は自然体やけどマギ君は自然体の上にゼリーの膜みたいのがあるというか…、密着しようとしてもできへん感じやな」

「ごめん木乃香それじゃ全くわかんないと思う、伝えたい事はなんとなくわかるけど私も理解できないし」

他人と距離が少しある、ってことかな？

ずっと前、兄さんはボクに冷たかったこともあったけど、一度あるできごとがあつてからはそんなこともなくなっていたからよく覚えていない。

正直、魔法学校に入ってから僕は兄さんとはあまり話さなかったような気がする。

家に帰って食事の時に話したりするけども、確実に量は少なくなっていた。それに……。

けど、兄さんは兄さんのままでなにも変わっていない。だから明日菜さんと木乃香さんの話はあんまり実感が湧かない。

「ほら、マギって少しだけ必ず距離をおいて、何処かに壁を作って私達と接している気がするのよ」

「うーん……やっぱり実感が沸かないなあ。例えばどんなところですか？」

僕がすこし悩んで明日菜さんに聞くと、少し考え出して口を開いた。

「例えば……私達を名前で呼ばないところよ」

そういえば、と僕もその言葉をたよりに今日の事を思い出す。

兄さんは、たしかに誰かを呼ぶときは苗字で呼んでいた。それがどんな例外も無く。

明日菜さんも、木乃香さんも、ほかに親しくなった人も、僕以外の人は…

「そういえばそうや、近衛って呼ばれたのって随分久しぶりな感じがしたなあ。名前でもええよって言ってもそう呼んでたなあ」

「大人びてる、って言えば全部なつくいくけどさ、あいつだって私達と同じぐらいの子供でしょ？ なーんか悔しいのよね」

その言葉を聞くと再度兄さんのことを思い出して、不思議だなあ、と思ってしまった。

兄さんは大人びている。そんなことは当たり前だと僕は思っていた。だけど兄さんは僕よりたった二つしか違わなくて、それなのに誰よりも落ち着いて物事を見ていたような気がする、いや、していた。

僕は、自分が思っている以上に兄さんのことをしらないと思う。

「だけど、やっぱりマギは僕の兄さんだから。変だとかそんな事は思わないし、そういうのも含めて僕はマギだと思います」

「ふふ、マギ君のこと好きなんやな」

「はい、もう凄く前のことなんですけどね、兄さんが僕を助けてくれた事があつたんです」

それは僕が二歳ぐらいの記憶。ほとんど覚えていないことだけど、そのときのことだけははっきり記憶に残っています。

その日は凄く寒い冬の日でした。

辺りは真っ白な雪景色。

兄さんといっしょに外に遊びに出かけたときに、ちょっとだけ失敗をしてしまいました。

足を滑らせて、川の中に落ちてしまったのです。

そのときの川は当然凄く冷たくて、当然のように僕は溺れかけていました。

（ぴんちになったらとうさんがたすけにきてくれる）

そんな事を考えても、やっぱり助けに来てはくれなくて、僕が意識を落としたときに見えたのが兄さんだった。

その頃の兄さんはまだ今ほど優しくは無く、表情の変化をあんまり見ることがなかった。

それでも僕が川に落ちたのを見て、なんの戸惑いもなく兄さんは川に飛び込み溺れる僕を抱えて岸に上がった。

そのころはまだ気を纏えるわけでもなく、僕と同じ子供だったのに。

そこからの事はあいまいで、背負われているということ以外は何が起こっているのか分らなくて、分るのは身体を暖かくしてベットに横たわった時に、兄さんの顔が見えたことぐらい。

怒るのかな、そんな事を思った僕にマギはこう言った。

「大丈夫？」

ただ一言だけ。

あっけにとられていた僕はただ頷くことしかできずにいた。

「そっか、無事でよかった」

そう言つてマギは僕の頭を撫でてくれた。

びっくりするほど冷たい手だったけど熱があつた頭にはそれがどこか心地よくて、それがマギが初めて僕の頭を撫でてくれた時間だった。

そして、その顔にはにっこりと微笑むマギがいて、兄さんがとても

優しい人だと気が付いた瞬間だった。

「ってことがあったんです」

僕が話を終えると、なにか二人は放心状態で足がとまっている。
そして再起動したのは明日菜さんが先で、少しだけ納得したような
顔をしている。

「なるほど優しい、か。見方によってはそんな風にもたしかに見え
なくもないわよね」

「そうやなあ、良いお兄さんを持ててネギ君は幸せ者や」

「まあその尊敬するお兄さんの大人らしさを少しでもあんたが吸収
できればバランスがいいのに」

そんな風に言う明日菜さんにむっとしつつも、僕は兄さんの事を思
い出した。

兄さんは優しい人だ。誰よりも他人のことを考えて思いやる。その
姿が僕はとても綺麗だと思った。

そしていつも僕の少しだけ前を苦笑しながら歩いてくれている、僕
が二番目に、父さんの次に尊敬している人。

それが、マギ・スプリングフィールドという人間だった。

第四話 家名と名前（前書き）

しばらくほのぼのが続きます。

のんびりとしていってけると嬉しいです。
では、どうぞ。

第四話 家名と名前

「ネロってさ…エセ神父？」

「かはっ！…さてマジよ、どこで覚えたんだそんながさつな単語。私がマジに言っただけでネカネさんにボコされそうで怖いのだが」

「うん、ネカネ姉さんが言ってた」

そこはいつもの森だった。ボクが学校の授業をサボって森まで来ると、その中の川で釣りをしているネロを見つけてそう思った。

ネギはネロのことを近所のおじさんだと考えていたけど、あんまり積極的によっていくわけじゃない。

ネギはネカネ姉さんと、ボクはネロとよく話していたから、その辺が分けられていると思う。

それに、ただ単純にボクもネロをネギに取られるのがいやだった、子供のときの独占心だったんだと思う。

それを知ってかネカネ姉さんもネギも、ボクがネロと一緒にいる事を特に何も言わず、放っておいてくれたのが少しだけありがたかったりした。

「ふむ、聞きなれた単語だが子供にはつきり言われるとかなり傷つくものだろう。無垢な子供は容赦なく心にナイフを突く……恐ろしいものだ。さておき、マジはどうしてそう思う？」

「だって神父の癖に魔法使うし結界使うしタバコ吸うしご飯のとき挨拶に神様に一言もなしだし、なにか変な事があるとすぐに神様の

せいにするし」

ボクがそこまで言うてぐおおおとなぜか悶えてごろごろとネロは転がっていた。

どうでもいいけどそれをしてるのがカソックと紺色コートだからシユールだといわざるを得ないと思う。

「ふむ…、神とは基本的に偶像だろう？ 過去にそのせいで多くの人が救われたとはいえ、多くの人が死んだ。これはとある本の名言なんだが、人間とは正義のためにならどこまでも残酷になれる生き物だ。だから正義の木偶になる神を私は信じるつもりはあまりないな」

「む、そういうならボクも信じない」

「そうか、そういうなら都合の悪い事だけ木偶のせいにすればいい、私はそうしてる。日本人らしい考えだと言われればそうだが」

「それは…やめとくよ。ネカネ姉さんに怒られそうだし」

「……ああそうしてくれ。よくよく考えたらそんなことをマジに教えたと言われて私も怒られたくは無い。もう顔に靴跡をつけられたりフライパンをくらうのは懲りているのだ。反省はしないがな」

ため息をつくネロの背中に哀愁が漂っているのがはっきりと見えて、ボクには珍しくネロを同情した。

ネカネ姉さんが張っちゃける相手ってネロさんぐらいしかないからストレス分も上乘せされていたんじゃないかな？

「まあ、私が神父っぽい格好をしているのもしつかり理由があるのだがな」

「うん、そうじゃなかったらネロがしつかり神父やってるところなんて考え付かないもん」

「…さて、だんだんマギの私に対するイメージが酷い事になってる気がするのだが私の気のせいであってだろうか？」

「うん、たぶんあつてるよ。だって最初の厳格そうなイメージとか物の十分で崩壊したんだから、いまさら気にする必要も無いと思うけどな」

「チツ、良い性格してる。まあいい、今日も腕のほうは回路とかは大丈夫か？」

と、ふざけた態度から一変して、真剣な顔付きでボクに問いかけた。

それを軽く手をあげひらひらさせて大丈夫だと伝える。

「さてと、では今日も簡単な鍛錬でもするか」

「おす、ネロ」

焚き火を踏み潰し、ネロはボクと少しだけ距離をとる。

簡単な戦闘訓練、だけど身体を動かす事が好きなボクは魔法の授業よりも何倍もコレが面白くて、ゆっくりと身体の魔力を右腕に集中

させた。

身体の中に魔力で出来た線を感じる。
そこをこじ開けるように魔力を通し、イメージ、いや設計図を頭の中から落とし作成を開始する。

右腕がナイフに刺されたように痛い。だけど現実で無いと意識を頭の後ろに持っていく、その警告を無視した。

材質から寸法、密度に質量、形に至るまでの完成品を最初から頭の中に存在していた幻想を物体として現世にとどめる。

これはネロさんが言うには“投影”というおそらくマイナー中のマイナーで、使ってる奴はいるはずが無いという魔法らしい。

本人は魔術と言っているけど違いが分からないため、魔法で統一して、ついにはネロも諦めたようだ。

そうしてイメージを転送し、かぎ爪のように構えた腕の先にその剣を投影した。

黒鍵、と呼ばれる剣らしい。なぜかは理由は分からない。気が付いたら最初からその設計図だけは頭の中にはつきりと存在し、この右腕にあるという魔術回路というのも、気が付いたら存在していた。そいつはお前にしかない才能だ。大切にしとけ、いつか役に立つこともあるだろう、と。ネロは言い、ネカネ姉さんやアーニヤ、ネギもそれに賛成した。

だから痛みが伴ったとしても、ボクだけの才能というのが少しだけ誇らしかった。

少し、気分が高まり、思わず剣を強く握っていた。

「ふむ、エモノも用意できたのだ。さて…」

そついつてネロさんはタバコを上投げ……

「命を賭ける。あるいは、この身に届くかもしれん」

ボクは足を踏み出した。

第四話 家名と名前

翌日は最悪の寝起きだった…。いや寝てないから寝起きというのは完璧に間違っている。ボクは切実に思う。

ダンボールの中の道具を整理してたら埃が凄いことになった。

真つ暗闇に窓を開けて、寒い風が入り浸り、ボクは風の魔法を上手く使う事もできないから埃も吹き飛ばす事もできず。

気が付いたら朝になっているというオチだった。正直笑うことができない。14歳の身体は睡眠を欲しています。

まあ寝れたら眠るんだけどね。寝れないんだ。ボク教師だし。

幸い朝のHRに出てすぐに英語の授業だったため、徹夜明けのテンションを維持しつつ授業を乗り越えることができたけどさ。

相変わらずネギは明日菜さんをホイホイ脱がすし、対象にもの凄く嫌悪な雰囲気を持ち出してしまふ才能は芸術的だと思ってしまう。

まあネギだし。躓いてアーニヤと一緒にになって転びスカートの中に潜り込むなんて最早常識的なことだし。

それをネロが写真にとつて大笑いしてネカネ姉さんとアーニヤにボコボコにされ、結局ネギには被害が行かなかったから、それを直せなかったんだろう。

で、今現在に至る。

「マギ先生、いくら子供といえども職務中に居眠りとはいただけませんな」

…なにをしているかと聞かれれば、現在進行形で怒られていると言わざるを得ない。

職員会議で初っ端からうとうとしてしまったのが原因であり、完全にボクに非があるから仕方ないとはいえるけど。

腕を組み鬼の形相…とまでは同じ先生だからか言えないが、それでも怒っている初老近くの先生だった。

威圧感、というか生徒指導の先生の独特の雰囲気が自分の周りに展開されている。

「はあ…どうもすみませんでした新田先生」

ボクは椅子に座ったまま軽く一礼する。

そんな様子を瀬流彦先生や武集院先生が、ドンマイ、という風に苦笑してボクに目を合わせていた。HELP！と目で送ったら視線をそらされた。

新田先生、広域生活指導員であるこの先生は、その厳格な態度もさながら生徒に厳しく、その厳しさは生徒さんに鬼の新田というあだ名をもらうほどだという。

どうやらそれは先生にも例外では無いようで、ボクの見かけが中学生程度ということもあり、つい注意してしまったのだろう。

一応怒られているとはいえ職員室内は何故か微笑ましい物を見るような空気が漂っているんだ。なんでだと言わざるをえないね。

とりあえずボクも怒られると言うこと自体が久しぶりだ。マジメデイイコデシタヨボク？先生に無視される事が多かったけどね！

嫌な事を思い出した、やっぱり怒られるのは好きじゃない。

で、何分か話は続いている。放課後とはいえ一応仕事はあるため、ふと時間を見た新田先生が、分かりましたか？と話をしめくくった。

眼鏡をかちやりと直しそうボクに告げる新田先生を見て思わず反論したくなるが、新田先生の言っていることも正論だ。確かに中途半端な立場で教壇に立たれては生徒さんに笑われてしまう。

今日は授業はもう無いけれど職員室を訪れる生徒さんもいるのだから、自分がこんな態度ではいけないかな。

ボクは一度腰を上げて椅子に深く座りなおすと、ぐるりと椅子ごと

身体を向けて一礼した。

「うーん…わかりました。以後このような事が無いように気をつけます」

「うむよろしい。おつとそうだ、私はこの資料をネギ先生に渡しに来たのだが…すまないがマギ先生に頼んでもよろしいだろうか？」

新田先生の軽いお話が終了した後、手に持ったままのファイルに挟んだプリントをボクに手渡した。

それはどうやら予定表のようなもので、パソコンのスペック（ボクの腕的な意味で）が低い今ではできないぐらい綺麗にまとまった資料。

それはたしかネギが帰った後に渡されたものかな、顔に出さなくともそう判断したボクは「分りました」と言っつてそのファイルを受け取る。

それを見て新田先生は満足げに立ち去った。

と、それに入れ違うように若い先生がボクの近くに寄った。

先ほどボクがヘルプを要請してスルーした先生で、思わずボクはジト目の視線を返す。

「いやはや大変だったねマギ君。それにしても運が無かったね、新田先生の前でうとうとするなんてさ」

「はあ、見てたなら助けてくださいよ瀬流彦先生。一応声をかけるとか」

「流石に無理だよ、新田先生はベテランだし、僕の方は若造だし」
むう、と少しうなづてから気軽そうな表情の瀬流彦先生に顔を向ける。

なにかとボクのフォローなどをしてくれる良い先生だけど、肝心なところで抜けてるんだよなあ。

職員室の中でも若い年齢とあって質問などしやすく、他の先生との交流の輪も瀬流彦先生を窓口にして広がっていったため、先生の中では一番気を許せる人でもある。

「それにしても正論ですけど新田先生の話って長いですよ」

「あーあるある。そのずばずばと来る説教が長く続けられるから凄いなだよ。受けてるほうはきついけど」

「ですよー」と新田先生の話で軽く談笑し、暫しクスリとさせられた。

うん、まだ足手まといだとは思っけど、きちんとした職場で友人がいるというのも嬉しいな、と。ボクはそう思ってた。

「なるほど、つまり二人は私の助言を説教というわけですか？」

ハハハ、と、その笑いの形でボクらは固まった。

なぜか、説教を終えたはずの、新田先生が、ボクラノ後ろに立ってたんだ。

ギギギという擬音をたてて首を後ろに向けると、すごい威圧感をまとっ先生姿があつたんだ。

「ふむ、どうやら私の熱意が二人には通じてなかったようですね。そこに休憩室があります、少しお話ししましょう」

そう言って、ボクの椅子の近くにある休憩室のドアがバタンとしまる。

非常にまずい、あれで怒ってないと見るならそれはかなりの楽天者だ。

「…マギ君。僕、この話が終わって学校から帰れたら晩御飯を食べに行くんだ。いっしょにどう？」

「…いいですね、とりあえずそういう話は帰れたらにしましょう」

どこからかドナドナの音楽が頭をよぎり、少しだけボクは現実逃避したくなった。

なが…かった。時計の針が半周回ってた。なんで同じ事をリピートするわけでもないのにそんなに話が続くんだろ？　裏で打ち合わせとかしてないんだよね？

とりあえず同志である瀬流彦先生に軽く挨拶してから別れると、廊下を歩き始めた。

まあボクの持論だけでも、誰かに優しくできて心の強い人は誰かを注意できるんだと思う。

鬼の新田と言われ恐れられる先生だけでも、危険な事やいけないことを叱る事ができるのはその生徒が大事だからなんだろう。

本当に無関心なら何もしない、それが人だ。だから誰かをきちんと注意できるということは立派な大人なんだと思う。

そう考えるとネギがなにかをやらかした時に怒れないボクは、心が弱いのかと思った。

その礼ならネカネ姉さんとアーニヤは屈強だ。ネロに怒るのはいつも二人だもの。

あれ、そういえばそのせいであんまりネギに一般的な常識を教えないような気がする。

いやいや10歳にしてはきちんとしているほうだよねネギって。でも魔法使いとしてはどうなんだろ。普通の魔法使って1日目に魔法ばれたりするっけ？

…紳士として、いや男としては女性に必要な以上の武装解除の魔法はNGだったような…

「まあいいや。とりあえずネギにプリントを届けないとな」

不毛な思考を中断。

ボクはとりあえず硬直していた身体をほぐしてから、多分ネギがいるんじゃないかと、居なかったら明日菜さんに渡そうと考えて2 - Aの教室に向かうことに決めた。

ちなみにプリントは弐集院先生がボクとネギのために作って教師全員に配ってくれたもので、ネギは職員室に居なかったから貰えなかったものだ。

なんやかんやで支えてくれる周りの先生が存在が少しだけ有り難かった。

突然だけど貴方は、

なあにこれ？

と言いたくなる現象を感じたことがあるでしょうか？

例えるなら、いきなりドアを開けた瞬間に女の人を着替えの真っ最中で、硬直してしまった空気。

そこは女の人を着替えているという、自分でも理解できる状況であるために、上記の言葉は呟かない。

でもその空気の時に、意味不明の事をしていた場合はどうだろうか。
思わず言ってしまうたくなるよね？

『ネギ君って良く見るとすごくかわえーなー』

『先生…これをどうぞ…』

『先生コレ食べてー！ 家庭科で作ったのー！』

『先生コレも調度子供用の服を作ったところで…』

「わわ、や、やめてくださーい！！」

……………うん、現実逃避をしなくなるね。

でも目の前で起きてることだから見逃すわけにもいかないんだ。
とりあえず一言だけは言わせてもらいたい。

「……………なあにこれ？」

ボクは教室の教卓側、昨日トラップで酷い目にあったほうのドアから教室を覗いてみると、随分ネギがモテモテな状態になっていた。
うん、モテモテって古い表現だと思う。だけどそれ以上に似合う言葉が見付からないんだ。むしろそのフィット感に絶望した！

理解はできないけど頭の中では少しずつ整理はできるとは思う。

まず、分かりやすく言うと今見える光景は、何故かネギを見た人がネギに惹かれ、興奮状態から襲う（いろんな意味で）ようになってる。

過度だと言わざるを得なく、釘宮さんや柿崎さんに至っては着替えさせるために服を剥ぐ段階まで上っている。ありえん（笑）

とりあえず整理した結果を出すと、

↓なんらかの目的でじゃれている訳ではない。皆の目が心なしか虚ろだ。

↓ネギがなんらかの魔法を使った。あれは一種の催眠状態。

↓だとすればなにを使ったか。ボクはなんともない。明日菜さんもなんともない。

↓それでも他の人にかかっているため効能は明日菜さん意外を対象にした異性への惚れ薬ではないか？

…ネギがそんな限定した惚れ薬を作れるだろうか？　ネギはああ見えて優秀だからそれぐらいのことはできたのだろう。

そういえばこうして思考して現実を見ないのも現実逃避の一部なのかな？　あ、ネギがなんとか振り払って逃げ出すことに成功したみたいだ。

剥がされそうになったズボンと上着を着直して、魔力の強化を使つてまで反対側のドアから駆け出したのが見えた。

「……うん、ネギは教室に居なかったんだね。それにネギがモテモ

「テなのはいつものことじゃないか」

現実逃避、大好きです。

とりあえずボクはそう呟き、踵を向ける方向を反転させて時間を置こうとして…

「見といてなに逃げようとしてんのよマギーッ!」

想像を絶する痛みが頭から足先まで突き抜けた。

その角度、踏み込み、力の入れ具合といい素晴らしいほどの威力で明日菜産に頭を上履きではたかれたようだ。こうかはばつぐんだ。

おもいつきり頭を強打したせいで、プスプスと頭から煙が出そうなぐらいに痛い。

頭を抑えつつ涙目で後ろを見ると、暴走状態の雪広さんに襲われそうだった明日菜さんが、軽く顎を掌打して気絶させてる姿が見えた。

その手際の高さに思わず感動する。でもこの涙は感動のせいじゃないと思うんだけどいかがだろう？

明日菜さんがぐるりとこちらを向いた、眼光が素晴しすぎてその視線なら熊も殺せるね。

内心ガクガクブルブル状態で平常心をとったボクはやれやれといった様子で肩をすかす。

「…捕まってしまいましたね。まあとりあえずなにが起こったのかは一応聞きますね、ネギがなにをしたんですか？ 神楽坂さん？」

どうせ女の子関係で何か起こすのはネギの専売特許だろう。
そう理解してしまってるボクはもう一度ため息をついてから明日菜
さんに尋ねた。

「ま、まあ色々あってネギが惚れ薬を飲んで…それでああなっちゃ
ったのよ!？」

惚れ薬決定。泣きたくなるよ。

とりあえず事情徴収、明日菜さんがなにやら慌てて答えてくれた内
容を聞いて、ボクは大きいため息をついた。

惚れ薬って…ボクの記憶間違いじゃなかったら犯罪だったような気
がする。人の心を縛る魔法はそれなりの理由が無ければ使えない、
ということ聞いたような記憶があるんだけどな。

後でネギを叱らないといけないよね、これは。

大きく一度ため息をつく。ボクも明日菜さんと同じく苦労されてい
る組だと理解したのか、妙な一体感のようなものを感じていた。

「とりあえずネギを追いかけましょう神楽坂さん。少なからず貴女
もなにかしら理由があるのかもしれないから」

「う……はあ、しょうがないわね」

そうばやきつつも、なんやかんやで明日菜さんは手伝ってくれるよ
うだ。やはり明日菜さんは根は優しいんだね。

ネギもこれに懲りたら少しぐらいは反省して欲しいけど…やっぱり
無理なのかなあ。

…あの歩くセクハラを治すのは。あれって一種の病気だよきっと。

それで僕らはネギを追って廊下を走っている。

廊下を走ってはいけません。でも緊急時は仕方ないと割りきって、
微妙に気まで使って明日菜さんについていった。

そこに会話はない。

疾走しているから空気は綺麗だけどボクと明日菜さんの間だけは澁
んでいる。

その間が少しだけボクは嫌で、思わず言葉がもれていた。

「えっと、神楽坂さん。ネギのことはすみませんでした」

とりあえず漏れたのは謝罪の言葉。

それを聞いたのはいいけど、明日菜さんは思わずジロリとこちらを
睨んで呟く。

「…どれが？」

「はい？」

「だからネギのことって言われても、謝罪を受ける心当たりが多すぎてどれの事が分かんないって言ってるのよー！」

なにやら心当たりを思い出したのか、明日菜さんは顔を赤くして怒鳴る。

とりあえず走りながら怒鳴る姿を大勢の人に見られてて少し恥ずかしい。

というかネギ、君はアーニヤだけに飽きたらず、急に同居人になった人までセクハラするのか。
頼むから自重してくれ、怒られるのは僕までこうして巻き込まれるんだ。

「…えっと、その、多分ネギも悪気があってしているんじゃないと思うんだけど…」

背中に汗をかきつつボクは答える。ちなみにこの汗は走っているせいではないんだ。背中が凄く冷たいし。

「へえ…、人の服を吹き飛ばしたりお風呂を覗いたり着替え覗いたりベッドに勝手に入り込んでることを悪気はない、と。マギは言うわけ？」

で、更に険呑な雰囲気を出して明日菜さんは答えた。

なんてことをしている！？

ネギ、君はボクを追い込む事が大好きなようだね。

10歳だから許される事だけど僅か4歳違いのボクがしたらもう一生口を聞いてくれそうにないよ？

というかそんな男として重犯罪はしたらいけないと思うな。イギリス紳士どころは虚無^{セロ}の彼方に置いというて。

きっと誰もがネギを男の敵と言い女の敵とも言われるのだろう。アレが成人となったら修羅場的な意味で恐ろしい。

でもボクは知らなかったんだ。東大を目指して浪人しつつ成人しているのに、ネギみたいに偶然セクハラをする人がまだ世界にいないなんて。

空気がさらに悪くなる。

正直怒気だからまだすがすがしいけれど、これは殺気の領域に入り込んでるよ多分。心臓に悪すぎる。

「はあ、良いわよマギが謝らなくても。悪いのはネギだし今回の事は一応私にも非はあるし」

と、そこで明日菜さんは殺気を閑散させてため息をひとつつきながらそう言った。

そのおかげでいくらかは罪悪感がぬぐえたような気がする。

「むう、それでもすみません神楽坂さん。でもネギも本当に悪気があってやってるわけじゃないと思うので、迷惑かもしれません。少しの間お願いします」

でもやっぱり申し訳ない。

普通に考えて思春期の女子中学生がホイホイ制服を吹き飛ばして恥ずかしくないわけがない。それを言ったら絶対殴られそうだけど。

しばらく黙って走り続ける。

明日菜さんはなにも言わないからどうすれば良いかは分からないけど、言うだけのことは言った。

そう思っているとちらりと此方を覗いた明日菜さんと目が会う。

「優しい、か。確かにね」

なにか納得したようにそう呟いた明日菜さんは、色々被害のあった終着点の図書館にたどり着くと、腰に手をあててため息をついた。そうして一言、

「あのね、私がいって言ってんだから問題ないの。これでこの話は終わり、OK？」

「…え？ は、はあ」

「それと、名前。呼び辛いでしょ？ 名前でいいわよ」

むう。それはどうなのだろうか。

名前で呼ぶというのはあまりしたことがないし、失礼じゃないかと思っただ。

「…ぜ、善処します」

「はあ、やっぱり苗字で呼ぶのが癖なわけね。なんで名前ぐらいで…まあいつか、とりあえずはネギを見つけるのが先よね」

そう言っただ明日菜さんは、再度開かない扉に対峙し始めていた。

ボクは基本的に人を名前で呼ばない。名前を呼ぶとその人のことを意識しなければならないから、それが面倒だと学校では家名で呼んでいた。

そしてそれは先生という立場なら違和感は無くて、教職に就いている間はそれはバレることはないと思っただんだ。

名字で名乗ることは、基本相手に失礼になることがない。相手が自分の事をどう思っただかはボクには分からない。

ギリギリまで他人と交わることをしなかつただボクは普段から同年代だろうと年下だろうと、必ず名字で呼んでいたのだ。

でもそれはあつさり明日菜さんに見破られていた。

「…やっぱり失礼なんだろうな、先生がこんな態度でいるのは」

でも、どうもこの、2・Aの空気は心地よい。

ひたすら騒がしいけど自分が常に張り積めていたころとは違って楽しい。

思わず口元だけで笑って苦笑の形を作っていた。

自分を嘲うのではなくて、本当におかしいと思ってついた苦笑だった。

「あーもうこのおー！開けえ！」

痺れを切らした明日菜さんはその人間離れた身体能力を使って扉を蹴り飛ばして中に押し入った。

そこではネギがのどかさんに襲われそうになっていて、吹っ飛んだ衝撃でのどかさんが気絶したのを見て、今度はボクは笑ってしまった。

まったく、流石に今度は謝りきれないかな、話を掘り起こされたらのどかさんが気の毒だ。

「はあ、飽きないなあネギも」

ボクはのどかさんを救出している明日菜さんを尻目に、散らかり放題の図書館の整理を始めた。

余談だけどネギにはしっかりと怒っておいた。

今回のは一歩違えば犯罪行為になっていたかもしれないのだ、流石にボクも何も言わないというわけにもいかない。

でも、ネギが惚れ薬を作った理由はやっぱり明日菜さんのためで、自分の為ではないからそこまで強くは言わなかったけどね。

本人も反省してたから、図書館の整理をしてさようなら、と言った。とになった。

まあ…とりあえず明日菜さんが壊したドアの事を学園長に聞くと、保護者であるタカミチに弁償してもらうとのこと。

一応タカミチには明日菜さんにその事を言わないようにと謝っておく。

謝り癖は暫く治りそうにないかな。

苦労性だね、と苦笑するタカミチに苦労性です、と答えておく。

会いに行ったついでに瀬流彦先生と合流してご飯を奢って貰ったけど、中華料理とは中々良いセンスをしている、と二人の評価を少しだけ改めた。

第四話 家名と名前（後書き）

四話使ってようやく惚れ薬が終了？

すごく…、長いです。プロットだと三巻のところまであと六話ほどかかるますが、それまではのぼのしていつてくれると嬉しいですよ。次回は神父編です。

2話 勘違いのフラグを粉碎する（前書き）

イチから作ると時間がかかりました。
では、のんびり見て行ってくれるとうれしいです。

2話 勘違いのフラグを粉碎する

さて、結論から言えば何事も無かったのであった。

今のところ俺は四苦八苦して、家と戸籍と賃金を手に入れた。かなり省いはいるが、説明するとそうなるのだろう。

家は庭付き風呂付き台所付きの一階立て。俺の感覚では3世代は昔の和風の古家である。

そして現在俺はすべき事が一旦終わったので、その家の縁側でお茶を飲んで休憩しいた。

ふむ、大人状態、いわゆるコトミ―状態でお茶を飲むと言うのも、見ている側から見ていると絵になるな。俺は見れんのが悔やまれる。

だがこのジョージボイスは素晴らしいので、この状態で居ることの方が多い。

そもそも子供の状態だと夜間に指導されるので、子供のほうは世間から、ボロ小屋に住んでる俺の息子という事になっている。

一応戸籍は大人のため、居ざるを得ないというのもあるのだがな。

我輩は神父である。名前はまだ無い。というわけで名前を適当につけた。

荒耶綺礼、この身体はいろいろ混ざり物が多いが、とりあえずジョ

ージの声で印象に残った人物の名前を貰った。

だがどうしてだろうか、不思議なほどこの名前がしっくりくる。これも転生とやらのおかげなのだろうか？

もう日もようやく傾き始めた頃であり、洗濯物も乾くころでもあるだろう。

残ったお茶をチマチマと飲みつつ俺はふと目を瞑ろうとした、が。

「ん？」

凄い速さで坂を駆け降り、この家に一直線に向かう影が見える。

恐らく中学生ぐらいの少年だろう。

身の丈ほども有りそうな竹刀袋と、教科書等が入っている鞆を背負っているのを、魔術で視力を強化して確認した。

漫画だったら砂煙を立てているな、等とどうでもいい事を考える。それほどのダッシュなのが驚きだ。

多分彼だろう。短めに切った日本人的黑髪に、ちよろんと前髪が垂れていて、かなり真面目な性格の彼だな。

まあ今現在は憤怒の表情を浮かべているせいで、真面目かどうかは分からなくなっではいるが。

お、来た来た。カメラカメラ…と。

「アラヤああああああ！ またお前かああああへぶう！」カシヤツ

……………ふう。久々に結界を弄ってみたが…うまくいった。

ふむ、題名は『硝子に衝撃の詠春』だな。良い写真が取れた。

「ア…ラヤ……。また結界を……勝手に……く、不覚」

そのままバタリと倒れて、黒光りする虫の如く手足をピクピクさせる少年。

うむ、いつも通りの日常だな。

恐らく暫く経てば元通りになるだろうと踏んだ俺は、台所に戻り急須にお湯を追加した。

第2話 生活安定期入りました

これは俺が広場に駆けつけるまでさかのぼる。

凄く…、大音量です。

俺の頭を揺らすような爆発音のおかげで、ついつい思考がくそみそになってしまった。

転生してすぐに事件に巻き込まれる？　なんだこのテンプレートな展開は。予想外にも上限があるんじゃないか？

どうやら少し先に見えた広場からだとは思いが……気が進まない。巻き込まれたくないというのもある。

とりあえず面倒事があるかもしれないため、一応技術の確認をしておく。

体術、七夜の術があるからなんとかなると思う。

体術その2、黒鍵の投げ方、黒鍵がねーよ。まあ投影すればいいか。

魔術、強化は体と物質の強化ぐらいはできる。解析は酷い。エミヤほどできやしない。一般人並。投影、まだ分からない。

とりあえず……ブラックボックスである物質の知識倉庫というのが、どうしても嫌な予感がする。

思い出して欲しい、エミヤの投影は彼の固有結界の劣化版だった。固有結界って自分の心象風景でそのまま現実を塗りつぶしちゃう、なんか物凄いことだとは覚えている。

さて、ここで問題だ。

俺の心象風景とエミヤの心象風景が一致する可能性は？

あるわけねーよwww アンリさんのせいで大災害になった街の孤児になったことは無い。

そんなデンジャラスな体験はしてないと俺の本能が言っている。

さて、ここでブラックボックスの話に戻るが、これには型月世界の物質の知識がすべて詰まっているということらしい。

物質と言うからには武器だろうと、外装だろうと、あまつさえ宝具でさえ投影できるように知識が追加されるのかもしれないが…。

「コイツはくせえ、ゲロ以下の臭いがプンプンするぜ」

あり得ねえよ、絶対地雷要素だぞ？ 地雷以外あり得ないだろ常識的に考えて。

とりあえず、有るからには使ってみる。

いきなりどこぞの勝利の剣とか夫婦剣の知識を引き出したりしない。長剣や双剣など経験を憑依できない俺が使えると思うか？

まずは黒鍵だ。即戦力になる武器の知識を引き出してみよう。

俺は圧縮ファイルを開くように倉庫の知識を開き、黒鍵の知識を引き落とした。

『ファイル解凍。3秒後に知識、黒鍵の設計図をダウンロードします。3・2・1……』

「——あ？」

あの時は酷い目にあったよなあ、と入れ直したお茶を飲みながら俺はしみじみと思い出す。

横で昏倒したため雑魚寝させている詠春くんが居なかったら、かなり風流だろうなあ。

まあ、とりあえずあの時は大変だった。

ダウンロード開始した瞬間、笑えない程の激痛が頭の中に生まれたのだから。

例えるなら、脳髓に直接レーザーで文字を書き込んでいるような、

そんな感じだ。

脳みそも痛いとか知識の追加以外なにもできなくなったように感じた。まあそんな痛みも僅か数秒で終わり、気が付けば俺は黒鍵の設計図という知識を習得していたわけだ。

しかし、これはなかなか使えない。

完璧な投影と言うのは伊達ではなく、確かに贋作と本物の区別がつかないだろう。

それに武器の外装自体が完璧なので、魔力が気化しにくい…というかない。綻びが極端に少ないからか、魔力の漏れるのが本当にわずかなのかも知れない。

投影がマイナーで使えない理由は、人がイメージするものは曖昧であり、必ず綻びが出てくるために代用程度にしか使えないことだ。

だが、完璧な設計図を引き落としてそのまま投影しているため、俺は投影という魔術を戦術に組み込めるほどの精度があるようだ。

…が、この完璧な設計図というのは中々厄介なのである。

何故ならほつとくとすぐに頭の中を占めそうになる。思考に常にくっついてくるのだ。

一日中24時間、同じ音楽を聞き続ければ、なにもしなくても頭の

中で再生されるだろう。

それが黒鍵の知識として常に意識に張り付いているのだ。そう考え
てもらうとわかりやすい。

恐らく意識の切り替え技能とは、これを見通しての出来事だな、と
しみじみ思う。

一応、エクスカリバーなんかも投影できるだろう。その場合情報量
で脳をやられて物的に動けなくなる可能性があるが。

「まったく、世界はこんな筈じゃなかったことばかりだな」

「ああホントだよ」

と、俺の非常に恥ずかしい独白に返事が返ってきた。

ちょっと恥ずかしいよな、厨二っぽい台詞を言ってるの聞かれると。
まあ好きなキャラならまだいいが。

「む、いつ起きていたのだ詠春よ」

「ついさっきですよ。…って冷たっ!？」

詠春は起きて早々、打った頭に貼った冷えピタに驚き、身体を起こ
していた。

「ん、頭を打ったみたいだから冷してある。冷えピタとはいいもの
だ………茶を飲むか？」

「誰のせいでそうなったと…あ、いただきます」

そう言ってお茶を飲む詠春。

俺ものんびりとお茶を飲んだ。

ふむ、そういえばこの世界は魔法先生ネギマ！らしい。

詠春は将来紅き翼に入る主要人物だが…原作がどうでもいい俺にとつては、ただの友人である。

つーか最初は詠春も俺のことを警戒していたが、二ヶ月もすればどんな人間が分かってくれたらしい。

そして俺は最近気が付いたことがある。

「…………ふう、良いお茶です…じゃない！！　アラヤ！　俺の鞆にエロ本突っ込んだの貴方でしょう！？」

「俺のログには何もないな。ああ、何度も言っが俺は謙虚だから丁寧語はなくていい」

真面目とはすばらしくいじりやすい。

「そんなことはどうでもいい！　何度も俺の学校生活を脅かさない

でくれと頼んだらろ!？」

「何を言うか、中学にもなってエロ本の一つぐらい読まぬ男など居るものか」

「だからってなんでロリコン雑誌なんだああああ!？ おかげで男友達からアダ名を売春にされかけたんだ!」

「知らんな。人を疑い深くなるのは信頼関係を崩すことになるのではないか？」

「そうやで詠春くん。ちよつとはアラヤさん信頼した方がええよ」

「どの口でそれをほ……え？」

む、ようやくできたか。

甘い臭いがするお菓子を皿に乗せ、ここで作ってくれたのは有難い。なぜなら出来立てを食べられるからだ。

お盆を横に置いた姿を俺は確認する。

制服の上に俺の家のエプロンを違和感無く着こなす少女の姿は、俺のいた時代の悲惨な子供たちの面影がまったく無い、素晴らしくよく出来た少女だった。

詠春のほうは錆び付いたギギギとブリキのようにそちらに首を向けた。

まあそりゃ驚くか。俺も驚いたけどな、助けた少女がこんなに素晴

しい人だったとは。詠春がいなかったら告白してたかもしれない。

「こっ…こ、近衛お嬢様！？なぜ貴女がよりによってこのクソ神父の家に！？…アラヤさては貴様お嬢様を手込めに…」

「ねーよ。落ち着け、口調が酷いことになってるぞ」

「そうや、それに詠春くんは頭を打ったんやから安静にせなあかんよ？」

めっ、と人差し指を詠春にむけて動きを止める近衛さん。扱いに慣れているというか、そんな感じがするな。

なにしろ昏倒した詠春にひえピタを貼って頭を冷やしておいたのは近衛さんだしな。

しかしミニ救急セットなんて初めて見たぞ、俺は。よく出来すぎた中学生だろう。

初対面の時も中学生のくせして美人とはやるな、と思ったし、それに伴うように器用で人柄が良い。

ぶっちゃけ詠春にはもったいないだろ、とぼんやりと考えたくなるほどだ。

ああ、前に名前でもんだら詠春が、貴様が馴れ馴れしく名前でもぶなあああ！と詠春が暴走したので、仕方なく近衛さんとなってい

る。

三歳児バージョンを見せたら目がきょとんとしていて可愛かった。基本的に大人の状態でいるため、敬語で呼ばれているが。

いやまあしかし、遺伝子の良いところ取りでよかったとつくづく思う。

さて、俺は強化の魔術を身体にかけて、魔術回路に魔力が通った時の痛みで悶えたり、とりあえず黒鍵の知識に少し足すだけの火葬式典の知識を引き落として痛みで悶えたりしながら、なんとか平静を保ちつつ爆発音の場所に近づいた。

木から木へ飛び移っているのが自分だとは信じられないが、凄い肉体と技術だと感心しつつ、視力を強化して事件現場を観察した。

そこでは12から15歳ほどの少年が、なんか凄い筋肉の鬼に挑んでいる姿で、ちょうど大きく吹き飛ばされて腕を負傷したところだった。

それを見た瞬間、俺はすぐに逃げ出したくなった。

なんだ、このあり得ない光景は。人が宙を舞う？ サークラスじゃあるまいし、そんな簡単に人が吹き飛んでよいものなのか？

そう思ったのも束の間、少年は鬼に斬りかかり、退治できたのだとほっとした。

ああ、俺はこれで何もしなくてもいい、と。

が、その俺が考えた瞬間、少年は怪物の振り回した腕に巻き込まれ、吹き飛ばされて宙に翔んでいたのだ。

怪物はまだ生きている。

だが少年は瀕死の重傷だ。その少年の近くに少女が駆け寄りなにかしている。

だが、少年は動けない。

怪物は、生きている。

さて、考えて欲しい。この結果に導き出されるモノはなんだ？

死……

気が付けば黒鍵の火葬式典の設計図を引きずり落とし、両手にした黒鍵を俺は力の限り投げ込んでいた。

そして、それを追うように身体を鬼と少年の中間地点まで運んでいたのだ。

なにを馬鹿なことをしている、と俺の本能は警告を鳴らしている。

それでも、俺は二人を放っておくことなどできそうになかった。

夢見が悪いだとか、そういうことじゃない。

ただ、そこに死にそうな人がいて、自分になんとかできる力があるのならば、行動を起こさないのが間違っているのだ。

今、目の前で、俺より年下の、少年と、少女が、死に掛けている。

チラリと自分を助けた二人を見る。

少年はそれでも少女を庇おうとしている。自分には無い強さだと思っただ。

なら俺はびびってる暇はない。

俺はなんだ？ 覚えてはいないが知識的に考えて、少なくとも二十を越えた大人だったんだろ？ だったら格好つけてみるよ。

それでも溢れる恐怖心という意識を頭の後ろにやり、俺は怪物と対峙した。

幸いこの姿は言峰綺礼だ。それなら少しでも虚勢を張ろうと、俺はその人格を思い出す。

どこぞの正義の味方見習いに弓使いが言った言葉、イメージするのは常に最強の自分。

この身は所詮チキンな一般人が歩合相応な力を手にしただけの、中に何も宿らないものだ。だが、今ならそれで事足りる。

ならばせめてイメージしろ、俺の知っている言峰綺礼を。

「成る程、まだ闘志が有るとは喜ばしい」

俺はそう後ろの少年を褒めると、すぐに設計図から黒鍵を引き落として投影した。

鬼が此方を睨もうとしているのが直感的に感じられた。

本能か、ダウンロードした技術の経験からかは知らないが、俺はまた咄嗟に黒鍵を人間でいう急所や、関節の節に投げ込む。

悶え、暴れようとする怪物。

溢れだしそうな恐怖心を無視して、虚勢を張った。

「なるほど、流石にこれは堪えるか。ならばその苦惱、私が解き放とう」

何をすれば火葬式典が発動するかなど俺は知らない。

が、俺のイメージにある銃の引き金を弾くというイメージで、俺は言葉を続けた。

――
告げる

その瞬間、剣からは炎が溢れた。

身体を炭にへと返し、葬ると、俺はその未来が見えた。

なのに、怪物はまだ生きて叫び声をあげた。

これは恐怖心からかもしれない。

無意識に恐怖した俺は、とどめ、つまり絶対に生き残るはずがないと確信するためにもう一度、黒鍵を投合していた。

頭に突き刺さり動かなくなるのを確認してから、俺はようやく息を吐いて落ち着いた。

頭は焼けて残っておらず、体のところどころはまだ焼けていない、という表現が使えるほど、怪物の身体は灰へと変わっていたのだ。

生きている物を殺す、と言うことに罪悪感湧かなくもないが、俺は殴られたら殴り返すタイプだ。

先に襲い掛かっていたのがお前なんだから、後悔もしないし謝らない。

だがそれでも、生きていたものを殺したのには変わりないのだ。

人間とは不思議なもので、ゴキブリをいくら殺そうが罪悪感が沸かないが、人型や四肢を持った動物に対しては抱くのだから驚きだ。

だから、俺が柄にもなく呟いたのは、イメージした人物のせいだろうと考える。

「この魂に哀れみを、だ」

最後まで締まらないな、と。俺は呟きながら思った。

さて、ようやく俺が肩の力を抜いて、少年のほうに身体を向いて思ったのはこの一言だった。

（やだ…なにこれこわい）

俺はそうばやきそうになるも、改めて少年の姿を見る。

服には自分で吐いたと思われる血が世界地図を描いていて、どす黒く見える様はマジで重傷だろうと言いたくなる。

とりあえず、不細工ながら鬼を退治した俺は、背中に物凄い汗をかいていた。だって黒鍵投げまくってずっと俺のターンしてただけだぜ？

汗をかいているのはそんな小っ恥ずかしい話ではなく、なにしろ俺に剣を向けられているのだ。

恐怖心という思考を切り替えて、平静を保たなかったら漏らしていただろう。少年ながらそれぐらいの威圧感だ。

なぜか、俺が助けた少年は、俺に剣を向けているのですが。

ま、まあ逃げねくはないぞ。七夜の術なら物凄い速さで走れるし。

というか少年の後ろにいる少女が、鬼と対峙したときよりも震えているのですが。

why？

「…貴様、何者だ。なにが目的でこの地に現れた」

少年は静かに、だが嘘を許さないという意味を視線に込めて口を開く。

く、恐い。しかしなんと話すべきなのだろう。

正直に話す……空から降ってきました（笑）

ねーよ、有り得ん。少年の剣で幹竹割りにされる自信がある。

しかし弱った、沈黙を続けているからか、少年が若いというのに額にシワをよせて睨んでる。

なんとか肉体言語は避けて、会話を続けようと、とりあえず当たり障りの無いことを言っておく。
それをどう捉えるかは少年の自由だしな。

「ああ、私のこの身は神に使える神父でもあり、自らを高める修道者でもある。この場に來たのはその一環だと言っておこう」

俺はそう言っが、少年は剣をこちらに向けたまま、じっと押し黙っている。

せ、せっかく考えるなら此方に剣を向けるのはやめてほしい。

少し時間がたち、少年は今一度こちらに視線を戻し話を続ける。

「…………、ここに本来なんの目的があつて訪れたのかは分かりかねますが、貴方は長への紹介状などを持つてはいませんか？」

「長？ ……いや、そのような物は持ち合わせてはいない。ここが私有地などであつたのなら申し訳ない。謝罪しよう」

とりあえず軽く会釈するように頭を下げた。

いや目的とか無いよ、誰が好き好んで森なんかに身体を預けるものか。

少年は少し驚いたようで、片手を顔の前に持つてきてなにかを悩んでいる。

うむ、言ってみるもんだ。人は分かりあえないと言う人もいるけど、90%の人間は会話ができればなんとかなる。

で、少女の方はそれで印象が変わつたのか、ひょっこりと後ろから顔を出してこちらを伺っている。

「では最後に…貴方は関東魔法協会の者でしょうか？」

…？ 関東魔法協会？

どつかで聞いたことのある単語だが、どうも魚の小骨のように引っかかって落ちてこない。

だが、これはある情報でも有るだろう。

「1つ聞くが、それは魔法協会であって魔術協会ではないのだな？」

「…？ よく分かりませんが、同じではないのですか？」

素晴らしい。

どうやらこの世界は型月世界と言うデンジャラスの塊のような世界ではなく、一応ただ魔法文明のある世界と言うことになる。魔法と魔術がいつしよみたいだしね。

これならなんとか戦闘技術を生かして傭兵としてやっていく事も可能だろう。

魔法、表沙汰になってるならなお宜しいが、裏でもそれなりにできなくはない。

おそらく戦闘にも恐怖を抱くことから一般市民な俺が生きていけるか分らないが、少しは生活を何とかできそうだ。

と、俺はそこまで考察して、顔を上げる……

…そしてなぜかまた少年がこちらに剣をむけているのですが。

さらに少女も少年の後ろに隠れるようにさがったのですが。なぜに？

コトミーか？ このコトミーボディがいけないのか？

型月の言峰と違って俺は目にハイライトがしっかり描かれているぞ

？ たぶんだけどな。なぜに避ける要素が…

「そこまでじゃ」

…おーけい、今度はなんだいブラザー。

もう脳みその許容範囲は限界を天元突破しているんだ。これ以上元一般市民に精神的疲労を押し付けしないで欲しいんだが？

そして、なにかと思ったんだ。何が来たかと思ったんだ。

俺に負けず劣らず渋い声が辺りに響き、何者かがしゅたつと俺と少年達の間立ったのだ。

ああそこまではいい。

和風のいかにも現代っぽくない和服を着て、頭の毛を後ろで纏めたおっさんがそこに居た。

しかしながらそのダンディな様子からは、おっさんじゃなくておじさまと言いたくなる雰囲気でもある。

…ただ一点を除いて。

そのおじさまはな、なぜかは知らないが頭が標準より長いんだ。
長いって何が？ 物理的に頭がだよ。

言うならば妖怪ぬらりひょん、もう少しシワとか増えたら小さい子供にバカにされるのだろうな、と現実逃避をしていた。

「あつ…と、父さま!？」

しかもあの少女の父親らしい。

嘘をつくな、どうせ山奥の村から拐ってきただろ、外見的に考えて

色々脳内でツツコミをしつつ、俺は怪訝そうな視線を向けていた。

「まったく、二人とも後で説教だ。だが、今は少し下がっておれ」

が、物凄い鋭い目付きでおじさまが此方を向いてきた。

寒気がかなりする。

恐らく殺気を直撃しているのだと思うが、なにゆえ俺は殺気を受けられるような状態になってるのだろうか？

あ、そういえば今この状態は二十歳とはいえ言峰である。怪訝そうな視線も胡散臭さが増してしまうのではないだろうか？

…あーなんかもう面倒臭くなってきたんだけど。

「さて、修道者の御仁よ、今回は我が娘とその付き人を救出していただき感謝する」

「…いや、それほどでもない。だが、私と貴方は初対面だろう。自己紹介などしてくれると助かるのだが」

とりあえず……、別世界に召喚、なんて自体になってたら、俺の知識の中に当てはまる人物も一人や二人いるだろう。

それに名前で呼ぶ事はそれなりに親睦を高めるチャンスでもある。

悪魔でもなければ知っておいて損は無いので、俺は当たり障りの無い質問として問いかける。

「ふむ、これは失礼した。わしの名は近衛右近衛門。関東魔法協会の理事でもあるが…、今この身はそこにいる娘の父親だ」

…え、なに？このえもん？コノえもん？ え？なにそのドラえもんみたいなノリ。

っーかそんな人俺のログには存在いたしませんか？ そんな個性的な名前なんて聞いたことございません。

それにその少女の父親というのはマジですか？ 遺伝子組み換え

や突然変異が起きたってあんな綺麗な子になるとは思えないんだが…頭的な意味で。

それに、墓穴掘りました俺。相手は名前を名乗ったのだ。こちらが名乗らないというのはマナーに反するのではないか？

俺の名前は…名無しだしナナシアさんとも名乗るか？ やべ、ラスボスみたいでかつこいい。

俺は軽く頭を抑えてため息を吐く。現実逃避なんてやってる暇じゃない。

「さて、弱ったな。名乗ったはいいのだが、生憎だが私には返す名前が無い」

「…それは今この場で名乗れる名前がない、と、そういうことか？」

は？ いや普通に俺には名前が無いし、物理的に名乗れないだけであって…

そこまで考えて俺はある可能性にたどり着いた。

二度目になるが、今この身体の外見は二十歳の言峰である。だがネームバリューが相手に無かるうとも、この声はそれなりに中毒になるような感じがするだろう。

まあそれはいい。だが、相手は俺の事をどう見ているだろうか。

良く二次創作で、一般人のチキンが歩合相応な力を手に入れ、他人から俺 t u e e e e e ! と思われる、勘違い系と呼ばれる作品がある。

難易度が高く、勘違いをさせるために多くの知識を必要とするそれは、俺はお気に入りの1つでもあった。

…が、だ。その主人公がドツボに嵌まる条件はなにか知っているか？

1つ、無愛想な力に驚きすぎて、周りからどう見えているか考えない。

2つ、とある作品の名言を言いくる。ガンダムネタなどは大抵そうだ。

3つ、鈍感で思い込みが激しく、相手の思っていることを仮想してしまう人間であること。

そして俺は今現在、2つまで条件を満たしていた。

外見は某神父、言動も同じく、よくよく考えたら七夜の歩方って異常なんだよな？

ここまで不安要素が溢れているならば、勘違い系フラグに突入していると間違いなくはないだろうか？

s a i d 右近衛門

日も傾けかけたころだろう、ワシが久方ぶりに我家を訪れた時に会えたのは、少し見ない内に大きくなった娘の姿と、その側に控えていた付き人である詠春だった。

成長期と言つべきか、娘は益々魅力を増し、詠春は日々の鍛練から存在感に鋭さが増しておった。

関東魔法協会の理事でもあるこの身は、いくら古代のやんごとなき血を引いているとはいえ、些細な陰口など絶えない。

今現在、西と東の協会でのいざごさは絶えず行われてはいるが、一段落したところになる。

そんな中、関西呪術協会の中でも中枢を占める神鳴流の剣士でもある詠春が、娘の護衛を勤めてくれているのは有難いと言わざるをえない。

ワシが詠春に嫁にどうだ？ と尋ねて慌てさせ、娘に思いつき頭をはたかれ苦笑する、そんな相変わらぬの家に來たのは、それだけで羽伸ばしになったようだ。

しかし、そうもいかなかった。

夕食の時、式神の話になり、娘がまだ後鬼と前鬼が出せないという

ことで、悔しがっていたのを覚えている。

ワシがここに居るのも数日であり、あと少しで可能になると言うことで見せたかったのかもしれない。

夜中に二人抜け出したのを見逃したのにはそういう理由もあった。

幸いながらこの辺りは結界を張っており、侵入者がいればワシにすぐ伝わるし、万が一に詠春がいた。

その慢心が悪かった。

さて、風呂に入ろうかと思った瞬間、一帯に妖気が爆散したかと思えば、すぐに強い気を持った者を感じとることができた。

すぐに緩んだ思考を引き締め、身体に魔力を供給して辺りに置いてある最低限の装備をして外へと向かう。

この辺りの私有地は友人である浦島の協力で結界をはり、自分にある程度状況を知ることが出来る異質なものはあるが、侵入者の場所の特定程度はできる。

だからこそ驚いた。遠くの広場から少し離れた場所に、魔力を持った人間がいる。

おそらく関東魔法協会の者かもしれない。だとしたら、召喚されたのは悪魔か…？

転移をするために意識を集中する。すぐに広場へと向かおうと、魔

力を高め呪文を発動させた。

そうして見えたのは、音も無く動く神父姿の青年が、慈悲の欠片も無く鬼を殺すところだった。

一瞬意識が混乱するも、すぐに時間を稼いでいる詠春と青年との間に立つ。

すぐに子供二人をさがらせ青年と対峙した。一瞬邪魔をされたと不愉快そうな視線を受けて、思わず身構え殺気を辺りに蔓延させる。

青年は何も身構えず、ただ冷たい目をこちらに向け、あくまで自然体でいた。

それにあの姿は……おそらくだが幻術だ。魔力を纏っている事や風の雰囲気のおかしさからそれを読み取る。

正体、目的は分らない。だがこの青年が動いた結果二人が助かったのなら、感謝すべきなのだろう。

相手の様子を窺がうということも含め、簡単に名を告げた。

だが、青年はそれを聞いて、少しだけ考えるそぶりをしてみせる。

「さて、弱ったな。名乗ったはいいのだが、生憎だが私には返す名前が無い」

…、これはどういった意味で発言したのか。

単なる予想ではあるが、青年がなんらかの構成員だったとしたら、この場に来る事が任務であり、それゆえ話することができないということだろうか。

おそらくこの人物は悪人ではないと踏んだ。

任務に二人を助ける事が含まれているわけでもなく、もしも娘の血が狙いならば、詠春が少し離れた隙に攫えばいい。それだけの实力はあるだろう。

だが、それでも目的が分らない以上油断する事はできない。

「…それは今この場で名乗れる名前がない、と、そういうことか？」

その問いに青年は、またなにやら考え込んでいた。

やはり何処かの組織か、それに雇われたものだろうか？

ふと、後ろを確認すると、詠春はもう歩けるほどに回復しただろう。娘の治癒呪文も上達したものだ、と密かに思う。

それにしても長く考えている。隙だらけに見えるがこちらが動けそうに無いという威圧感、その百戦錬磨ともいえる声の質にあるのかもしれない。

「…ふむ、返答が無いと言つならば、そう思つてもよいのだな？」

気が付けばそんな沈黙に耐えられなくなり、ワシはそんな言葉を口からこぼす。

「よくねーよ」

「ふお？」

返つてきたのは威圧感の欠片も無いため息交じりの声だった。

ぶつちやけ、俺は素に戻ることにした。

なにやら呆けた声が聞こえたが気にしない。

「率直に聞くけど…、コノえもんさん俺のこと、頭のとっぺんから爪先まで怪しい変質者だと思つてないか？」

「い、いやそんなことはないが…」

「いやいや成人した大人が夜中に神父のコスプレしてうるついているとか、それだけで警戒しないならただのうつけ者だろう常識的に考へて」

俺は思いっきりため息をつく、やれやれといった様子で額に手をあてた。

ぶっちゃけ言語を言峰っぽくしたのは自分をごまかして恐怖心を紛らわすためであって、会話で必要な事ではない。

よって言語を素に戻し、威圧感を与えないようにしてみた。

「ふ、ふむ、そうかもしれないが…ならばどうしてこの地に？」

「…まあ話せば少し長くはなるが短くなる」

そこで俺は仙人に見えるが悪人には見えないコノエもんいろいろな俺の状況を伝えてみた。

なぜかこの場所で意識を取り戻した。名前なんて分りません。無職のプーさんになっているんですがどうしたらいいでしょう？

なぜか空気が弛緩した。殺伐とした威圧感を向けていた少年は身体を治療することに専念し、少女はちらちらとこちらを窺っている。

コノエもんはなにやら悩んだ後、難しい表情で口を開いた。

「残念ではあるが、とても信じられる話ではないな」

「だろうな…、俺だってそんな話聞かれたら疑わない理由が無い」

「だがつくならもつとマシな嘘をつくだろう。それを本当だとしてワシは一つだけ聞かせて欲しい」

なにを？　と言いかけて俺は口を閉じた。

その雰囲気は流石にどこかの協会の長といったところか、嘘を許さないという威圧感があたりに蔓延する。

俺は思わず喉をならすと、身体を強張らせて身構えていた。

そうして、口を開く。

「御仁はどうして二人を助けた？」

それは簡潔な問いだけに、俺は拍子抜けして身体を弛緩させていた。

「大人が子供を助けるのは当たり前ではないのか？」

俺の即答に相手も拍子抜けしていたようだ。

あーまったく、思えば荒耶綺礼という人格が生まれてから、まだほんの少ししか時間がたってなかったと考えれば、凄い綱渡りをしていたのだろう。

幸いにも前世、俺の性格の基盤となる人間は、そこまで頭の悪い人間ではなかったようだ。

それなりに頭も回り、浮かれた思考を持つ年代より少しは過ぎていたのかもしれない。

これで俺 t u e e e e ! してやるぜ！ などという単細胞だったら俺は正直耐えられそうにない。

結局俺は監視という目的もこめて、この地にしばらく縛られることになった。

結界が働いているらしいこの場所なら、俺が何をしようが警告をだし、すぐになんとかできるかららしい。

だが、生活も住が補償され、戸籍も一応造ってもらったと考えるなら破格の待遇だろう。

下手したら不正な行為で資金をためて、戸籍を不浪人から買わざるを得ない状況になっていたかもしれない。

つまり、俺は感謝しない理由が無いということだ。

だが、俺が転生したと言うことは、俺にも産みの親や育ての親が居

て、彼らを裏切ってしまったのではないかとも考えてしまう。

「またやなあ、またアラヤさん難しいこと考えてる？」

ふと考えを中断して目を開ける。

むー、と眉間にシワを寄せる真似をする近衛さんの顔が近くにあり、一瞬呆気にとられたが、年齢の不相応にも関わらず似合ってることに思わず苦笑した。

「つか詠春お茶を飲みながら横目で殺気を流すな。なにもしねえよ。

詠春も俺が幻術で実年齢が三歳だとわかってだいぶん凹んでいたくせにな。

「ああ……私の入れたピンキイ。学生は中々上玉作品でな……詠春が読んだのか気になっていたのだ」

ぶふう！

…汚いな詠春。吹き出すな

思春期に真面目な奴を弄るほど面白いと、最近気がついた。兄弟など居れば仲は最悪になるが、それだけの価値はあるかもしれない。

…いや、人の嫌がるのが好きだとか、精神が肉体に引っ張られて
るような…。

俺の性格はたちが悪かったんだな、と再確認することになるとはつ
いてない。

「あ、アラヤお前！ 元はと言えばお前が元凶だろ！」

「なに、過程がどうあれ見るのは詠春だ。さあ、どうした見なかつ
たのか？」

「ああ、それがなアラヤさん、詠春くんえっちいから読んだらしい
んよ」

「お嬢様！？」

成る程、いかに真面目だろうと思春期特有の欲望には耐えられんか。

あの雑誌、三次元の写真は健全な15禁だが、中身の二次元の漫画
は不健全な20禁だからな。

イケナイと思いつつもそんな決意はティッシュのようなものだ。流
石の詠春も欠落したか。

「さあ少年よ、じっくり、なつとり、その羞恥心を全身で感じられ
るように感想を話すがいい。
なに、ここには俺と詠春しか居ない。男同士、共にハアハア言うに
は完璧だとは思わないか？」

「最悪だ！ 分かってはいたけど最悪だなコイツ！」

バージョン言峰で詠春にそう言えば、打って響くように悪態が返ってきた。

流石だ詠春、俺の求めた反応を簡単にしてくれるとは。

なあにここには近衛さんがいるが、聞かれて恥をかくのは詠春である。

俺？ 近衛さんにはこういうキャラだと固定されてるな。

顔を真っ赤にして罵詈雑言を言う詠春に対して、近衛さんはおかしそうに笑い、俺はニヤニヤと口元を歪めている。

中学生剣士に、やんごとなき血を引くお嬢様に、無信教神父。端から見れば奇妙な光景でもあるだろう。

「それが詠春くんもだいたんでなあ、みんなの前で一大カミングアウトまでして……」

「もうやめてください！ 俺の体力は零ですお嬢様！」

俺の今のところの日常はこんなところだ。

転生してからそこまで交友範囲は広いわけではないが、寂しいとい

うわけでもなく、詠春を弄ったり、鍛錬をしたり、ガテン系のバイトをしたりと、それなりに生きていくところだ。

詠春を弄ってたら木刀で殴られかけたり、近衛さんを見てなごんだり、時折コノえもんに頼んで土地転がしをしたりと、生活の基盤はできていると言えるだろう。

将来の見通しはまだたっていない。幸いにも俺は三歳だが幻術で二十歳にもなれる。時間はまだ有ることだろう。

未来は未定だ、だが俺が誕生したこの世界は悪くないと、俺はそう思っていた。

おまけ

「ん？…お！　おーいみんな！詠春がエロ本持ってきてるで！」

「マジかよ…うわしかも詠春こういう趣味なんだ」

「ご、誤解だ！　そんなもの俺はかばんの中に入れた記憶が無い！」
（ま・た・アラヤかあああああ！！）

「バカ言っなって、もう現行犯逮捕だよ！　警部、犯人確保しました！」

「うむ、では内容の確認を……うお！　まさか詠春年下趣味とはい

え、これは犯罪じゃないのか？」

「警部、最近の功罪に授業テロが在りますが、弁護人はこれにより、最近の詠春に堅苦しさが削減されたことによる、減罪を主張します！」

「警部！ おそらく詠春に少女売春願望の疑いがあります！ すぐに尋問を！」

「ふ、容疑者売春よ、抜け駆けして女子にモテてる貴様に今こそ断罪の時だ。ゆつくりしていつてね！」

「さて、読んだのだろう？ それなら読んだ感想を聞きかせてもらおう売春よ。ゆつくりし ね！（女史の批判的な意味で）」

「だ・か・ら…誤解だ！それと誰が売春だ！」

「はー、なら売春はコレ読んでないんか？」

「…読んでない」

「嘘だ！」

「俺みちやっただんだぜえ？ 売春がちょっとだけチラッと授業中に見てそわそわしてたの」

（えゝ詠春くんって真面目だとおもったけどムツツリなんだゝ）ヒソヒソ

（なんだか以外だね。ちょっとがっかりかも）ヒソヒソ

（やっぱり男は野獣なの？）ヒソヒソ

（近衛さんちよつとかわいそうかも…）ヒソヒソ

「…ああ、もういい読んだということだ」

「っしやあ認めたぞ者どもよ！ ささ、どうだっただ初エロ本は？」

「興奮でしたか？ 興奮しますよね？ ちよつとわくわくしますよね？」

「……………」

「ふ…、オマエも二次元マニアか。俺の同志ではないか」

「で、感想は？ 感想はどうしたんだ？」

「…ああもう！ あんな紙より近衛さんのほうが何倍も魅力的だったさ！ 文句あるか！！？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…詠春おまえスゲーや。格がちがう」

「勝てない、そうか俺は最初から勝てなかったのか…」

「俺の負けだろ、完璧に…な」

「ただいま、…ん？　なんや静かやなあ。みんなどうしたん？」

「あ、え、と、近衛さん？　実は詠春くんがね…」

「ふんふん…、ほわあゝ詠春くんがそないなことをなあ。ありがとうなあ詠春くん？」

「あ？！　え、あ、その…、どういたしまして」

「って、そんな感じだったわ。はあゝなんかいつぺんにしゃべった喉が乾いたみたいや。ちょっとお茶入れてくるな」

「……………」

「……………」

「おい、少しだけ俺がエロ本を隠しといてよかったと思わなかったか？」

「…、まあ、ほんの少しだけ」

「つか近衛さん何気に鈍感なのだろうか？ けっこうギリギリの事いわれてるよな。まあわざとだったら凄いが。」

「拝啓コノえもん殿、詠春くんが予想以上に青春しているようです。」

2話 勘違いのフラグを粉碎する（後書き）

一応原作キャラの口調が違いますが、時間と共に元に戻るので安心してください。

なんとなく中学校の悪ノリしたことを思い出して書いてました。

第五話 魔法使いドジを踏む（前書き）

文をもう少しスマートに纏めたいのですが、どうもしっくりこない。力量不足故に現在修練中ですので、生暖かい目で見て頂けると有りがたいです。

第五話 魔法使いドジを踏む

楽しい。

体中の血が気と入り混じり、体内を循環しているのを感じる。

身体を動かしていたからだろう、動力を生み出そうとする体が発熱し、視界を狭め思考を奪った。

ただその状態を、ボクは楽しいと感じ取り、その欲求の求めるがままに身体を動かしていた。

軽く流そうと思ったはずの手合わせは、軽くない運動になった。

ついに体力が限界まで来たボクは、楽な体勢でいようと力を抜く。

「疲れた」

「常識的に考えれば動きすぎだろうな。もっとも、それは自業自得ではあるが」

ごろん、と仰向けになって大きく肩で息をする。

体力には自身があるほうではあったけど、同じように動いていたはずのネロは息切れ一つ起こしていない。

いや、攻めて行ったのは自分だけど、技術に差がありすぎてネロが

攻めた瞬間必殺なので、基本的に捌いていただけだったようだ。

いつもの湖の近くで学校をサボり、いつものように手合わせした。

真上にあつたはずの太陽が大きく傾き、暗くなり始めているようすから、だいぶたったのだらうと仮定する。

またネカネ姉さんに怒られるだろうか、いや、きっと真っ先にネロに被害が向くだろうな、と心の中でネロに謝しておく。

そんなネロはあちらこちらに飛んで突き刺さっている黒鍵を消して回っていた。

息を整え身体を起こす。ネロはさっさと作業を終わらせてこちらに向かってきてるのを見て、思わず息を吐いた。

「ネロは強いね」

「さてな、今現在マギに一本取られるほど身体的に弱くは無かったようだ」

ネロは苦笑して、地面に座っているボクに合わせて、湖の方を向きながら腰を下ろした。

ネロは強かった。ずっと何回も手合わせしていたけど、一度も一本入れたことがない。本気なんて見せてもいなかった。

だから尊敬もしていた。ボクも頑張ればあんなに強くなれるのかな、

と。

「強い、か。マギ、なぜマギは自身の鍛錬をする？ 強くなるためか？」

だからネロからそんな質問が出たとき、僕は思わず首をかしげていた。

どうしてそんな事を聞くのか分らなかったけれども、ぼくはただ肯定の意味も込めて頷いた。

「そうか、なら、なぜ強くなる？」

ボクはその問いにすぐ答えることができず、言葉に詰まる。

なぜ、そんなことは考えた事がなかった。でもこれは難しい質問だと思う。

自分の好きなことに対して、なぜ、と聞かれてもうまく答える事はできない。

…、ああ、たぶんこれだろう。ボクはネロと手合わせすることが好きだから、どんどん追いつけるのが嬉しいと思うから、修行を続けるのだと思う。

「身体を動かすのが好きだからだよ。じゃあ、ネロはなんで強くなつたの？」

でも、そんなことをまじまじ言うのが恥ずかしく、ボクはそんなことを答えていた。

ネロはどうしてそんなに強くなったのだろう、ボクに質問したからお返しの意味も込めて質問する。

ネロは少し間を置き筒状の魔法薬に火を付けると、湖に視線を向けて口を開いた。

「私は何も考えていなかったな。だからこそ、力の意味を知ることが出来たのは皮肉かもしれんな」

そう表情に影を作りながらも、ネロは苦笑してボクの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

ごまかされたようで少し不満に思っ てボクは思わずむくれた。

それでも新しい単語が出てきたことに少し考えて質問する。

「力の意味？」

「ああ。…マギ、力とは使い方次第で人を助け、立派だと言われるものだ。だが、使い方次第で人を殺め、悲しみを生み出す原因で

もある。

それを理解しなければ、…やがて力は人を鬼へと変え不幸にする。鬼に幸せが訪れる事などないだろう？」

…話の内容が難しく、自分にはあまり理解する事もできなかったと思う。

ただそれはネロは本気で言っていて、本当に聞いて欲しい事なんだろう。

でも、ボクは何も答えられなかった。

どうしてネロそんなことを言うのかは知らないし、それにどんな思いがあるのかも分らなかった。分るはずなかった。

「そんなことないよ」

だからボクはただそう答えた。

少しだけ驚いて視線をこちらに向けたネロの目を見て、ボクは言葉を続ける。

「鬼さんだって幸せになれるよ、きっと」

なんの根拠もない、だけど、世界に幸せになれる人なんているはずがない、と。ボクは本気でそう思って答えた。

思わずきよとんとするネ口。少しだけ論点が変わったことに苦笑して、残り少なくなった魔法薬を地面に押し付けると、携帯灰皿にそのまま入れた。

「ああ、そうなのかもしれん」

そこに浮かべた表情は、それは本気で嬉しいと思って笑った笑顔だったから、ボクもつられて笑った。

今日も明日も明後日も、ボクの書類仕事が終わらずに苦労せざるを得ない。

一見教職というのは生徒に授業を教えることが主だと思っていたボクは、これは無駄だろうと言いたくなる程の量の書類の整理にため息をついた。

正直ここに到着したばかりということやケにすることが多い。

いろんな人の名前を覚えるのはもちろん、ボクの部屋は2日かけてようやく部屋として機能できるようになり、ついでと言わんばかりに相談室の先生にされてしまった。

理不尽だと言わざるを得ないよね。心理師の免許なんてボク持ってませんよ学園長？

ああ、でもそれ以前に14歳と10歳の子供が教師やってる時点で問題あるし、今更って感じがするかもしれない。

「なんだろ、立派な魔法使いになるための修行だけど、精霊はふざけてるのかな？ 相性が良いのがあんまり居ないからって嫌がらせじゃないよねこれ？」

卒業証書に浮かぶ文字は実は精霊が決めてるとか嘘臭い噂がある。で、ボクと相性の良い精霊はなぜか光ぐらい。それ以外は異常に使い勝手が悪く、簡単な魔法にも苦勞せざるを得ないぐらいだ。

やれやれとボクはその相談室の机に俯せて、大きくため息をついて卒業証書に書かれた直訳『日本で先生をすること』という文字を改造したくなっていた。

ストーブ1つ無い部屋は冬も中ごろである現在のでは些か寒く、室温は7度ほどだろう。

暖房完備の教室や職員室が少し恨めしく、ボクは外に出るときに使う紺色のコートを着たままだった。

この一式はネロがボクに渡したもので、風に強く熱に強く雨に弱く暑さに弱い素晴らしいほど微妙な物で、ネロがいつも似たような嗜好をしていたことがその微妙度を加速させる。

首から十字架を下げてたら何処からどう見ても神父にしか見えない雰囲気の格好は、町中を歩いていたら好奇の目線で見られることも暫しある。

だからボクも余程のことが無ければ着ないけど、どうせ誰も来ない、来ても夜中に変な男女しか来ないような場所には近づかないだろう。

それはそれで結構悲しいね。

ああ、別にこうして職務中にぐだーっとしているからといって、別にボクはサボっているわけじゃないよ？

今は昼休みだし5、6時限目は授業ないし、実は帰りのショートHRまで仕事はないんだ。

書類整理ぐらいなら自室と言う名の相談室でもできるし、マイペースで行けるのがなによりも有難い。

よって今現在ボクは休憩をしながら書類整理をして、相談室に来てくれる生徒さんを待ち続けているのだ。

とはいえ一応昼食は済ませてはいる。まあ食事は基本的には食堂で食べてる。

そもそもボクの自室は相談室、就寝場所は隣の休憩室だ。そんなところにコンロがあるだろうか？ いや無い。

家庭科料理室を使う？ 中華料理とか作ったら匂いが凄いことになると思うだから使わないよ。

一応本を見ながらのんびり料理することぐらいはできるけど、場所が無いから結果的には食堂で頂きますということになるんだね。

第五話 魔法使いドジを踏む

時は上って昼食時。

麻帆良の食堂は建物ひとつが丸々食堂とあって、和食洋食中華までなんでもござれという多彩ぶりには、思わず舌を巻いてしまう。

勿論学校内の施設である為に経営目的なそれなりのお値段ではない。多くの人の腹を満たせるための食事は量と味に比べ値段が反比例している。

一人暮らし泣かせですね。喜びの声的な意味で。

「…美味しい」

だから少し前の昼食時に、ボクは思わずそう呟いていた。

食したのは鯖の味噌煮と味噌汁、沢庵などの所謂和食セットというシンプルな食事だ。

この味噌というのもまた面白い味がして、あまり食べることのなかった日本の味は素晴らしいの一言だったといえる。

「そっか、それならよかった。和食だったからマギ君の口に合うか少し心配だったんだよ」

一言ふつと笑い食事を続けるのは、少し前の新田先生に小言を言われた仲での瀬流彦先生だ。

どうやら瀬流彦先生も昼食は食堂で済ます派らしく、お弁当は持参しないらしい。恋人？ なにそれおいしいの？

ネギは今日から昼食はどうするつもりなんだろう。

もしかして同室の人に作ってもらった愛妻弁当なのかな？

「そうでもないですね、和食は比較的よく食べてましたから」

「へえ…イギリスにも日本町のような場所があったのかな？ちょっと聞いたことはないけど」

瀬流彦先生は頼んだうどんに付いていた漬物をつまみつつ、不思議そうに尋ねた。

確かにボクが住んでいたウェールズはド田舎だから、知る機会は珍しいのかもしれない。

「ちょっと違います、身近に和食好きな人がいたから、必然的に食べるようになったんですよ」

うん、嘘ではない。

小さい頃によく食事を作りに来てくれたネロが、さいきよーの食事と言ってすき焼きを作ってくれたのだ。

日本の食事文化は独特なものだから最初は驚いたけど、慣れれば凄く美味しいことに気がついた。

ただし納豆、お前は駄目だ。あれは本当に人が食べるモノなのだろうか？食べている人を見ると、お前ら人間じゃねえ！と言いたくなってしまう。

「身近につて、それはお隣さんとか？」

「いえ、ネギにスカートやドレスを着せようとする変態神父です」

なにか有ることにネギに女の子の服を着せたがる、自称変態と言う名の紳士。

そしてそれを素晴らしいほどに着こなすネギ。趣味ゆえに致し方なし。

まあボクは兄妹…もとい兄弟だけど、からかいがないからあまり茶化されない。

「いや…さ、それは家に入れちゃいけない人種だと思うな」

「…言つてて自分もそう思いましたね。怪しいどころじゃなくてあれは世界の違和感じゃないでしょうか？」

苦笑いをしながら相づちをうつ瀬流彦さんを見て思わず納得してしまふ。

ボクもできればお近づきになりたい人種ではなかったんだよね。もう手遅れだけど。

今じゃ笑って窓から侵入する変質者をどうして追い出さなかったのか不思議に思うな。

ふと昔を思い出す。

（ねえお兄ちゃん、今日は夕食なに作るの？）

（んゝまだ考えてないけど、ネギはなに食べたい？）

（えっと、えっとね、僕はハン…）

ガシャーン

（フハハハ喜べ少年！ 君たちの食事はようやくできる！ この私が日本究極にして至高食SUKIYAKIを作ってきたぞ…）

（（光の精霊1柱、集い来たりて敵を射て！ 魔法の射手1本！！）

（コンナハズハー！）

……ネロさんだから仕方ない、っていう風潮が広がってたから、あの異常さが広まらなかったのかな。

物を直す魔法を使えるからって毎回硝子を破ってくるのはどうかしてるよ、うん。

ネギも最初は怯えてたけどすぐに慣れてしまっていた。慣れてって怖いね。

マギくんの昔の話を聞きつつ、瀬流彦は食事の箸を進めていた。マギくんの昔話は主に家で過ごしたことが多く、ネギがやけにカワイイだとか、頻繁に来る変態紳士が最早ウェールズの常識になっているなど、笑い話というか苦笑いしたくなるような話が多い。

笑い話？ 正直僕が魔法使いじゃなかったら確実に通報している。

まあマギ君のところで食事はどうしていたのか個人的にも気になったから、不自由が少なかったのなら少し安心する。

「ネギは凄いですよ。大人でも解けないような問題をひよいひよい解くし、ボクの話をしつかり聞いてくれるし、女装は似合うし、ラッキースケベですし」

「はははは、たしかに男として色んな意味で凄いけど、最後の二つは大人になって後悔するような気がするのは僕の気のせいじゃないよね？」

…しかし、マギ君はネギ君のことを凄く嬉しそうに話す。

…そう、それはガンドルフイーニ先生や武集院先生が子供を自慢する時のように、顔に隠そうともしない笑みを浮かべている時と似ている。

しかも所々にトゲがあったりするけれども、それは割安といったところだ。

それでも自分の家族であるネギくんの事を良く話しているマギくんを見て、僕は確信した。

この子は…ブラコンだ！

一緒に暮らしていれば少しぐらい不満や悪口ぐらいは言つと思っけど、九割が褒めている内容だったのが驚きだ。

「ははは、まさか。ネギのことだから辛い過去を乗り越えて先に進んでくれますよ。ネギですし」

「辛いつて言っただけだ！？確かに凄いことだけど辛いつて理解してるよね！？」

もとい、けっこう厳しいことを言っている。

こうして会話をしてみると、どこか抜けているところもあるけれど、歳不相応なほどに落ち着きがあるんじゃないかと思う。

魔法のことについてギリギリ話さないのは勿論だけれども、言動や振る舞いは行き過ぎず、礼儀正しいと言えるのだろう。

…流石サウザンドマスターの子供か。

そう思った時に軽いため息をつきたくなった。

そんなフィルター越しにマギくんを見るつもりはないのに、無意識の内にそう考えてしまったのだろう。

別に僕は英雄の息子だからどうか考えたくはなかった。

そこに期待は大きいだろうし、ネギ君はともかくマギ君はそれに気が付いているだろう。

だからこそ色んな人はフィルター越しに彼を見てしまう。それなら一人ぐらい彼自身を見る人がいても悪くはないだろうと、そう思ったのも昼食に誘った一因だ。

これでも若輩者とはいえ教職の身である。子供が卒に当てはめる事はできないということぐらいはおぼろげながら理解してる。

少しだけそうぼんやりと考える。と、丁度良くそこにマギくんに話し掛ける二人の影が見えた。

一瞬初等部の女の子かと思ったけれど、たしか2―Aのクラスに居た双子のことを思い出す。

名前はたしか：鳴滝風香さんと史伽さんだったと思ったけど、どっちがどっちは流石に覚えてない。それでも記憶は悪くはないんだけどな。

「こんにちはー、マギ先生！ マギ先生も食堂で食べるんだね。あ、瀬流彦先生も」

「ボクらもいつしよに食べていい？」

マギくんは構わないよ、と相づちをうったため、僕も出来る限り笑顔で軽く頷く。

まあこの食堂は職員専用なわけでもなく、こうして生徒と一緒に食べるのも珍しくもない。

だけど1日目からマギくんに話しかけられるのは、2―Aだからというものと、マギくんの人なりにあるのかもしれない。

「えーと、名前を思い出すのでちょっと待ってください……よし、あなたたちは出席番号26番と27番の双子さんですね!？」

「うん、そうだよ」

「そして二人とも散歩部の！」

「「おお！」」

「……………いえちょっとまってくださいね。忘れたわけじゃないんです。ただちよつと頭の中の記憶から引き出すのが難しいというか……………」

「えっ？ 先生もしかしてボクらのこと忘れちゃったの！？」

「否！ ……すみません嘘つきました。名前教えてもらっていい？」

いや忘れたもなにもまだ初対面なんじゃないのかな？

初任の先生で気合で生徒の名前と顔を一致させてしまう先生もいるけど……。かくいう僕もそうだったし。

そこで自己紹介タイムに入ったのか、お互いに名前を聞きあっていた。他には散歩競技は素晴らしいハードスポーツなんだとか、兄弟が居るもの同士で色々共感するなど、雰囲気は生きわいいといった様子だ。

さすがにここで僕がでばるのも変だろう。年齢は中学生同士だから、なんのわだかりもなく進んでいるところで入りにくいというのもあるけれども。

うどんが食べ終わり、ボクは湯飲みにお茶という和みセットで食を締めることにした。微笑ましいものを見ていると嬉しくなると久しぶりに感じる。

「でもマギ先生って凄いよねー！　ボクらと同じぐらいなのに先生なんだよね？」

「んーそうですね。実はボクもそう思うんですけど、実はコレには理由があります」

さて、これも修行の内だろうね。たぶんマギ君だからありきたりな答えを返せるだろう。

僕は湯飲みのお茶をすすると、少し熱いくらいの茶を喉に流し込んだ。

そんな穏やかな時間の最中、むき出しの地雷という爆弾が昼食中にバクハツした。

「ボクはね、魔法使いなんだ」

ごぶう！

そして吹いた。
思わず吹いた。

大人の良識を踏み外しそうなのを湯飲みに吹き出すことで回避したよ！

「うわぁ！瀬流彦先生汚いよ！」

「ごめんね風香さん。いや、ちょっとむせっちゃってさ」

いやいやいやいやいやなんでマジくん魔法使いカミングアウトしてるの？いやそれ以前に魔法学校で魔法の秘匿については学ばなかったのかい…いやいやなんか高畑先生が言うにネギくんがもう魔法バ
セレンは「んんん」しているレしたかもっていうからひよっとしたら…いやねーよwww

なんとということだ、スプリングフィールドの血筋は化物か！？（色んな意味で）

混乱していて口の中が苦い。多分お茶のせいだったのかもしれないけど、緊張と入り交じって最苦に感じる。

そこでまずボクは先ほど吹き出してしまったけどお茶を飲む。
緑茶は良いね。東洋人が生み出した文化の極みだよ。
汚い？混乱故に致し方ない！

そうどうでも良いことを考えると、思考からスツと熱が冷めていった。

そう、落ち着け。COOLになるんだ瀬流彦よ。いくらネギくんみたいに常識に疎いところが在るからと言って、魔法という言葉に敏感になるのは良くない。

「えゝそれって本当なんですかマジ先生？嘘っぽいですよゝ？」

「む、それは失礼ですよ。こう見えてもボクは本当に魔法使いなんですから」

「じゃあ証拠見せてよーしょーこー！」

ほら、裏を読み取らずに聞いていればなんのへんてつもない、中学生…？の会話じゃないか。

敏感になればなるほど墓穴を掘る。さすがにこれにつけこまれて僕が魔法使いと言ったことがバレたら減給されるだろう。下手したらオコジョENDだ。

…それに独身貴族だからってお金に余裕があるわけじゃないからね。

「よし、それならまずはこれを見てください」

マギくんはどこからともなくソレを取り出した。

それは長方形で、薄くて、材質は紙っぽくて、魔力がほのかに感じられて、自分の絵が書き込まれている悪趣味なものか…。

…さて、ここで面白い話がある。

魔法使いとその従者が契約、仮契約をした場合に、アーティファクトと呼ばれるアイテムを出すとか何とか。…相手いないけどね。

さておき、僕の目の前の光景はその仮契約の証拠のカードを見せた未熟な少年の姿が見えるんだ。

.....

ゴホッゴフオッ！

「せ、瀬流彦先生！？本当に大丈夫？」

そしてまた吹いた。

史伽さんが心配してくれるが、悪いけど返す暇はない。

え…マジ？

魔力が仄かに感じる所とか、文字が書いてあるとか、悪趣味な自分の絵が書いてあるとか、どうみても仮契約カードです本当にありが（ry

嘘だろ？ 僕は直感的にそう思っではいた。

だがアレがもしも本当に仮契約カードだったとしたら？

そんな状態だけ何事もなくマギ君は話を進める。

素晴らしく笑顔である。まるで子供が友達に新しいおもちゃを見せるような笑顔である。

「ふふ、ボクはこれに《アデット》と言いますね。そうするとちよつと凄い事が起きます」

なん……だと……？ と呟きたくなりつつも我慢。でも我慢も天元突破しそうだ。

…間違いない。あれは仮契約カード。

そしてその呪文から導かれるアーティファクトはもはや魔法の産物に違いない。

キラキラと無邪気な視線でそれを見る鳴滝さん姉妹。だけど僕は対照的に冷や汗が滝のように流れ出ていた。

今にも実演しそうなマギくん。それをすれば少なくとも目の前にいる二人は魔法の存在に気が付いてしまっただろう。

マギ君とネギ君については殆ど特例と言っていいほど魔法バレに對する処分が甘くなる。それは二人に乗っている期待がそれほどのものであると同時に、ささいなことは握りつぶす対象となっているのだろう。

だが、僕は一般人を巻き込む事に賛成と言うわけではない。たぶんそれは学園長を含めて、全ての魔法先生がもつ共通の考えだ。だから目の前でまさに巻き込まれようとしている一般生徒を何とかしたいという考えはある。

だが、しかしだ。僕が今此処で止めたとしたら、魔法は存在すると肯定される可能性もありうる。

それにこれは僕が魔法使いだとマギ君に伝えるようなもの。先生内で二人の修行にならないという理由で、学園長が許可するまでマギ君とネギ君に伝える事は禁止されている。破ったら少なくとも減給ぐらいはありえる。

…一般人を巻き込むか、ばれる確立を含むのに減給覚悟で止めるか。

なんなんだこの究極のオルタナティブ（二者択一）？

「じゃあやりますね。よく見てくださいよ？」

と、迷っている暇は無い。ここで僕が下す選択？そんなものは最初から決まっていた。あるのはただ残念なだけ。懐の防寒着的な意味で。

く…ええい、ままよ！

「《アデツ「ちょ、ちょつといいかなマジ君？」ふえ？」

マジ君が言おうとした瞬間にすぐ肩に手をかけて後ろを向かせる。僕の給料が、それとも生徒の人生か、そんなの大切なのは生徒の人生に決まってはいる。ただ残念なだけだ。懐の防寒着的な意味で。（大事な事なので二回言いました）

（流石にまずいよマジ君、一般人に魔法の事を伝えたりしちゃ）

極力声を抑え、なおかつ確実に聞こえるようにマジ君につたえる。鳴滝さんたちはなにやら怪訝そうな顔をしていたけど、ここまですらまだなんとかごまかせる範囲だろう。最悪記憶の改良だって可能だ。

それに対してマジ君はただ驚いた表情を返した。まるでそれを言われるのが意外だったかのように。

（えっと、もしかしてセルヒコさんって魔法使いですか？）

（うん。だけどマジ君もわかるよね、魔法の隠匿については。そんなに気軽に一般人の前で使っちゃだめだろ？）

それを聞くとマジ君はやはりきょとんとしたような表情をして、やがて我に返ったのか慌てて返事を返した。

（えっと、魔法の隠匿は当たり前なんですけど今回は…「おいマジ先生セルヒコ先生、急にどうしたの？」「あ、なんでもないですよー」すみません、絶対に大丈夫なんでちょっとだけ見ててください）

僕はおもわず、え…？、と呟いていた。

Y a h o 辞書の弊害、その被害が完全に僕に及び、被害を受ける羽目になった、といえはその結果をうまく説明できるのかもしれない。

魔法使い、マギ君が言ったその発言は、比較的新しく出来た日本語であり、それぞれ意味も似たり寄ったりだといえる。

一つの単語に多くの意味があるのは日本が最たるもので、それが外国人にとって覚えにくいのはしかたないのだろう。

つまり、

魔法使い↓魔法+使い。 or 魔術+師

魔法↓英訳マジック↓日本訳↓手品⇨奇術

つまり、魔法使い↓奇術師というわけになるんだね。

「いきますよー…《アデット》」

「わあ！ 絵柄が変わった！ 小さいけどこれってネギ先生だよね？」

マギ君の絵柄だった仮契約カードが一瞬のうちにネギ君に代わる。なぜか女性用のローブを着ているネギ君の絵柄だがそこは気にしない。

「ほかにも変えられるんですかー？」

「できますよ。《アデット》」

と、こんどは綺麗な女性の姿の絵柄に変わる。誰かは知らないけど、多分マギ君にとって身近な人なんだろう。

なるほど、いまマギ君が何をしているのか理解した。

「ねえねえこれどうやったのマギ先生！？ まさか本当に魔法！？」

「ははは、そう、実はボクは魔法使いだ！…と言いたいんですが、実はセルヒコ先生に種をばれてしまったんですね」

そうですね、と視線を向けるマギ君に軽く頷いて肯定の動作をする。

「というわけで、鳴滝さんたちにはちょっとだけ種を教えてあげますね」

「「ホントー！？」「」

意気揚々と手品の種を二人に教える姿を見て、僕は言われようの無いやっちまった感を味わっていた。

そして…、僕は…燃えたよ、真っ白になって燃え尽きた。

ああ、結論から話させてもらつと、酷い詐欺を見たような気がするが、そんなことあつたんだ！

「…瀬流彦先生大丈夫ですか？　まるで最終回に燃え尽きたボクサ
ーのような状態になってますけど」

大丈夫じゃない。懐が飢饉状態になってしまいそうなのに大丈夫と
かない。

だまされた、というより僕が自分で自滅した。紛らわしいにも程が
在る。魔法使いホイホイにかけられたG虫のようだ。

「いやー大丈夫…というより少し悔しいね。もしかして騙されたと
か？」

「？　…ああ、魔法使いだつてことですか？　別にそういう意味で
やったわけじゃないんですけど…迷惑でしたか？」

迷惑、というより一本とられた感じがする。

最初から僕のことを魔法使いだと知って狙つてたわけではなく、手
品をしたら偶然僕が失敗したんだろう。

でなければ本当に申し訳なさそうにする姿は見えないと思う。

やれやれと言いたところだけれど、僕は苦笑して「そんなことはないよ」と返していた。

だけこのままマギ君がネギ君にまで僕の存在を知らせるのはまずい。

ここで責任の在る立場に立たせて修行されると言うのが学園長の狙いで、僕としては早いのではないかと思うが、無職にはなりたくない。そこまで反抗的に思っているわけでもない。

「あーっとね、できれば今回僕が魔法使いだってことは、ネギ君には内緒にしてくれないかな？」

そういう僕にマギ君は首をかしげる。

「？　なぜですか？」

「うーん、…ここを訪れたのは二人の修行のためだね？　だから本当に困ったなら仕方ないけど、こちらからなんでも手を貸すわけにはいかないんだ」

あまり本人に対して言いたいことではない。

が、言わないわけにはいかないのが、本音と行動の板ばさみになって辛いものがある。

この場所での修行は確かにマギ君とネギ君の人生の中では大きな糧

となると思う。

理解はしてるけど納得はできない、これはまあ人生経験が足りないと言われてもしかたない、と思った。

「分りました、それじゃあ仕方ないですね。あ、でも本当にまずい時は手助けしてもらっても構いませんよね？」

「ああ、それはもちろんだよ。えーと、そうだ、携帯の電話番号渡しておくから、困った時に知らせてくれればいいよ」

やれやれ、あまり深入りしすぎるのも良いとはいえないけど、これぐらいならいいだろう。

この後学園長室に呼ばれるまで、まんざらでもない気分が続いたけど、やっぱり減給という運命からは逃れられそうにないのが辛かった。

ほどなくして学園長から瀬流彦先生に出頭の放送がかけられ、一瞬絶望的な顔をした瀬流彦先生を見送った後、仕事もほとんど終わっていたため、ボクは相談室の机に座りながらぼんやりとしていた。

修行、そう、ボクはこの場所に修行に来ている。

精霊のせいでここに来る事になったといったけど、けどやっぱりメルティアナ魔法学校のおじいさんも、ここの近衛先生も一枚かんでいるのかもしれない。

ボクはまだ十六歳だと言って、日本と言う国の法律にかからないようにできるかもしれないけど、ネギは十歳だというのが少しひっかかる。

魔法使いは立派な魔法使いを目指して人を救う。

だけどそのために法を犯すのはどうなのだろうか。

瀬流彦先生が魔法使いだった。それ自体はどうでもいい。だけど、あらかじめそういった人がいることを伝えないのはずるいと思う。

サウザンドマスター、英雄の息子。それにかけられる期待もわかる。だけど、それをかけられた方はたまったもんじゃない。

「だけど…、先生っていう立場を放棄する理由にもならないよね」

立派な魔法使い、じゃあ立派ってなんなのか。
人を救う、じゃあ救うってどういうことか。

考えても絶対に分らない事、だからそれを目標にすることは多分ボクはないと思う。

「…………やめたっ」

難しい事だとか、将来をどうするのだとか、簡単に答えを出せない

ような事を考えても仕方ない。

目標が分らない、だったら探せばいい。視線が気になる、だったら気にしなければいい。

考えるから難しくなる、だったらたまには考えないようにするのも在りだ。

現在ボクは教師で、この相談室も任されている。だったらできることをしよう、とぼんやり考えた。

「その時にふと思いついた行動をすればいい、か」

ネロの助言を思い出し、さて、なにをしようかと考える。

「……………」
「コアでもいれよう」

我ながら考える事が微妙だけど、とりあえず行動しようとしたときに、

トントン、と。ノックする音が聞こえてドアノブが回った。

おまけ

「にしてもマギ君って手品できたんだね」

「ああ、これは簡単な手遊びですよ。理解すれば子供でもできます」

「まあそれが難しくもあるんだよ。ちなみにそのカード誰が作ったの？」

「知り合いの変態神父が姉さんと幼馴染をからかう為に特注品で作ったものです」

「……なんか凄い資財の無駄遣いじゃあ……」

「金利だけで暮らせると言っていたので大丈夫だとおもいますけどね」

「もしかして、ネギ君に着せたって言う服も特注品とかしないよね？」

「……………たぶん」

瀬流彦は本格的にマギの身边が心配になっていた。

第五話 魔法使いドジを踏む（後書き）

ネギまやラブひな、その他諸々のハーレム系の話は、男性キャラが四割増しかっこよく見えるから不思議。

第六話 英雄（前書き）

ネギが嫌いだという人は多くてアンチも多いけど、自分は20巻辺りまではべつに嫌いではないですね。健気で頑張ってるじゃないですか。

あ、でもそれ以降と今週のネギまを読んで思った一言は、ネギ？もげればいいと思うよ、だった。

第六話 英雄

「私が千の呪文の男（サウザンドマスター）についてなにか知っているか？ 無論知っているがそれがどうかしたのか？」

「え、酷いよネロ。なんで教えてくれなかったの？」

「ふむ、聞かれていないからな。とはいえ、私が話せるのもほんの一部分程度なのだが」

夜、ボクはネギやネカネ姉さんと暮らしている家のリビングで、ネロの作ったロイヤルミルクココアを飲みながらそんな質問をしていた。

そしてその答えをネロは知っているらしい。

「さて、なにを聞きたいのだ少年よ。迷える子羊を救うのも聖職者の役目なのでね」

「すごいや、聖職者の皮を被った変態の声が真面目に聞こえる」

「マギ、流星にそれは酷いのではないか？」

目頭を押さえるネロにボクは首をかしげていた。どうしたのだろうと思っていたが、結構ひどい事を言ってる気がするけど…まあ気のせいだろう。

ネロは目頭に置いていた手をカップに持っていき、そのまま口に運んだ。

そうして一つ時間を置くと、ふむ、とテーブルの上で両手の手のひらあたりで組み、何かを懐かしむように考えて出した。

「私の知る限りなら…ナギ、サウザンドマスターは……立派な魔法使いだっただ、としか言えんな」

「なーんだ。それなら見んな言ってる事だよね？」

「確かに。だが、なにか知ってるか、と聞かれたからそう答えたに過ぎん」

「むう…じゃあえっと、えっと、サウザンドマスターはどんな人だったの？」

言葉のボキャブラリーが少ないそのときは、たいして変わらないそんな質問ぐらいしかできなかった。

だけど今ならその質問をして間違っではないかと思っている。

「どんな、か。それも曖昧な質問だが……ああ、一番わかりやすい言葉があつたな」

また一拍置いてネロは答える。

「サウザンド…いや、ナギ・スプリングフィールドは、英雄^{えいゆう}だよ」

第六話 英雄

現在昼食終了時、つまり休み時間はとうの昔に終わっている。

にもかかわらず、ここに生徒がいるというのはどういうことなのだろうか。

「…えっと、マグダウエル…さん？」

そこに居たのは見間違えることなく初等部の…じゃなくて2―Aの生徒さんで、現在外だか屋上だかで体育の最中だったのを思い出した。けっして初等部の学生さんなんて思ったりはしない。

ボクの呆けたような声も気にせず、エヴァンジェリンさんはぐるりと辺りを見渡し、とある機械が無いことに気がついたのかため息をつく。

「まったくもって寒い場所だなここは。私立の癖して暖房の1つも付いていないのか？」

「はあ……いまストーブを申請しているとこなんですけどね。あとは、できれば堂々と副担任の目の前で授業をサボらないと嬉しいのですが？」

あとは先生には敬語を使わないとだめですよー、と言ってみると、フンとそっぽを向かれてしまった。まあ年齢が近いから仕方ないのかもしれない。

ただいま五時限目真つ最中。眠くなる今の時間は正にサボり日和。今日はバレーをするんだと鳴滝さん達に聞いたけど、ひよっとしたら体育は苦手なのかもしれない。

と、ボクがそんな想像を膨らませている内に、マグダウエルさんはそんな言葉は聞こえていないかのように堂々とボクの前に対面するように座った。

「なに、今は授業中だがここは相談室で先生は一応この心理師だろう？　だったら生徒がここに来る理由なんて1つしかないじゃないか」

いや心理師の免許持ってませんけどね。モグリツギハギ医師のB・Jさんとおそろいです。日本だと大学院出ないと本格的な勉強ができませんっていうイメージがあるんだけど。

ふむ、と顎に手を当ててマグダウェルさんが言いたいことを頭の中で整理する。

わざわざ授業をサボってきてまで相談室に来たのだ。

ボクを捜していた、という線も考えられなくもないけど、それならこの部屋に来るとは思えない。だれにも言っていないし。

と言うことは、時間を割いてまで相談したいことがあるのかもしれない。

「ふむふむ、少し長くなりそうですね。紅茶でもいれましょうか？」

「ほう、なかなか気が利くな。まともな味に淹れられるのか、先生？」

マグダウェルさんがニヤリと頬杖をつきながら口元をつり上げた。

ハハハご冗談を。ボクは紅茶好きのイギリス紳士ですよ？紅茶一つ入れられなくてどうしますか。

「ティーパックの万能さは完璧ですよね」

ボクがそう言っただけで後ろを向くと、ガンツと机の方から音が聞こえた。まるでどこかに頬をぶつけたように押さえてるけど、手が滑ったのだろうか？

「…なにしてるんですかマグダウェルさん？」

「い、いや、なんでもないぞ、うん。と言うか紅茶好きの自称イギリス紳士がティーパックで良いのか？」

「ハハハ、どんな風に淹れても同じ味なティーパックは流石ですよ。特に日本製の午。の紅茶は至高ですね」

「貴様を紅茶好きとは認めん！ あれは少し苦いだけの砂糖水だろうが！」

失礼な、あの安っぽい味を砂糖で誤魔化した味が良いじゃないですか。

どうやら紅茶は嫌なようで、むくれてしまったマグダウエルさん。やっぱり最近の日本の中学生は紅茶はあまり好きではないのかもしれませんね。（全体的に間違い）

だって苦いし苦いし苦いし。砂糖とミルクをふんだんに使わないと飲めそうにない。何故かネカネ姉さんとアーニヤは苦笑していたけどなんでだろう？

とすれば日本が生み出した万人に愛され健康にも良い万能食品の三口が…ないんですね。意外とアレは高いですし。

「うーん…やっぱり紅茶は苦いですからね…、あ、それならココアを入れますね。あつたかくて甘くておいしいですよ？」

「私は子供か」

「はい、子供はみんなココアが好きです。というわけで淹れてきますね」

「……クククク。なるほど、どうやら貴様は私が外見年齢通り紅茶など向かず、子供向けの甘くて美味しいココアで充分だと言いたいわけだな？　よかろう、殺してやる」

ボクは少し前に考えていたようにココアを淹れる為に席を立つ。

…あれ？　なんかマグダウェルさんが口元をひくつかせて、ぶるぶる震えている気がする？　それにふんだんに殺気を撒き散らしてるし。

やっぱり以前教室で感じたのあマグダウェルさんの殺気なんだろうな。今更ながら確信した。

「え？　ココアは嫌いでしたか？　ボクは好きなんですけどね、ココア。特に水は使わないで牛乳だけで作ったココアは美味しいんですよ？」

「くっ…、それはわざとか？　それとも本気で言ってるのか？」

「本気と言うか本心ですけど。とりあえず煎れてきますから少しだけ待っててください」

ボクはそう伝えてから相談室の後ろ半分にある台所代わりの水道にて、電気のお湯沸かし機で小さい棚に置いてあるカップを取り出し少しだけ暖める。

冬のためあまりにも冷たいカップではココアが冷めてしまうための処置らしい。あまり気にした事はないから自分が煎れる分にはしたことない。

ミルクはコーヒーのだけど一応入れて、ココアの素を小さじ4はい入れてよくかき混ぜたら完成。

うん、普通のココア、だがそれがいい。

さつさとココアは完成させ、ボクはカップをマグダウェルさんの前に置くと、対面するように机をはさんで座った。

初めにナギの息子達が来ると聞いたとき、私が感じた感情は歓喜だった。

サウザンドマスターの異名を持つ男にこの地に封印され、中学生というぬるま湯の中に浸かされ続けてて早十五年。

麻帆らから出ることはおろか、卒業すらできぬこの身を何度恨んだか思い出すこともできない。

なによりサウザンドマスターは十年前に死去した。

それでも莫大な魔力で適当な魔法をかけたせいで、並の者じゃ解除不可能ときた。

不死者にとっての最大の敵は、私を狙う自称正義を名乗る魔法使いなどではなく退屈だ。

なのに私はこれから無限に近い時間をこのノー天気な中学生生活を

しなければいけないのか？

冗談じゃない。そう言いたいのが冗談にできない情況に半ば絶望していた。

そう所詮は、していた、だ。もうすでに過去形に過ぎない。

ネギ・スプリングフィールドとマギ・スプリングフィールド。

サウザンドマスターの忘れ形見であり、私がこの忌々しい封印を解く鍵になる者達だ。

奴の息子だというのに礼儀が悪くないガキだがその血筋は本物らしく、マギはともかくネギの魔力保持量は悪くない。

これなら封印を解くのにも申し分ないだろう。

しかし、それでもまだ手を出すことはできない。

歩くのに重心が全くぶれていないという足取りや、殺気を当てた時の反応からも、兄の方は戦闘経験があるか、少なくともなんらかの武術は学んでいる。

私の見たところ、実力はこの学校の魔法先生と似たり寄ったりといったところか。

血を吸うのは弟で決定した。魔力量や難易度を考えても当然のことだ。

だがそこでマギという存在は明らかに障害となるだろう。

今の私の体力は一般の子供と同じようなものだ。封印される前と比べれば、貧弱貧弱っ！と言われてもなにも反論できん。

満月の時ならまだ少しはマシだが、それでも危惧してしまうのは、このぬるま湯に浸かり続けたせいで慎重になっていると考へたいものだ。

まだ手出しはしない。時間はいくらでもあるのだから。

15年待った自分に待てない理由があるだろうか？ いや、無いな。

だからマギ個人に対面するのは、少しでも人間性なりなんなり情報を得るためだろう。

いつものように起こる2-Aのバカ騒ぎを見るのも悪くはないが、あのくそ寒い外にまで行つて見るようなものでもない。

それに、なにしろマギは隙だらけに見えてあと一歩が踏み出せないような、そんな雰囲気を出している人間だ。どんな行動をするか想像ができない。

まったく、私が進んで相手のことを調べるなど、それだけすることが無いのも事実だと言えるが。

よつて私はここでマギと軽い会話を続けてつつ、マギのことを観察していた。…会話というよりもマギが勝手に話しかけてきているだけなのだが。主に内容は説教だった。

「別に勉強しろとは言いません。ですけどサボりは良くありませんよ」

「ふん、ならマギ先生はあの授業になぜ授業を受ける必要があると考へる？ 将来的に使うことのない技術を教えられ、それを学ぶ事になんの意味を持たせるつもりだ？」

「む、むう。ですが集団で学ぶと言う事は団体行動の概念を覚えることであって、授業は…」

「ならばそれを率先的に教えればいいんじゃないのか？ 授業によって意味のない事を学ばせるならば、技術の為の知識をつけさせたほうが世界の発展になるだろう？」

「確かにそうですけど…なんかんやで自分がサボってる事をつやむやにするつもりですよね？」

「ほう、問いをすることから逃げたか。まあそれも賢い選択ではある。もつとも、私は納得できない限りマギ先生が私を説き伏すことはできないがな」

むむむ、とうねるマギに対して私は、勝った、と口元で笑っていた。

大体にして先生としての経験が足りないガキに私を説き伏せるとでも思ったのか？ バカめ。タカミチだろうが学園長だろうが看破したのだぞ？

もつとも。これが指導員の新田だったら敗北していただろう。私のサボり中の安眠を妨害し、授業に行かせてしまう人間など奴だけだ。つまり私はこの校舎の一角で堂々とサボっていくつもりだった。

「はあ、名簿にタカミチから何かあったら相談するように言われている理由が分りましたよ」

「だったらどうする？　女々しくタカミチにでも言いつけるか？」

額に手を当ててため息をつくマギを見ながら、ぬるくなったココアに口を付けた。　　：久しぶりだからか意外と美味しいな。

というか、名簿のタカミチからの書記は、悪の魔法使いである私に対する懸念であって、素行のことではないのではないだろうか。

マギは額の手をテーブルに置き、気落ちした様子で口を開いた。

さて、どうするつもりだと考えた私だったが、口から出たのは予想外の言葉ではあったな。

「しませんよ。ボクも昔は素行は良くありませんでしたから、あんまり怒れるような人じゃないんですね。立場上是きちんとしますけど」

意外な言葉に私はむっと眉をひそめた。

素行が悪い、つまりこいつも昔ナギが言っていたように、学校で問題を起こしていたのだろうか？

弟の方は絵に描いたような純粋な、悪く言えば世間知らずで疑う事をしないガキだから、問題など起こしてはいなかっただろう。

目の前にいる人間もそう見えるが、それなりに賢いということか。
むしろナギの方がバカに思えるのは気のせいじゃない。

目を細めゆつくりと味わいながらココアを飲むマギを、まじまじと観察してみる。

こちらの視線に気が付いたマギは、なにか不思議なものを見たように首をかしげた。

「？　どうかしましたか？」

「いや、ただ意外だと思ったただけだ。その歳で先生になったのなら、弟のように真面目でなければ成れないだろう？」

「ははは…、耳が痛いですね」

先生になったのはじじいの差し金で間違いではないと思うが、そのための知識は本人が習得しなければならない。
だとしたら問題児である者ができるものかと、ふと考えた。

そしてその本人は昔を懐かしむ老人のように笑っている。思ったんだがコイツは枯れているのではないだろうか。女子中学生の先生、しかも発情期に目覚める時期の少年が目立った反応を起こさないのだから。

「なにをしたとかは言えませんが、昔はボクは結構な問題児でしたよ。それもマグダウェルさんに劣らないくらい」

遠い昔を思い出したのか、遠い目をするマギを見ると、本当に回りにいる奴らと同じ年齢ではないかと思えてしまった。

べつに魔法使いだから精神年齢が高いと言っわけでもない。年齢不相応ではあるだろう。

…ああ、たしかにコイツはナギに似ていない。だが……

「ほら、誰でも一度は通る道ですよ。ボクは社会に反逆してやる！
っていうマグダウエルさんが真っ最中の厨二び「誰が厨二病だ！
！」わわわ、なんですか？」

そしてこの発言だ。

本人はきよとした表情をしているが、オマエは現在進行形でこの病気だぞ、という、これほど突き刺さる皮肉はない。

「あ、でも別に変じゃないですよ？ うーん、ほら『因数分解が何の役に立つんだよ』とか、『大人は汚い』だとか『私は空を飛べる！』って思ったりしません？」

…くう、今確かに過去進行形で勉強なんて役に立たないと談義したばかりで、大人の汚さなんて人生経験の分理解し、空なんていくらでも飛べ…る、な。

「あとは…実はマグダウエルさんって二つ名とか大好きじゃないで

すか？ ブラッディウィッチ『鮮血の魔女』とか ダークエンジェル『漆黒の堕天使』とか、 ドールマスター『人形使い』だとか」

「ぬおおおお、やめんかつ！」

二つ名？ 生きていくうちにいくらでも付けられたそれは、私自身
気に入らなくもないものも多く…く、完璧じゃないか。
奴に厨二病扱いされるには十分な奨励ではないか。

くそ、ナギの直線的に人をくったような事をするのとは反対に、婉
曲的に天然ぶっているほうがよほどたちが悪い。

それに二つ名のどこが悪い！ 十分に悪くないセンスだろうが！

ブラッディウィッチ『鮮血の魔女』とか ダークエンジェル『漆黒の堕天使』とか、 ドールマスター『人形使…

私はそこで違和感を覚えて思考を止めていた。

まで、それはおかしいだろう。たしかにふざけたような様子もなく、
自然にだされた言葉だが、それはおかしい。

ドールマスター『人形使い』 いわれるまでもなく、私が昔から付けられていた二つ
名であり、私自身を表す言葉だ。

ならば、なぜ目の前の少年がその言葉を知っている？

…知っていたのか、私を？

私が視線をマギに向けると、マギはココアを飲んでいる最中で、表情もそれを味わっているものと変わらない。

「知っているのか？」

「？ なにをですか？」

聞かれたマギの表情は、疑問が現れている。もっとも、それが本当ではないとしか私は思えなかった。

だから切り返しに私は言った。直線的ではあるが、これほど分りやすいものもあるまい。

「私が魔法使い、だということだ」

ボクはココアを飲みきったカップをテーブルに置き、その問いに対して一拍置いた。

知っている。一応600万ドルの賞金首、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。不死の魔法使いと呼ばれるその人物であることを、今更ながら確認した。

名前自体は知っていても、普通は学生やってるなんて思わないから気が付かなかった。

それに、既に賞金は取り下げられていたし、あまり興味が無かったから分らなかったのだろう。

だが、教室で受けた殺気といい、あまり中学生らしくないのも頷ける。

とはいえ、なにげにノリやすいんだな、と。印象は第一印象と大きくかけ離れてきてはいるけど。

ちなみに興味の持った切欠はネ口の写真である。

たしかそこには顔を真つ赤にした制服の女の子がいて、後ろに後で書かれたであろうマグダウエルさんの名前といくつかの二つ名、『我が生涯に一片の悔い無し』という、その場で書いたであろう血で書かれた文字があつたのを覚えている。

まあネ口だから仕方ないか。名前の方が少し気になったから調べてみたけど、一瞬で検索に当たるとは思わなかったね。

さて、マグダウエルさんの問いに対してどう答えようか。嘘はつかないがボクの信条ではあるけど…

とりあえず、（。d （エ、コイツナニッテンノ？　と思わせる表情を作っておく。

……沈黙が流れる。

そして見る見るうちに顔が赤くなっていくマグダウエルさんを見て、

ボクは表情を変えずに思った。

…うん、からかいやすいね。

「まほうつかい、ですか。へーふぁんたじーなことばですねー」

「棒読みで言うな！ 大体にしてキサマもそうだろうがっ！」

「あーはい。ぼくもまほうつかいですよー。あつとそうだ、心配しないでください。ボクはその人の趣味や外見、状態や考えで立場を考えはしません。きちんと一定の節度と距離を保って接しますよ」

「遠回しに、お近づきになりたくありませんと言っんじゃない！」

「いえいえ、ほら、ボクも二つ名はあまり嫌いじゃありませんし。
ダークエヴァンジェリン
『闇の福音』とかかつこよくていいですよね」

「キサマ知ってるな！？ 知っているんだろう！？」

「まあそれなりには」

さも私は悔しいですと言わんばかりに顔を赤くして齒ぎしりする姿を見ると、真祖の吸血鬼というのが信じられない。

「ふ、ふん。キサマは恐れんのか？ キサマの目の前に居るのは600万ドルの賞金首、しかも真祖の吸血鬼だぞ？」

「…まあ…うん、あんまり気にしない事にします。重そうな話ですし」

そもそも第一印象はネ口の写真の、制服を着て恥ずかしがっている女子生徒である。

…昔何かをしたという事をボク自身が知らないのなら、過去の事を見てその人を量ることはできない。

なぜ、どうして、行動を起こしたことが分らないのなら、分る現在を見るしかないのだから。

ボク自身になにかが降りかかるならともかく、聞いてて微妙な話を聞きたくはない。

「しかし、それ以上に引つかかることがあるんですね」

突然の話題転換にむっと眉をひそめたマグダウェルさんだったが、ボクがマグダウェルさんの話をあまり聞きたくないことを察したのか、「なにがだ」と一言返した。

一応これは聞きたかったことでもあるので率直に質問してみた。まあ特に確信に触れるようなものでもないだろう。

「えつとですね、600万ドルの賞金首だったってことは、凄く強かったんですね？」

「当たり前だ。少なくともこの学園程度なら片手暇で潰すこともできるがな」

にやり、と笑う姿を見ると、本当にできるんだろうと考えてしまいたくなった。

そう、だからこそこの着眼点である。

「そこなんですよ、いくらなんでも全力前回のエヴァンジェリンさんと戦って無事だとは思いません。

ですけど、この土地に封じ込められる原因が分らないんです。

マグダウェルさんがドジって負けたというのも想像できませんし、きっとこの結界をフル活用したのか、それともよほど畏に長けた高位の魔法使いだったのかわ——…ってどうかしめたか？」

…気が付いたらなんかお腹が痛いのか、ぶるぶると震えて俯いてた。

「……ククク、ああ、キサマは関係ないさ。キサマ“は”関係ないな」

だがしかし、マグダウェルさんはものすごく良い笑顔で笑っていたのだ。

はて、お腹が痛くて笑うと言う事はあるのだろうか、いやない。だとしたら、俯いてしまったのはなにかを我慢しているようにする

ためだろう。

なるほど、マグダウエルさんをこの地に封印した魔法使いは、が思わず思い出して笑ってしまうぐらいの好敵手だったのかもしれないね。

それでも負けた時の事を蒸し返すのは失礼かもしれません。

「あーと、すみません。あんまり聞かれて面白い話しでもありませんでしたか？」

「いやなに、面白いさ。よりによってキサマがそれを聞いてきたんだ。ああ、安心しろ。キサマ“は”関係ない」

なぜにボクの名前が出てくるのだろうか？

……………わからん

「まあ愚痴程度なら聞いて上げますから、できれば今度はサボってない時に来てくださいね」

冷や汗混じりにボクは言葉を締めくくった。

「授業に行かせるはずがいつの間にか授業は終わってることについて。どう思います？」

「知るか。元はと言えば奴が…いや、キサマに話しても無駄か」

どうやらエヴァンジェリンさん、15年間もこの場所に封印されていたために、何度も中学生をやらされたせいかな、本当は優等生らしいです。

愚痴なんかも溜まっっていて、やれクラスメートが幼稚だとか、今年の奴らは異常だとか、新田先生から逃げられないだとか、溜まるもんは溜まるので、ひたすら愚痴を聞いてたら授業は終わってました。

「まあ程ほどにお願いします。サボる程度ならある程度は許容しますが、いくら苛付いているといっても他の人に迷惑をかけないよううにしてください」

「気が向いたらな。というが無理だ。あっちが勝手に敵視するだけで、私にとってはどうでもいいことだ」

はあ、セルヒコ先生も魔法使いだったし、他の人もそうなのかな。いやボクはそっち方面じゃなくて、普通の人に迷惑をかけないように言っただけだったけど…まあいっか。

「大変ですねマグダエルさんも。まあボクできることと言えば愚痴を聞く程度ですから、放課後なんかには暇だったら来てくれるといいんじゃないでしょうか？」

「…変な奴だな。私は真祖の吸血鬼で立派な魔法使いからは悪とされる存在だ。キサマもなにか思うところは無いのか？」

「あははは…特にありませんね。ノーコメントでお願いします」

まあ真祖の吸血鬼が怖いのは確かですが、危害を加えるような人物だったらこんな封印しないでしょ。

五体を動かせないようにするとか、命を奪っておくとか、普通の魔法使いだったら賞金に目がくらんで悠々と自慢するでしょうから。

それが無くて生かしているなら、それほど悪い人物ではないと考えたのだと思いますし、マグダウエルさんを封印するぐらいすごい魔法使いなら、そんな判断を間違えたりはしないと思います。

「やれやれ、本当に変な奴だ。立派な魔法使いとやらを目指している人間とは思えん」

「はあ……まあ目指してませんし。ネギから聞いたんですかそれ？」

「なに？」

マグダウエルさんは意外そうな表情をしているけど、こっちも出された単語が意外で首をかしげた。

「なるほど、だからキサマは変だったのか」

「いや、失礼ですよそれ」

「そんなことはどうでもいい。というか、じゃあなんでキサマは魔法使いになっただんだ？」

どうでもいいというのは軽くへこみますよ、うん。

「あーそれは簡単な話です」

魔法使い、というかボクは魔法使いには向いていない。

それはだれよりも良く知っているし、選択肢がそれしかない、というわけでもなかった。

それに、ボクが魔法使いで居るのは、言ったとおり簡単なことでもある。

「ボクは、英雄になりたいんですよ」

ただ単純にボクは自分の夢を答えた。

対するマグダウェルさんは啞然というか呆然というか、とにかく意表を付かれた様な表情を見せた。…なぜだろ？

「ククク…アーツハツハツハツハ！　そうか、英雄か。そうだ

ろうな、ああ確かに英雄に憧れるのもおかしくはない。いいんじゃないか？ 悪くない目標だろうよ」

「…なんか凄く馬鹿にしてません？」

「ククク、そんなわけがないだろう？」

さて、この辺りで失礼させていただくよ。学生というのは授業を受けるものだからな」

なんともうそ臭い言葉を言ってマグダウェルサンは立ち上がる。

やれやれ、と授業に向かつてくれる事に安堵しつつも、ボク自身もそう暇な時間ではなかったと思った。

「また来てくれると暇が潰せてうれしいですね」

「ふん、気が向いたらな」

軽く手を振って部屋を出て行くのを見送ると、ボクは大きく気伸びする。

まさか中学校の教師をしていて最強種の人物と出会えるとは普通に予想外だ。

というか、ここにエヴァンジェリンさんを封印した魔法使いはどんな人物だったんだろうか。

きつと凛々しく、カッコいい人だったに違いない。

マグダウエルさんの気が乗っているときに聴いてみるのもいいかもしれないな、とぼんやりと考えた。

「さて…ココアも飲んだし…、明日の授業の仕度でもしよう、とその前に」

ボクは二人分のカップを洗おうと立ち上がった。

「英雄…って、それってネカネ姉さんが言ってたのだよ。サウザンドマスターは英雄^{ヒーロー}だって」

それはよくネカネ姉さんがネギやボクに言っていた事だ。

ぴんちの時にやってくる、スーパーヒーローみたいな人だって。

それを聞いているときはネロも苦笑していたし、間違いではないんだと思う。

「そうだな、たしかにナギはヒーローだ。だがそれと同時に英雄^{えいゆう}でもあったのだ」

「英雄^{えいゆう}？」

「ああ。…ヒーローになることなど簡単なことだ。困っている人が

いて、それを助ける事ができたのなら、それはその人にとってはヒーローなのだから。

…そうだな、英雄えいゆうというのはナギの在り方でもある」

ボクはよく分らなくて首をかしげる。そんなボクに苦笑してネロは視線を外に向けた。

「じゃあ…、ネロは英雄じゃなかったの？」

「フツ、私はただの不良神父だった。そして、ヒーローにも英雄にも成りきれない半端者だ」

む、とボクはむくれると、その答えに反発した。

ネギのヒーローはサウザンドマスターかもしれない。だけど、ボクにとってのヒーローはネロだったのだから。

だけど、じゃあネロの考える英雄って言うのはどんなことなんだろう。どうすれば英雄になれるのだろう。

「英雄の条件？ … ああ、そんなものは簡単だ。

何度転ぼうが前に進み、何度躓こうが前を目指し、泣こうが、悲しもうが、後ろにどんな後悔を背負おうが、それでもただ自分は間違っていないと言える者。

英雄^{えいゆう}とはただそれだけのものだ」

そうだ、ただそれだけのこと。なのにどうしてネロはできなかったんだろう。

ボクはそれが不思議でしかたなく、それと同時に決心したのもこれが理由の一つだった。

「うん、ネロができなかったならボクは英雄になるんだ。それに、絶対にサウザンドマスターを超えてみせる」

決心を固めるボクに少し驚いたのか、やれやれといった様子でネロは答えた。

「あまり気負いすぎぬようにな」

それは凄く簡単で、ネロが言うには少し似合いすぎている言葉だった。

おまけ

「そういえば、サウザンドマスターってやっぱり凄い魔法使いだから、やっぱり学校でも凄かったのかな？」

「あ…ああ。色々凄かったと聞いている…な。……………器物破壊的な意味で」

「あれ、最後なにか言った？」

「いや、なんでもない」

「ふーん、あ、じゃあネロは魔術じゃなくて魔法はつかえるの？」

「魔法？ ……ククク、なに、魔法など一定の資財があればいくらでも使えるものであるのだぞ？」

「資財？」

「ああ、ちょっとした紙の束で横つ面を殴ればどんな人物でもいう事を聞く、本当の魔法…ふべらっ！」

「……………すごい、焼けたフライパンがリビングを飛んでいった」

「あ・な・た・は！ どうしてそういうデタラメな事を教えるんですか！」

「ま、まで話せばわか…」

「問答無用！ いつもいつもいつもそんな事ばかり言って…少しは反省してください！」

い、犬養…ふぐうつ！ はおうっ！ ひでぶっ！ な、なにをする
だあーふびぶっ！ …白か…うぐっ …わが生涯に沢山の悔い有り…

「ネギがいなくてよかったなあ」

蹴りからマウント体勢で殴られるネロを見ながら、ボクはそんなことを考えてココアを飲んでいた。

第六話 英雄（後書き）

とりあえず、書くのにももの凄くてこずってました。フラグを蒔くのが忙しいんだよ！！すみません。もう少し短く纏めたかったです。

次回は神父編でバトルが入るので、練習作品でもあるのでかなり時間がかるかもしれません。気長くお待ちください。

こっちは何も無ければテスト編だと思います。では。

3話 天武の才（前書き）

神父編のなかの修行編です。

早く物語を進めたいと思う一方で、こういう話を入れなければなら
ないというのも大変だと気が付きました。

3話 天武の才

時が経つのは速いというが、既に荒耶綺礼という人格の俺が存在して、もう三年が経とうとしている。

詠春は本格的に神鳴流の修行を始めたからか、勉強が悲惨な目になってしまい、俺の家に押し掛けて勉強することも暫しあり、それに伴い近衛さんが着いてくるため、結構長い縁になったと言えるだろう。

俺はと言うと、身体が思う存分動く事の嬉しさから鍛錬を、魔術の精度の上昇と汎用性が富むように続けている。

あとはとある理由で結界についての鍛錬をしている。まあ生活面はこんなところだ。

次は経済面。これは関西呪術協会に入ってくる依頼をいくつかこなす事で、それなりにできてはいる。まあ、そこまで危険な仕事を任される事はないが、給料はかなり多かった。

さて、気がついた人もいるだろうが、この年代は高度経済成長期だ。勿論、どの会社がどんな商品を作るか知っている俺は、株で笑えるほど金が入ってくること、ポカーンとしたくなっていた。

任。堂？ 買いあさりましたがなにか？ バブルが楽しみでしかたない。

まあ現在は、気や魔術で思うぞんぶん身体を動かせるために、修行が趣味で楽しいいう無我の極致に来ている。つまり金を使うことが

無い。

銀行？ バブル崩壊が怖いのでバブル崩壊年代には全部引き出しま
すがなにか？

さて、今度は鍛錬のことだ。

話は変わるが、感卦法という技術を知っているだろうか？

厳しい修行で体得した気と己の魔力を融合させ、爆発的にエネルギーを増加させる技術。究極技法と呼ばれるそれは、難易度の分の見返りがある技術だと言える。

縁側に座りじっと集中してそれを行っていた。

周りにはそれが気になりこちらに向けている視線があるが、そのまま無視してその工程を始める。

視線を下に降ろし、そのまま右手に気を、左手には魔力を纏わせ、それを空っぽの器に流し込むようにして…合成した。

ぱしゅん

「……そう上手くはいかんか」

「それはそうだろ。究極技法と呼ばれるだけの技術だぞ？」

ふっと大きく息を吐いた俺は、家の柱に寄り掛かるように座る詠春がそう言ったのを聞いて、軽くため息をつきたくなった。

成長期の真っ最中の詠春は、いつちよまえにも俺が二十歳の姿の幻術の時に近づきつつあるような身長になっている。

落ち着きもここに極まり、流石にもうエロ本如きではうろたえなくなつたのが素晴らしいほどの成長だ。生真面目だがなかなか太い性格になつたもんだ。

現在は七夜の体術を使った新しい戦闘方法の模索中である。

色々鍛錬の事を言いたいと思うが、非常に遺憾だと思ったことが…詠春にはもう七夜の技はあんまり効かないんだ。

というか、奴の才能がありえん。若造の癖に気を使わない純粋な戦いで道場をいくつか破ってやがった。ありえん。

それに、神鳴流と七夜の技術は、どちらも退魔の技である。

さてここで問題だが、純粹に交配による肉体の改造と技術を極めた退魔の技と、氣という鍛えれば鍛えるほど凄く強くなるというはちやめちやエネルギーを使って極めた退魔の技…どちらが優秀だろうか？

平均的に言えば神鳴流。当たり前だ。技術の錬度はさながら、強化

の魔術を使うことを前提とした七夜の技術のようなものだぞ。

一般的な神鳴流剣士なら相手にできなくはないが、もう才のある詠春には敵わない。

故に、俺は新しい戦い方を模索するしかないというわけだ。

「魔法に呪術、結界に感卦法。……戦い方を決めかねてるのは分かるが、どれか1つに統一したほうが良くないか？」

詠春の言葉に思わず腕を組んで悩む。

確かに、感卦法はあと少しで使用可能程度にはできそうになつてはいるが、寧ろそこからどれだけ身体を巧く使えるようにするか、という課題もある。

結界の才能は変態レベル（身体に埋め込まれた仏斜里のお陰だろ）魔術はまあまあ。西洋魔法も結構齧ってる。むろん、万が一のために仮契約の陣ぐらいはかけるぜ。気分的にはコン・ームのようなものだ。

呪術、見習いより上手い。

氣の上昇率はチート。たぶん仏斜里のおかげ。原作では死にくいという効力しかなかったはずだが、靈的な何かが出ているのかもしれない。

……戦う、という点に於いて俺はかなり才能が有るのだろう。当たり前だ、この身体はチートでできている。

俺は色々興味を持ちすぎているのかもしれない。

3話 天武の才能

もはや私服同然の黒の神父服に紺色カソックスは、夏場は確かに暑くなり、今の俺を苦しくさせているのも確かだが、逆にそれに気が回らなくなれば集中できていた証拠だった。

イメージする。

俺はその時、森の中で切られた切り株の上でじっと目を瞑って座禅を組み、一つの事をイメージし続けた。

自分に感じられる魔力を左腕に流し、呪術の発動体である埋め込まれた仏舎利に霊力を感じ取った。

そうしてその霊力を自分の周り、自分を中心に１メートル四方を頭の中で世界を隔離させ、本来ある世界から切り離す。

切り離された世界はやがて異界となり、俺を中心として発現した。

全てを通さぬ不可侵の結界、硝子を張られたように見えるそれだが、確かに形を成して境界を作り出していた。

「ほう、見事なもんだねえ」

それを木の椅子に腰掛けながら見ていた老婆は、思わず感嘆の意味も込めてそう呟いた。

「だろうな、最も俺にはこれしかできないがな」

俺は照れ隠しにそう答え、俺は結界の強度を更に高めた。

現在俺は修行として結界師としての訓練を受けている。もっとも、少しかじっている程度で、長所を伸ばす方向で見ているが。

大きな魔法や物理的なダメージを受けないようにするための結界を張る事が俺は得意である。

何も結界についての知識が無かった状態でも、俺のこの結界は二流呪術師ほどの強度はあった。

二流、ということで馬鹿にされるかもしれないが、今現在俺の結界の強度は一流並とほめられた為、素直に嬉しい。

「まあ、確かに綺礼は未熟でも、これは合格をあげてしまうよ」

「よっしゃっ！」

俺は思わずガッツポーズを決めてしまった。

この老婆、浦島さんは世界中を渡る、呪術師の中でも最たる人物らしい。

世界でも優秀な人材であり、最強の魔法使いと名高い右近衛門とも互角に渡り合うほどの実力者らしい。

「じゃあ今日は三時間でも大丈夫だろうよ。『京都大文字焼き』」

「は…？ はああああ！！？」

今すぐ解こうかと思つた瞬間に、浦島さんは少し上げた手を振り下ろすと、俺を中心に大の字に炎が広がっていた。

周りが森なのに何考えてんだ！ と思いはしたが、すでに火が移らないように結界を張られている。

おいおいおいこれ空気大丈夫なんだろうな？

気は抜けない。抜いたらたぶん炎…もとい獄炎に塵にされる。

ただでさえ威力は上位なのに術具も必要としない、そんな熟練のものが使つたらどうなるか。

ものすごく頑張つて一流並みの結界を維持することで俺は精一杯だった。

そして三時間後…

「死ぬかと思った」

「ふえふえふえ、それで本当に免許皆伝じゃよ。本当に凄い才能だねえ」

今度は俺が大の字になって地面に汗ぐっしやりで大きく息を吐いていた。

呼吸はなんとか結界の中に空気の通り道を作成して、火は入らず空気は入るようにと、頭の中を振る活用して生き延びる事ができた。

そんな俺を見下ろす浦島さんだが、ずっと魔法を展開していたはずなのに息切れ一つ無い。これだから化け物レベルの人物は困る。

なのに毎回修行の内容は、水攻めを抑えてみたりだとか、連続で貼り続けるだとか、けっこうなスパルタである。

浦島さんはじつと俺を見ると、やがて笑みを見せて口を開いた。

「これじゃあこの結界で私が教える事はないね」

「そうか…いままでありがとうございました」

もとより俺は結界についての才能は不可侵だけらしい。

きつと荒耶の名前から貰ったから、こんな才能がついたのだろう。

それでもこれは自分の才能には違いがないので嬉しい事には変わりない。

身体を起こし視線を浦島さんに向ける。

おそらく言う事は最後だろう。ただその言葉に俺は耳を傾けた。

「不可侵の結界。なんびとたりとも進ませず、拒絶し、絶対の守護と成す…。さて、結界にも様々あるけど、これを天が綺礼に授けたなら、きつと誰かを護るための人物になるんだろうね」

「そういうものか。だけど、自分でもそれの方がいい」

争いが好きなわけじゃない。ただ自分が守りたい人ができたら、その人は絶対に守れるほうが俺は好きだ。

「さてと、俺はそろそろ行きます。詠春のほうも修行が終わった頃ですし。もう一度言いますけど、ほんとにいままでありがとう御座いました」

「そうかい、…そうだ、免許皆伝の暁にこれをもっていきなさい」

そう言われ俺は投げられたものを受け取る。

黒い石が連なるそれは、太陽の光が反射して黒光りしていた。どこか神聖な雰囲気をもし出すそれは、呪術師が腕に付ける呪術発動体の数珠だった。

仏舎利がある俺には必要ないかと思うが、一応のもらい物だからあ

りがたく貰っていく。

それに対してもう一度礼を言つと、俺は今度こそ足を詠春の元へと向けた。

さて、何回も言うならば、凄い才能だった、と浦島は後姿を見ながら思った。

結界を張るのはきちんとした修行を積み、その上で行なわなければ逆効果であることが多いにも関わらず、あの神父姿の少年は最初から殆ど成功していたのだから。

天性的な才能。 たった一つだけとはいえ何度やつても失敗が無く、その結界の中に異界として別空間を作り出すその技は、優れた呪術師だ言われた自分でも不可能であり、また彼にしかできないものなのだろう。

護る者、綺礼はそういう力を持って生まれてきた天才であると浦島は確信していた。
だが、

「その在り方は…、壊す者のあり方なんじゃよなあ」

もとより持っていた力もそう、そして更に力として戦闘技術を磨くことも、必ず相手を壊すすべに他ならない。

そしてそれをただ愚直に追い求めれば、…さらに護る者がその道を

進めば、到着する先は…。

ただそれが憂いてため息を吐く。

自分の渡した仏舎利は気休め程度のまじないの効果と、呪術の補助しかない。

青山の剣士も荒耶のあり方には気が付かない。そしてそれが理解できるであろう右近衛門は近くに居ることが無い為に気が付けないだろう。

自分が言ったとしてもそれを理解する事は難しい。大人びているとはいえ、まだ幼いのだから。

そう考えると、自分の子供に裏の世界の道に入らせなかったのは正解だったと思うしかない、と。

浦島ひなたはそう考えてもう一度ため息をついた。

「ばてたか詠春？」

「冗談を言うな、アラヤ。お前こそ汗ぐっしょりだぞ？ 疲れてるんじゃないのか？」

俺と詠春はそんな軽口を叩き、修行の最後に行なう手合わせを始めようとしていた。

俺の家の存在する山の訓練場にて、詠春は大太刀を両手で構え、俺はだらりと手を投げ出し意識を集中させる。

体内で練った気を纏い、俺は魔術回路を起動して黒鍵の設計図を頭から引きずり落とし投影する。

それと同時に作られた黒鍵を投合し、詠春にむかって俺は駆け出した。

気と魔力の混合、感卦法ができればより体を動かす事ができるのだろぅが、もう五年ほど鍛錬しても実戦に使えるほどの質ではなく、俺は気を纏うことにしている。

だが気は“纏う”ものだ。魔術の強化は違う。内面の筋肉などを直接強化して気を纏うと、普通に気だけを纏うより体が動きやすくなる。

微妙に反発することもあるが、気の物理防御力はかなりのものなので、基本的な戦闘状態では俺は常にこの状態で居た。

そして指から離れた黒鍵は、手甲作用がないにも関わらず弾道ミサイルの如く飛来する。

「甘いっ！」

だがそれを詠春は難なくそれを後方に受け流すと、受けに回らずむしろ前に前進した。

神鳴流に飛び道具は通用しない。受け継がれてきた型の業は矢や弾

丸を打ち落とし、剣のみで弓や鉄砲に勝ってきた。いくら強化された肉体で投げられようと、鉄砲の弾より遅いものを見切れない道理はない。

両者、詰め寄って一瞬で距離を無くすとアラヤは鉤爪のように黒鍵をもって詠春の剣を受け止める。

剣一本にかけられる握力の違いからか、黒鍵を落としたアラヤが気を使った移動で大きく後ろに跳ね飛ばされるように移動した。

そこにかかる詠春の追撃。

瞬動は使わず純粹な気で強化しただけの移動だが、神明流の技の一つである斬空閃、飛ばされた斬撃がアラヤの身に迫っていた。

「チッ……業ッ」

だからこそアラヤは左腕を前に突き出して物理的な不可侵の結界を展開した。

ここでいうアラヤにとって結界とは西洋魔法使いにおける魔法障壁のようなもので、直視できない壁は飛ばされた刃の斬撃を止めていた。ちなみに以前詠瞬の硝子に直撃したがごとの惨劇はこの技だった。

本来物理的な結界の展開には術具が必要となる。

水晶、呪符、護符などがあり、一部の術師は人払いや不可視などの結界をなんの補助もなく作成することもできるが、アラヤはまだ修行を始めて数年という未熟者だ。

だが、なんの道具もなく結界を展開できるのは、彼の手に埋め込ま

れた仏舎利、それが補助ないしブースターとなり、不可侵の結界を張ることができたのだ。

ただし即興ではそこまで強靱なものは貼る事ができない、集中的に力が集まる神鳴流は、それを壊す事に限りなく向いている。

半径一メートル半を被う結界を発動されたのを確認した詠春が、いまだとばかりに瞬動で距離を詰めると、それはもうわずかにタイムロスがある技の始動に入っていた。

気の変換、刀身に雷を宿し魔法じみた気を補充すると、詠春はそのまま剣を振り下ろした。

「雷つ光つけええん！」

方向性が持たされ移動する雷の斬撃が結界を直撃する。

エネルギーに耐え切れなくなった結界は、まるで硝子の如くかしゅんと音をたてて崩れ、その勢いはまだ途切れることなくアラヤに向かっている。

だが詠春は気を抜くことさえない。なぜなら同時に飛来した黒鍵が頬を掠め、一瞬起こった土煙の中からアラヤが飛び出してきたからだ。

強化の魔術による服の強化。自ら着ていた神父服とカソックに魔力を流し強化すると、自分の顔の前で腕を交差させ、雷光閃を防ぎきる。

神鳴流の技といっても、名前のせいか仏舎利のせいか、アラヤの不可侵の結果は優秀だ。削減された威力なら氣と強化された服でも十分防ぎきれぬ。

一瞬のけぞった詠春の元へかけたアラヤは距離を詰め、左手に持った黒鍵で詠春の振るった剣を止めると、足で刀を蹴り上げた。

弾き飛ばされる詠春の剣、それを見た俺は左手に作り出した黒鍵で追撃しようとした瞬間、

目の前に突きつけられた小太刀でその身体を止めていた。

「…ふう、俺の勝ちだ。アラヤ」

「ふむ、もう少しいけると思ったのだが…惜しいな」

アラヤは作り出された黒鍵を消すと、かるく肩をまわす。

それを見てからようやく詠春も大きく息を吐いて一息ついていた。

おまけ

数秒の間で俺は何度死にかけたのか、と聞かれるなら、迷わず零回

と答えているだろう。

避けられると分っているのだから死ぬというビジョンが立つわけでもなし、真剣を使っているとはいえ、数年行なっていれば慣れないことはないということだ。

それにこうして鍛錬の後に手合わせするのも日課になっているので、戦闘経験は少しは取れているといえるだろう。

「はーこれで俺の負け越しになるというわけか。かなり上達したな、詠春」

「いや、アラヤも十分上達してる。ただひっちゃかめっちゃかに手を出しすぎなんだと思うぞ」

森にある多くの木のおかげで作られた木陰で俺は暑苦しいカソックやら僧衣を脱ぐと、上半身を裸にして水に浸したタオルで身体を拭いた。

運動した身体をさっぱりさせるのもまた俺の趣味というか、快感の一つでもあり、詠春も同じように身体を拭いていた。

「確かにそうか。いくらなんでも魔法までは手を伸ばしすぎだな」

「しかもなんのできるのが仮契約の陣だけなんだ？ しかも一ヶ月もかけて」

俺の普段の生活は、基本鍛錬をして、呪術学…というか結界と魔術の戦い方の勉強をして、土地転がしして、そして詠春と勉強をする。なんというか、鍛えれば鍛えるほど体が動くという感覚は嬉しいものでもあり、そうしてその身体を使って詠春と手合わせするのもまた面白い。

剣なんかもたしなむ程度だ。神鳴流ではなく、ほとんど基礎の剣の振るい方とか、剣を使った戦い方だとか、多少はできる程度にすぎない。

仮契約は空いた時間で趣味で覚えた。なぜかって？ 決まっている。

「ハツハツハ、そんなもの詠春と近衛さんをらぶらぶちゅっちゅさせるために決まってるではないか！」

「ああ、理解したぞアラヤ。一発殴らせろ」

軽やかに高笑いする俺に対して額に青筋を浮かべる詠春、という構図はもはや俺にとっては常識的なことの範疇でもある。

この詠春、奥手っていうレベルじゃなくて、高校生になってまで律儀に護衛を続けているのだから真面目だと言える。

そもそも近衛さんも後鬼と前鬼を呼び出せる程度の術者ではあるし、そろそろプライベートとかの問題もあるんじゃないかと思ったんだが、近衛さんが気にしていない。

「というか、ホントに近衛さんに対して、詠春は護衛対象ってだけなのか？」

「…確かに家に招いて頂いたこともあるが、あるが！ 俺は護衛としているだけであって、それ以上の事は無い！」

そう男らしくいう詠春ではあったが、俺は冷めた視線を送っている。

さて、それを本人の前で言えるのならこいつは大した修道者だよ。そしてその機会はすぐに訪れた。

木の枝を踏む音が爽快に響くと、ここに浸っていたタオルを置いておいてくれた人物が、ペットボトルを片手にかけて来ていたのだ。

五年がたってすらりと伸びた身長、黒く滑らかな髪とは対照的に肌の色は白く、普段はあまり着ない洋服であるワンピースがよく似合っている。

穏やかな顔立ちは穏やかなで、少し美人になったことは昔から変わっていないかった。

「二人ともお疲れ様さんな。これ、差し入れや」

先ほど話そうとしていた噂の人、近衛さんは柔和な笑みを見せてペットボトルのスポーツ飲料を俺達に手渡した。

「お、サンキュー。悪いね近衛さん」

「あ、あ、ありがとう御座いますお嬢様!？」

「ふふ、詠春くんは相変わらずかたいんやなあ。そないに緊張せんでもジューズは逃げへんで？」

そして分りやすく緊張する詠春を見ると、なにがそれ以上の事は無い、だ。と俺は考冷ややかに考えていた。

ぶっちゃけ言えば近衛さんは、完璧っていうれヴえるじゃないって程の人物だ。

彼女は器量がチート、老人がいるなら労わり、小さい子が迷子になっていたらできる限り一緒にいてあげて、相手に無粋にすることがほとんどないが、悪いと思った事はしつかりと発言する。

だというのに高嶺の花ではなくて、野に咲く小さな花のように人の心を和ませる。え、なにこの完璧超人？ チートだろ常識的に考えて。

そんなことを考えつつ視線を向けると、近衛さんはなにかに気が付いたのか、少しだけ頬を赤らめて口を開いた。

「それとな、えーと、実は詠春くん和阿ラヤくんって…付き合ったりするん？」

「ほう」

「は？」

突拍子もないことと思えるが、俺は確かにそうかもしれない、と感嘆の息を漏らしていた。

ふむ…今現在自分で言うにもなんだが肉体的には、ウホッイイ男の二人が上半身裸である。

メガネをかけた利発そうな青年に厳格そう（に見える）な俺、どっちかっていったら俺が攻めで詠春が受けだな、と考えていたら、ククと思わず笑がこみ上げてきていた。意味？　ＢＬで調べたら幸せになれるよ。

「あの、えっと、お嬢様？　なにがどう化学反応を起こしてそんな結論に…」

「あつ、ちがうんよ！？　友達の本に載ってたのから気になっただけなんや！」

ふむ、こんな年代に腐った女子が存在していると言うのも予想外だ。自分も漫画を描く程度の心得はある。なにしろ２～３年前に練習していたら、なかなか描けていたので一枚絵ぐらいならかけるだろう。

俺×詠春…ふむ、果てしなく不毛だが、嫌がらせには丁度いいな。

「さて、な。私は神父だから隣人を愛する事は当然のことだ。そし

「て私自身も自分が好ましく思ったならたとえ同性でも愛せよう」

「そ、それって本当なん綺麗くん!？」

[illegible]

素晴しきボディーブローは俺の腹に突き刺さり、とっさに気で強化してなかったら死亡していただろう一発のおかげで、俺は後方にある木にぶつかるまで吹っ飛ばされていた。

しかし近衛さんも興味がある年頃ということか…、オタクに近い修道者の本を好むようになるとは…。

とはいえ俺は俺が愛するようになったなら、同性でも愛せるのは嘘ではない。…というか同性を愛する事自体ありえんが、自分が好意に思った者に対してならできなくはないということだ。多分ありえんが。

さて、とりあえず詠春に一発もらったのだ。なにかやり返す方法は無いものか…。

「…やっぱり二人はそういう関係だんたんなやな…」

「違います！　ありえません！　考え直してください！　アラヤが俺のことをちよつかい出すのは、もはや日課だったではありませんか！」

近衛さんの肩をぎつしりと抑えて説明する詠春。そういう反応があるからちよっかいを出すのがやめられないと言っただ。

ふむ…この状況、使えるな。

「で、でも綺礼くんは…嘘を絶対につかへんし…」

「あれはどうせ『詠春、貴方を愛してぬ…フウハハハーハアー！引っかったな馬鹿め！』とでも言うに決まっています！嘘はつかなくても本当のことが入っていること自体が稀でしょうが！」

「う、うーん…そうなん？」

「そうなんで…」カシヤツ

二人にとって、とくに詠春にとってはものすごく重要な話をしている最中に、乾いた音が響き渡った。

それは俺のした行動によることで、二人は俺に視線を向けていた。

さて、俺がしたことはほかでもない、いつでも常備しているカメラにて、二人の様子を撮っただけだ。

驚く近衛さんと、ものすごく嫌な予感を顔に張り付かせている詠春、訳がわからないといった様子で詠春は口を開いた。

「…オイアラヤ、嫌な予感しかないんだが、それは？」

「なに、気にする事はない。ただ写真を撮っただけだ」

しかし状況が状況だ。傍目で見たら色々アレだといいたくなる。

「上半身裸の男が可憐な女子高校生に迫ると言う、MO3（マジで押し倒す三秒前）。ふむ、詠春&近衛さんアルバムに新しい作品が増えた、な。みんなに言いふらしに行こーっと。右近衛門に電報を送らねば…」

「アラヤあああああああ！！！！ お前はいい加減にしろお
おおお！！！」

上半身裸でガチで拳で殴りあう俺達、一瞬きよとした近衛さんだが、相変わらずの光景であるために思わずクスリと笑っていた。

「やっぱり仲がええんやなあ、二人とも」

詠春が聞いたら全力で否定しそうだが、俺はむしろ壮大に笑ってやった。

腐れ縁の仲になりそうな相手ではあるが、こうやって馬鹿やれる相手がいるというのも、俺は恵まれているのだと実感した。

3話 天武の才（後書き）

戦闘シーン、…難しいですね。これをもっと長くすると…。
本当は一つにするつもりでしたが、多かったので分割します。

次回は少年編に番外編を入れてワンクッション入れ、次にまた神父編を投稿予定です。

閑話一 先生の休日（前書き）

受験勉強が死ぬほど忙しいです。

息抜きに書いている程度なので執筆は遅いです。

ですがのんびりしていただけたら嬉しいですよ。

閑話一 先生の休日

その人の背中はどこか哀しそうでありながらも、寂しさは削がれたような、そんな印象を持った。

そこは戦火を受けて崩壊した街は、バラバラにされたパズル盤のような風景だった。

建物は壊され、大地は割れ、樹が転々と建っているだけで他には殆ど何もない、哀しい風景だった。

そんな風景の中に三人の人が見える。

一人は神父服の姿の男、一人は軽装でマントを着た白髪の少年、そして最後に少年の手にひかれ歩く少女。

そんな中でも少女が一番幼く、青年が怖いのか少年の後ろに隠れておそるおそる覗いていた。

少年は無表情だが、神父服の男は苦笑した。

「また会ったね、『神の代行者』」

少年はなんの感情も思わせない、無機質な口調で言う。

「さて、な。確かに久しぶりと言うべきかディステイ？ ああ、」

神』^{ゴッド}と言つには私は不自然すぎる。『偽神』^{ゴッド}と言われた方が気が楽でいい」

「…僕のことをそのふざけた名前で呼ばなければ一考するかもしれないね」

「断る。『不吉な運命』などと言つ名前よりはマシだろう」

少年は少しだけ眉をひそめたが、なにが可笑しいのかそんな様子を見て苦笑した。

風景は変わる。

夜、パチパチと火の中から割れる音が聞こえてきて、小さな焚き火は辺りを赤く照らしていた。

鍋に火をくべて水をお湯へと沸かすと、男はカップにさらさらと粉を入れ、その中にお湯を入れてデイスティと呼んだ少年に渡した。

近くでは少女が寝ている。少し目を配りながらも少年はカップを受け取り、渡されたスプーンで中の粉末を溶かした。

「相変わらず子供らしいね」

「そうでもない。ココアは身体を温めるには最優のものであると私は思う」

「…温まることは否定しないよ。僕はどちらかと言えばコーヒーの方が好ましい」

そう言いつつもカップを傾け、その味を確かめるようにゆっくりと飲んだ。

男もまた苦笑してカップを傾ける。

少し見方を変えれば二人は親子に見えるほどそれは自然な姿だった。

「君は、この惨状を見てどう思う?」

少年は男に向き直りぼそりと呟く。

「…悲惨、無残、どうしようもないほど哀しい悲劇だ。争いの中に生み出した生物同士の業ではあるがな」

男は悲しそうにそう答え、だが、と言葉を続けれる。

「それを含め、世界と呼ぶのだろう。喜劇も悲劇も、ただ世界の構

成する一部でしかないのだから」

「…ああ、言いようが無いほど…無情だね」

少年は目を瞑り何かを考えているように見えた。

男の方も同じで、ただ何かを思い出して深いため息をつく。

「だが、世界が無情でなければ人が有情であることはありえないのも事実だ」

「……………」

「デイスティ、貴様はこの無情の世界でどこを探す？ ……全てを満たす解など無い。それが分らないほど貴様も馬鹿ではないだろう？」

少年は黙る。その瞳には目の前の男も、音を立てる焚き火も入ってはいなかった。

なにも感じさせない姿はまるで人形だ。操り糸が無くなっても動き続けるマリオネット。ボクの瞳にはそう写っていた。

その時必然か偶然か、眠っていた少女が目を覚ます。

片手に人形を持ち、寝ぼけた顔で目を擦りながら少年を探している姿は、年相応の子供であった

「あれえ？ ……いとさま？」

「なんでもない。寝てていいよ、栞」

少女はその声を聞くと、何を安心したのか、ぎゅっと人形を抱きしめると、毛布を被ってそのまま寝入ってしまった。

ただ少年はその姿を見ていた。

なんの感情も無かったその瞳にはうつすらと風景が写る。

「それでも僕は……」

その言葉が少年の口から零れ落ちそうになったとき、世界が真っ白に染まった。

番外話 先生の休日

なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なにあれあの図書館と言う名のダンジョン。

ボクは図書館に本を借りに行ったつもりだったと思えば、いつの間にかダンジョンに巻き込まれかけていたのだ。

久々の休日であり、資料の整理などが少ない今日は、のんびりと図書館で本を探そうかと思ったが…甘かった。

アレで一般人も入ると言うのだから驚きである。事故が起こらない、と言うのが信じられない。流石麻帆良クオリティ。

図書館島、世界から貴重な本が集まる世界最高峰の図書館は流石に格が違った。

…今度は学校の図書室で借りよう。額を押さえてボクは大きくため息をついた。

図書館島の三階辺りで、ボクがいつものコートを着てなければ、矢に突き刺さっていたかもしれない。

「麻帆良では常識に囚われてはいけないんですね、うん」

ふと横を見れば、制服姿の少女がリンチされ…もとい、逆に一発も入れることができずにチャレンジャーが宙に飛ばされている。菲さん、ストリートファイトは犯罪ですよ。

あと今日は休みで登校日ではありません。

さらに視線を移せば、竹刀袋を背負った少女がこっそりと影から誰かを伺っている。

桜咲さん、ストーカーですか？ 悩みがあるなら相談室に来てください。

さらに視線を変えてみよう。とある生徒が自作スケール1/1UF
Oを飛ばして実験しているのが見えた。

スゴいや流石日本ですね、葉加瀬さん。

ボクは大きくため息を吐く。

麻帆良はすこし自重と言っ言葉を覚えた方がいい。

とりあえずそれらの物事をスルーして、ボクは適当に足を運んでいった。気にしたら負けだから仕方ないだろう。

「…ん？」

その時ボクの視線に、また違った意味で気になるモノが見えた。

一言で言うならそれは教会だ。

とくん、と胸の音が耳に響く。

教会、そこは僕に取ってはまた色んな意味で特別な場所でもある。

トラウマが存在する場所でもあり、またそれでも自身が長い時間一緒に居た人物が居てくれた安心すべき場所でもある、矛盾した場所なのだから。

「……………」

気がついたらボクはそちらに足を向けていた。

理由はない。ただ、久しぶりに足を運んでみたくなった、それだけの事だ。

ゆっくりと扉を開いて足を踏み入れる。

外は冬の気温で一段と冷えていたが、礼拝堂の中もさほど気温は変わらないハズなのに、さらに涼しく感じていた。

人は少ない、と言うよりは訪れている人は誰もおらず、年齢が小学生ぐらいのと中学生ぐらいのシスターが掃除をしているだけだった。

髪型はシスター服のために分らなかったけど、顔を見て名簿から名前を引っ張り出す。

たしか…春日美空さん、だったかな？　あまり目立たない人だから確信は無いのが辛い。

そんな理由もあってボクは入り口で立ち止まっていた。

ふいに、雑巾を絞る手を止めて春日さんがこちらを向く。
一瞬呆けたような顔をしたのもつかの間、ボクが軽く頭を下げると、
訳が分らないといった様子で首をかしげた。

「あれ… マギ先生じゃん、珍しいスね。 教会になんかようでもあるんで…（ちょんちょん）ん？ なにココネ？」

「口調、戻ってる」

「…………… コホン、こんにちは、ようこそマギ先生。 教会になにか御用ですか？」

「無茶しなくてもいいですよ、春日さん」

あっけからんとした口調を極めて冷静に直すのはいいけれど、エセ聖職者の臭いがぶんぶんする。 身近に居たからそれは敏感になったけれども、全然嬉しくないね。

「あ、じゃあいつか。 卒業まではおしとやかについていう取り決めがあつたもんだからさ、いやー、固ッ苦しいってのなんの」

頭の後ろに手を置きながら笑う春日さんに対して、じゃあ何でシスターやってるんだらう、と聞きたくなつたけれど、自重することにする。

たぶんシスター服が可愛いからとか、そんな理由だからかもしれない

い。

ちなみにネギは既にシスター服はコスプレ済みだったはず。ああ、久しぶりにネロはネカネ姉さんに怒られてないかな？

「大変ですね。まあ、…ボクもなんとなくここに来ただけです」

「だよねー。もう、最近じゃほんとに熱心に来る人なんて全然ないんすよね。どうせなら何か懺悔でもしてく？」

「ハハハハ…全力で遠慮します」

というか美空さんってこういう性格だったんだ。

ふだんからこれならあのクラスでも目だ……たないですね。色々濃すぎるあのクラス。

そのあたりで意識を一旦あたりに向けて、この礼拝堂の様子を見渡した。

礼拝堂と言う場所はボクは好きだ。

いつもふざけてごろごろしてるネロが、歌を歌うかのように、ちゃんと信仰している人に後ろから刺されそうなの作った自作聖書』を読み、そしてそれに引き込まれていた。

涼しい空気の流れるその礼拝堂には、家に親が居ない子供達やぽつぽつと何人かが来ているだけで、聴衆は少ない。

だけど、その声はいつもとは想像できないほど心に響き渡り、まるで、そう、

神の言葉を代行したかのような、そんな雰囲気だったことを覚えて
いる。

でもいつからかボクはあの教会には足を運ばなくなった。

いつだっただろうか、“あの時”以来、ボクは足を踏み入れようと
もしなかった。

あたりまえか、封鎖されているなら入りようが無く、どうすることも
できないのだから。

あれ…… “あの時”、ってなんだっけ？

あの時はあの時だよ。

ほら、なにかもめちゃくちゃになった、雪の降っていたあの日……の……

……

砕けた。

カシャン、と音を立てて砕けたそれは、まるで子供がオモチャを壊したように見えて、

カラン、と音を立てて地面に落ちる。

ケラケラ、と壊した子供は笑い、

グシャ、とそのオモチャを破壊する。

じつ、と壊れたオモチャを見たボクは、それがボクがよく話したおじさんに似ていて、遠くではおばさんによく似たオモチャが、石くずになって転がって、

ああ、あれは、と小さいながらも理解した瞬間、

頭の中で、なにかがカシャン、と壊れた。

.....

「.....！っ！っ！っ！っ！」

頭を押さえて思わずしゃがみこんだ。

胸からこみ上げてくる嫌悪感を無理やり押さえ込むと、大きく肩で息をして、その全部を吐き出した。

「ちょ…先生!？」

春日さんはあわてて様子を見た。

当然だ、突然目の前で具合が悪くなって何の気も留めない人はあまりいないだろう。

「大丈夫です、なんでもないですから」

「ホント？ …バケツならあるけど、吐く？ 顔真っ青だし」

「……………どうぞ」

ずい、と目の前に差し出されるバケツ。

ココネさん、だったかな？ 凄く有り難いけど掃除中のにごった水の臭いのせいで、ちよつと吐き気がしたからしまつてほしい。

あー、なんで今更思い出すんだろう。

ちよつと昔のトラウマのようなものだけれど、時々起こるフラッシュバックに慣れる事ができない。

…まあ当たり前かな。トラウマは慣れることがないからトラウマなんだから。

たとえ、それより酷い惨劇をいくら見たといったって、トラウマが怖いと思わないようにはならないらしい。

「…はあ、なんかすみません、ちょっと立ちくらみしてしまいました」

「…まあそういうことにしとくけど、無理しないようにしたほうがいいんじゃないの？」

「…（ごくん）」

- - - - -

春日美空の場合

サウンドマスター英雄の息子が来る。

それは当然のごとく麻帆良中の魔法関係者に伝わったことではあるう。

（だからって言って何かが変わるわけじゃないんだけどね）

HAHAHAと遠い目をしながら美空はそんなことを考える。

彼女の周りで変わったことと言えば、いつも出張で居ない（理由は分かるが）高畑先生が担任から外れて、新しく子供の先生が入ってきただけだ。

良く考えれば劇的な変化なのかもしれない。だが、陸上部の活動と教会での手伝いと勉……強？ で忙しい身には、へくふくん、そのなかー、の言葉で済ませるほどのことだった。

（にしても、なぐんか考えてのと違うような…）

美空はココネに背中をさすられているマギを見ながらそう思った。ちなみに大丈夫です、とマギは言ってるのに背中をさするココネは、やっぱりココネだと美空は再確認した。

ともかく、ネギはともかくマギについては、もう少し厨二病患者のような正確だと思い込んでいたのに、会ってみれば以外に普通の好青少年だ。

一応報告書というか、2人についての資料は目を通した。

プライバシー？ なにそれおいしいの？ といわんばかりのことに美空は多少呆れたが、それを見て印象を固めたということもある。

ネギについては、要約してしまえば、まじめでいいこ。ちょっと禁書のところに忍び込むけどべつにいいんじゃない？ と言った感じのないようだった。

予想通り、そのまじめな性格のせいでいろいろ大変そうだったが、べつにそこまで驚いたわけじゃない。むしろ美空は初日に仕掛けた罠を思いっきり踏んでくれて大爆笑していた。

で、マギの資料だが、それはそれでなかなか意外だった。

経歴には、メルティアナ魔法学院を二年留年して卒業。

それだけなら別に珍しいわけじゃない。ただ一言書かれていただけで、その印象は変わっていた。

マギ・スプリングフィールド。11歳の時、教師に暴行を加え重症を負わせ、学校を一時期停学。二年後、魔法以外は優秀な成績で卒業、と。

その文章のせいで、美空は「オレは社会に反逆してやるぜヒャッハーッ!」という厨二病患者を想像したが、それも杞憂に終わった。

変わりにどこか掴めないようなのんびりとした性格の人物が来たのは、まあ悪くないと美空は考えている。

（というか、私よりよっぽど聖職者らしいじゃん。まあ教師だけど）

この場の雰囲気慣れている、というか、長くこの場所に居たかのように、その姿はこの場所に自然体に見える。

いつのまにか背筋を伸ばし、ココネにお礼を言ってる姿は、やはり普通の少年……自分より背が高いから青年か？ に見える。

いつもは教壇に立って授業をしているのを見ていても、見たことはないがここで神父様のように聖書でも読んでる姿を想像した方が、余程似合っているだろう。

「春日さんもすみませんでした。迷惑かけちゃったみたいで」

と、美空が思想にふけっている合間にも、そこそこ時間が過ぎていたようだ。

「あーうん、まあ気にしなくてもいいよ。まあ風邪かなんかだと思うし、今日は早く寝たほうがいいよ、うん」

あまり2人には魔法関係で接触を控えて欲しいと言われているのと、早いところ掃除を終わらよう。

美空もそう思っていたし、マジ自身もそのところは感じていたらしい。

「まあ、暇が出来たらまた寄っていけばいいんじゃないかな？ 神の御家はいつでもあなたのために開いています、ってね」

いつもシスターシャークティがいていたようなことを口にする。

「ははは、多分大丈夫ですよ。神はいつもあなた共に在り、貴方を見守るでしょう、ともいいますからね」

ん？ どこかで聞いたようなフレーズだけど…。

美空はふとその言葉に違和感を覚える。

シャークティが言っていた言葉にもあつたけれども、なにかが違うような、そんな違和感を感じていた。

「ではこれで失礼しますね」

そう言つて教会を立ち去るマギに軽く手を振ると、美空は首をかしげた。

「んーどつかで聞いたことがあるようなフレーズだったけど……なんだっけ？」

少し視線を下におろし、美空はココネに尋ねた。

ココネは無表情だがどこか呆れたようにつぶやく。

「神は自らは何もせず、だが神は常に貴方と共に在る。喜怒哀樂を共にし、貴方を見守るだろウ。故に、自分の生を悔いなく生き抜いたときこそ、貴方は神の姿を知り、救われることになるだろウ」

長く、だがシャークティがたまに苦い顔をしてぶやいていたのを思い出し、なるほど、と美空は納得する。

「たしか……荒耶の教え、だっけ？ それ」

「……………（こくん）」

ああなるほど、魔法関係者なら知っててもおかしくないか。

美空はそうなつとくすると、掃除の続きをすることを思い出してため息をついた。

そして、どこその英雄が地方を回るたびに伝えていた教えを呟きつつ、再度バケツに入れたままの雑巾を絞り始めた。

- - - - -

近衛木乃香の場合

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

木乃香は逃げていた。

全員が黒ずくめのサングラスで、そして全員が自分を捕まえようと追いかけてきていたのだ。

普段平日に来ている学校内は、平日とあってだれもない。

故に足袋と草履を片手にローリースケートで駆け抜ける彼女をとがめる人は居なかった。

捕まればすぐさま連行される、鬼ごっここと似て異なるのは、つかまればそこで終わりということだ。

「木乃香お嬢様〜！ お待ち下さい〜！」

……そう、彼女の祖父である近衛右近衛門の趣味である、お見合い、に、それに必要な写真を撮る為に連行されてしまうのだ。

2-Aの教室を横切り、階段をローリースケートに関わらず、何の苦も無く駆け抜ける。

普段の彼女を知る人なら、さぞ驚くに違いない。

だが、木乃香は登校時に毎日電車の中でローラースケートをスタンバイして、ドアの開放と同時に明日菜と共に駆け抜けてきていたのだ。

ギリギリの電車で奥の方に詰められた時には、さらに大変である。遅刻を避けるために明日菜の異常な脚力に着いて行き、階段をローラースケートのまま登ることはさらにあるのだから、階段を下る程度なんでもないのである。

……追加して言うならば、彼女はお見合いのために上質な着物の状態である。

そんな彼女が廊下を九十度直角に曲がるテクを見せているなら、普通の人も驚くかもしれない。

だがそんな彼女を追うSPの方々もたいした物だ。人数を使って少しずつだが追いついてきていたのだから。

「うう、今日はなかなか逃げへんな」

お見合い写真が取れなければお見合いの為の資料は作れない。

なので木乃香はよく合間を縫って逃げてしまうことが多い。今日に限ってはローラースケート持ち込むなど、さすがに祖父に考えるものがあるのだろう。

教室を横切り、一階の開いている窓から外へと飛び出て、またすぐに校舎に入れる場所の窓が開いていることを見透かして、ジャンプして飛び込み路線を変える。

別に彼女は運動部に入っているわけでもない。だが毎朝明日菜が（
ry

やがて校舎の奥に到着すると、普段は使われていないと思われる部屋の中に入り込んだ。

後を確認してもS Pの方々は影も形も見えなかったため、木乃香はそこで大きく息を吐いた。

「ふう、ふう、はあ、流石に疲れて……………」

と、そこで木乃香は不自然なところで言葉が止まっていた。

それもそのはず、だれも居ないし使って居ない割には鍵は開けっ放しだった場所で、自分のクラスの副担任がココアを飲みながらくつろいでいたのだ。

……空間が固まる。

それはただ単純に2人とも驚いているからだ。

もしもマジが着替えている最中で、上半身及び下半身が裸体なら、木乃香は叫び声のひとつでもあげたかもしれない。

だが、そこはマジである。

本人もネギと違ってそこまでハプニングスキルを持っているとは思っていない。

故に硬直から開放されたマジは、今まさに飲もうとしていたカップをテーブルに置くと、につこり笑って口を開いた。

「こんにちは、近衛木乃香さん。なにかボクにご用ですか？」

- - - - -

「お見合い、……瀬流彦先生が言っていた合コンとはまたランクが一つ上の会談ですね。なるほど、近衛さんがですか」

「そんなんよ。なんやおじいちゃんの趣味みたいでなあ」

「ですが近衛さん年齢でお見合いですか……弁護士の人や小児科のお医者さんなんかとお見合いされたら仕事では致命的ですよね。

中学生と結婚するってことで自動的にロリコンの称号が付きますから」

言われてみれば、よりによって中学生の歳の差結婚が世間では良い

目では見にくい。

木乃香はその言葉に苦笑いしつつ、見合いをしないにしろ、今度祖父にそれらが該当する人は抜かして貰おうと考えていた。

なんとか木乃香が駆け込んだのは、すでにマギの自室と化した相談室であつた。

相談室の先生が高齢ということで退職してから使われなくなり、埃だらけになってしまった部屋にだれかが近づくわけもない。

……はずだったのだが、すっかり綺麗にされた部屋には一人暮らし用の冷蔵庫まである。

祖父がマギの部屋を学校内に用意したとは聞いたけれども、この部屋は盲点だと木乃香は思った。

一方マギは本は諦め書類の整理をしようと思っていたら、突然自分のクラスの生徒が綺麗な格好をして勢いよく部屋の中に入ってきたのである。

すこし話してみると、某学園長の趣味に巻き込まれたとは聞いたが、やはり真面目半分呆れ半分だった。

「まあ悩みがある人が来る事ありませんけど。相談室としては機能してませんね」

「あははは……そやな。この学園の住民でみんな元気やん？ 悩み事ゆつても『駅前のお店が移転した』ぐらいしかないんじゃない？」

麻帆良学園中等部は、いじめ？ なにそれ新しい遊び？ と言わんばかりに仲の良いし、そもそもエスカレーター式で大学にいけるため進路の相談事さえ無い。

バカレンジャーのピンクにいたっては悩み事が無い事が悩みである。そんな校舎内での相談室の価値は零に等しい。

とはいえマギは相談室の先生になったのだから、少しぐらい相談事があると気合を入れていたのだが……空回りとなり少し残念だった。

「んー、じゃあ近衛さんは何か悩み事がありますか？」

一応、ここは相談室である。

明らかに偶然が重なって此处を訪れたとはいえ、一応聞いておく。普通は相談室に来たなら相談事があるのだが、そんな人がめずらしいのだから仕方が無い。

「うーん……悩み事かぁ」

別に木乃香は頭の中お花畑ではないが、悩みという悩みはあまり無い。

麻帆良学園の生活は毎日が充実しているとも言えるし、不満と言う不満も無い。

祖父のお見合い話、アスナの寝坊、駅前占い専門店の移転、あとは親友の……

そこまで考えて木乃香はすつと息を詰めた。

木乃香が京都で過ごしていた時の幼馴染、そのことを悩みと考えるなら悩みなのだろう。

一方マギも木乃香が少しだけ雰囲気が変わったことで、失敗したと考えていた。

相談室では相手が話をするのであって、こちらから聞き出してよい事ではない。

「あつと、……ココア飲みます？」

「あ、えと…、うん、お願いな」

少し間が欲しいと思った二人だから、話から逸れた言葉であつても気にならなかった。

マギはいつものように少量の粉末を入れお湯で溶かす。

冷蔵庫から新しく牛乳を取り出すと、なみなみとカップに注いだ。

「なあー、マギくん。昔の友達と仲直りするにはどうしたらええと思う？」

マギはその言葉に手を止めるも、黙ってココアを入れテーブルに置いた。

表情は変わっているようには見えないが、マギとしても熟考しているのだ。

そもそもマギは同世代の友人と言える友人は居ない。

人生経験は自分なりに多いとは思っているし、この場はありきたりな言葉で茶を濁すのが良いのではないかと考えた。

「難しい、ですね。幼馴染の友人とですか？」

「あ、うんそうなんよ。ウチな……」

京都……なるほど、せつちゃんさんと近衛さんは関西の出だったんですね。

そうなんやけど、え、えとなマギくん？　せつちゃんは名前じゃなくてあだ名ってゆって…

ああ、略称の愛称のようなものですよね。続きをお願いします。

うーん、まあええか。それでな、ウチは小さい頃えらい広くて静かなお屋敷で育ったんやけど…山奥やから友達一人もいーひんかったんや。

そうだったんですか。

遊ぶ相手も、そーきさんとかこーきさんぐらいしかおらんかったしなあ。それに友達というよりお付人って感じや。あとはたまに来るきれいおじさんやけど……いっつもとーさまとじゃれあってたから、これはなしや。

……なるほど。とすると、その初めての友達がせつちゃんさんだったんですね？

そうやね。せつちゃんがウチの初めての友達やってん。怖い犬を追い払ってくれたり、危ない時は守ってくれたんや。

なるほど。仲が良かったんですね。

……少したってウチが川で溺れそうになったときに助けようとしてくれたんやけど……やっぱりせつちゃんもいっしょに溺れてしもたんや。

えっ？ 大丈夫だったんですか？

あははは、大丈夫やなかったらウチはここにいーひんよ。せやけど……その日を境にせつちゃんは剣の稽古で忙しくなってあまり会えんようになって……

それで、そのままこの学園に引っ越してきてしまったんですね。……時々文通はしていますか？

へ……？ ああ、せつちゃんもこの学園にいるんや。そやから一年のときに再開したんやけど……

「そのままあまり話さなくなってしまった、と」

話をそうしめくり、マギはカップに口をつけた。

マギとしては、転校してしまいそのまま仲直りできなかった、と思ったが、そのせつちゃんはこの学園に居るらしい。

それで一つ確信したことがあったが……近衛さんが仲直りできないのはなぜだろうと考えていた。

「うん……やっぱりウチがなにか悪い事したんかなあ？」

「それは、本人に聞かなければわかりませんが。やっぱり聞きにくいですね」

信頼関係とはちがう、信頼は作りにくく壊れやすいが、友情は作りにくく壊しがたい。

そこに情が交えている以上、一度喧嘩しても修復することは難しくは無い。

だが、そんな単純なものではなくて、二人の関係はもっと複雑なものなのだろう。

一応関係の一つに目星を付けてはいても、そこから互いのことを考えるのは、マギにとっては難しかった。

「……すみません、ここまで聞いておいてなんですけど、やっぱり適切なアドバイスをボクは出来そうにありません」

「——そっか。ううん、ええんや。みんなには言ってへんかったから、マギくんに聞いてもらえてちびつと楽になった」

気楽そうに言うも、やはり表情にはどこか陰りがあって、マギは少しだけ自分の経験の無さを恨んだ。

なにかいえる事は無いか、そう考えマギはまた口を開く。

「でも」

「ん？」

「きっかけで物事が変わってしまったなら、どんなささいなことで、次のきっかけで元に戻ると……ボクは思います」

自分の時、とある切欠で世界はモノクロに変わり、それがまた切欠で世界に色が付いた。

変わらないものはないし、変えようとしたのなら、少しだけ世界は変わる。それはマギは知っていたからこそその言葉だ。

「……うん、ありがとな、マギくん」

それをどんなふうに乗えたかはマギには分らなかったが、悪いようにはならないだろう、とマギは考える。

安直な考えだが、自分の変な意見を出して関係を壊してしまうほうが、マギとしては苦手だったのだから。

残ったココアをぐつと喉に流しカップをカラにすると、木乃香は立ち上がって着物のすそを整えた。

そろそろ行くのかな、と考えつつマギは相手側にあるカップを持つとカップを洗おうと立ち上がる。

「そろそろ寮にもどりますか？」

「そのつもりなんやけど……そや！ お礼にちょっと占ったげる」

占い……そうか、そういえば近衛さんは占い部の部長さんだったかな？

立ち上がったところを座るように急かされ、ボクは右手を預けた。

占い、というのはマギは大の苦手なため、されるのは得意だがするのは好きじゃない。

むしろマギはよく幼馴染であるアーニヤによく占いを試されていた。なんでネギにしないの？ と聞いたら恥ずかしいからと返されたの

だ。

マギは何を今更、と考えてはいたが、某知り合いのように口に出してドロップキックを喰らうような事は言わない。

と、そんなことを考えていると、木乃香はなにやら難しそうな表情をしていた。

流石に占いの最中で悩まれると少し怖くなる。

「近衛さん？ ……もしかして運勢、あまり良くなかったとか？」

「あーえーその、別に健康運も勉強運もわるくないんよ。だけど恋愛運が……」

「……恋愛運が？」

「近い将来、衝撃的な出会いがあるでしょう、やて」

これはマギは喜んでいいのかどうか悩む。

自分はまだ14だし出会い云々にはそこまで興味があるというわけではないが、衝撃的、が良くも悪くもどうなるかが怖い。

占い、というのは人によつてはかなりの中する為、あまり樂觀視し過ぎない程度に気にしとこうと、マギは考えたのだった。

「うん、もうすぐアスナに帰ってくるよう伝えた時間やし、そろそ

ろ行くな」

「はあ……ものすごく気になる占いでしたけど、あまり気にしないようにしますね。では、せっちゃんさんと仲良くなれるといいですね」

マギがそう言うと、にっこり笑って部屋をあとにする木乃香を見た後、マギは軽く息を吐いた。

やはり、相談事というのは難しいな、と。

少なくとも自分は同世代の人たちより経験はつんだつもりだったが、やはりまだまだ足りないようだ。

カップを持ち水道に向かうと、蛇口を捻りカップの汚れをさっと流した。

「友達と仲直りする、ですか。難しいものですね」

スポンジに洗剤を付けると、そのまま軽く泡を出し汚れを擦る。

近くにある窓をあけると、冷たい風がそのまま身体に当たり思わず身をすくめた。

そして一度洗い終わると、もう一度ココアの粉末を溶かしながらマギは小さく呟いた。

「あなたはどう思いますか？　せっちゃんさん？」

桜咲刹那の場合

近衛木乃香お嬢様の護衛。

それが私が関東の麻帆良学園に居る理由であり、自分の任でもある……いや、おそらくそれが無くとも私はここに居ただろう。

休日に学園長が木乃香お嬢様にお見合いの話を入れるのは、半分遊びで半分本気でもあるのだろうが、相変わらず、とだけ考える。

それに対してローラースケートを持って全力で逃げるお嬢様もお嬢様だが、最近使われている相談室に入ったというのは少々予想外でもあった。

マギ・スプリングフィールド。良くも悪くも麻帆良では有名な人間であるのは確かだし、私自身もどうもはかりかねる。

貰った資料に対してもそうだが、どうも捕えきれない。

だが、一階の部屋である相談室は外からでも護衛はできる。

多少冷えるが問題は無い。窓際に立ち私はそこから動かなかった。

数十分、程度だろう。

何を話していたかは聞いていたし、思い当たることもある。

だが、私は影からならお嬢様を守ればいい。自分のようなものの身分が気安く話してもいいのだろうか。

思考を変える。木乃香お嬢様が移動した。自分も護衛のために動くべきだと。

「あなたはどう思いますか？　せつちゃんさん？」

その言葉に、私は思わず足を止めていた。

なにをしている、早く自分も動くべきだ。

そう理解していたが、幾分驚いていたであろう自分の足は動かない。

「……飲みますか？　桜咲さん？」

窓から身を乗り出し、カップを近づけるマギ先生を見た。

相変わらずだが授業の時のようにニコニコする様を見ると、どうも調子がくるつ。

おそらく最初から気が付いていたのかもしれない。資料でも見たが、それなりに経験はつんでいるのだから。

「……ええ、いただきます」

自分の簡容的な式であるちびせつなを飛ばし、その後カップを頂く。予想以上に冷えていた身体に、ココアは思った以上に温まった。

「神鳴流剣士、とすると、今は近衛右近衛門学園長からの依頼で関西から出張中ですか？」

「京都神鳴流を？」

「ええ、多少ですが知っていますし、ボク自身も剣の根幹は神鳴流らしいですし」

マギ先生はそう言いながらも、カップを洗う手は止めない。

魔法使いが主流である西洋で神鳴流が広がっているというのは驚いたが、昔関西の長である近衛詠春自身も英雄として有名な身だ。

知っているのはおかしくはないし、あらかじめこちらの事を調べておくだろうし、関東と関西の関係を知っていても不思議ではない。

私はカップに口を付け、そのままココアを喉に流し込む。

やけどをするとまではいかないが、ほどほどに熱いココアを一気に飲むのは無理がある。

ただその場には、風の吹く音と流しで食器を洗う音だけが流れた。

「なにも、言わないのですか？」

先ほどまで木乃香お嬢様との話の中心人物は私だ。
だが、マギ先生は特に何も話す風にはみえず、思わず尋ねていた。

「そうですね。一言あるとするなら……」

マギ先生は顎に手を当てなにやら悩むと、一言だけ呟いた。

「無理は、しないでください」

それはどこにでもある言葉だった。

だが、なぜかは分らないが、マギ先生が言つと重みがある。

「無理や我慢をし続けることはできませんから。だから無理だけはいしないでください」

そうだ、重みがあるのはまるで本人が経験したかのように話すからだ。

私は何を我慢している？ 何を無理している？ いや、そんなことなど何も無い。

私の望みは木乃香お嬢様を守ることだ。それに無理があるなんてことは有り得ない。

「ボクが何か求められたら手伝いましょう。必要な時は尋ねてください」

そう言つてマギ先生は洗いを済ませ、壁にかけたタオルで手を拭く。カップに目を落とすと、少量になったココアは冷めるのも早く、たつていた湯気も少なくなっていた。

「……………失礼します」

私はココアを飲み干すとその場にカップを置いて、今式が護衛しているであろうところに向かった。

無理…いや、そんなものは無い。

考えるより先に実行。今すべきことは木乃香お嬢様の護衛だ。

人が居ない事を確認すると、私は屋根を越えて一直線にお嬢様の元へと向かっていた。

閑話一 先生の休日（後書き）

閑話はもういやだ……

書きたかった事を書けるといのが一番嬉しいですね。

というわけで次回は書きたい事をかけそうです……たぶん。

第七話 臨界点（前書き）

こんにちは、一年ぶりですね。
ですがのんびり始めます。

第七話 臨界点

その時視界に見えていたのは、首と胴が離れている人間の姿だった。

そこにいたのは一時と言えるほどの期間であっだろう。

数年前、ネロが『社会科見学だ』と言って連れて来たのは、NGOの中に存在するある団体だった。

悠久の風と呼ばれるその団体は人員の殆どが魔法使いで形成され、世界にまだ存在する戦場の救助活動や、悪の魔法使いと定義された者達の討伐など、所謂表の世界では対処仕切れない案件を受け持っている。

無論、ボクがそんな団体のメンバーに入れるわけでもなく、ただの手伝いとしてネロと共に後方で救護活動をしていただけだった。

なんでも無茶な話だったらしい。

当時たかが12歳の子供が、後方とはいえ戦場において良いものなのか。

当たり前だけど良いわけではない。

まあタカミチ曰く、ネロが道理を引っ込めて無茶を通すことはよくある話だったらしい。無論逆もないわけではないが。

故にボクもここが戦場だと思うわけもなく、『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』の仕事であるんだと、そうまさに社会科見学だ。

だからおそらくは偶然なんだろう。

後方支援の場に、悪の魔法使いと呼ばれる一団が奇襲してきたことは。

だからこそ、ボクの視界に入ったのは死体だったのだろう。

迎撃に回れる人数は数名、対する相手は十数人。人手が足りずボクも剣を持った。

戦いの基本である前衛と後衛の関係でいう、後方に位置した魔法使いのポジションである者達の元へ向かう。

三人がかりではあったけど、気配を消して近づき意識を奪い、武装解除を行なった。分りやすく言えば素っ裸に服を剥いたと言っている。

正直ネロとの鍛錬は無駄ではなく、修行も済ませた自分にとってはそう苦労したわけでもなかったのだ。

そして数分も経たないうちに、また前衛である魔法使いの従者や魔法剣士のいる戦場にもどって対峙——できなかった。

見えるのはまるで紅い水溜り。

その中にたたずむネロが羽織る法服はは、いつもの紺色のものではなく、血に濡れた双腕は黒く法衣を染めていた。

それをボクは極めて冷静に確認する。

半分以上の者達は気絶し白目を向いているのに対し、死んだ者達は
その全てが、頭、首、胴の三つに分かれている。

その中にいるネロに対して考えたのは、”ああやっぱり”という言葉
葉しかなく、

それがア ■ ■ キ ■ イと呼ばれた英雄^{えいゆう}の有り方であり、

そんな中でネロはただ悲しそうに空を見上げた。

第七話 臨界点

「……高畑先生でも無理な事をしろって無茶な注文だと思うんです
けど、どう思います?」

「大丈夫じゃないかな。ほら、一応一週間前に告知したから、テス
ト対策も立てられるしさ」

そうですねえと軽く溜息を付くマギを見て瀬流彦は苦笑した。

三学期期末テスト、それを期に学園長からネギにも行ったであろう、
修業内容を渡されマギも悩んでいる。

確かに2 - Aは学年で最優秀な生徒も何人かいる。たがそれを、最下層クラスのバカレンジャーと呼ばれる生徒が引つ張るため、結局は平均順位が低くなってしまつのが現状だった。

福担任であるマギは少し早い段階で修業内容について伝えられたため、それとなく呼び掛けたりプリントを作ったりはしているが、あまり効果はない。

お気楽過ぎるとはいえ、勉強くく越えられない壁くく部活か趣味の彼女らに伝えたマギの発言は無論頭に残っておらず、作ったプリントは丸だらけ、つまり丸写しも良い所である。

テスト数日をおいてやっとネギにも修業内容について伝えられた……というのをさっきマギは知った。

マギはネギも知っていたのだと考えてはいたが、先程瀬流彦に言われた言葉によって頭の中は真っ白になったばかりだ。

「難しいですね、教師って。特にこうしたほうがいい、ってことを伝えたいのに伝えきれないのは」

「そこは経験だよ……ってまあ僕が言える程経験があるわけでもないけど」

ネギとマギがどちらが人気があるか、と聞かれれば、マギは確信を持ってネギだと答える。

基本補佐の立場で授業を手伝っている以上、壇上に上がるのはネギで、有名でない相談室で仕事を行っていることもあり、接触があるにはあるがそこまで多いかと考えれば首を傾げるだろう。

だからネギが発破をかければ、多少は皆も頑張るのではないか、と考えたのだった。

「高畑先生も彼女らに少しは発破をかけたい欲しかったんですけどね……といっても、かくいう高畑先生って今出張中ですよね？」

「いや、たしか今日夜中に帰ってくるってさ。あの人も忙しい人だからなあ」

「かくいう瀬流彦先生は暇そうですけどね。今夜もコンパとはいいご身分じゃないですか」

「いや……だってこの歳で年齢〃彼女いない歴はきついし……」

「周りにいっぱい居るじゃないですか……中学生ですけど」

「いやそれ職務的にクビを跳ね飛ばされるね」

「そうですね……瀬流彦先生ってまだ葛城先生ぐらいの年齢じゃないんですから大丈夫ですよ。まだ（ピー）歳なんて年齢じゃないんですから」

「いやそれ物理的にクビを跳ね飛ばされるって！」

マギは自分がやらなければならない事は多いとは知っているが、そんなくだらないことを話ながら時間は過ぎている。

「まあ若いっていいのは良いことですよ。最近ネロもぼやいてましたし」

「いや明らかに若すぎるだろ。年齢的にも若さ故の過ち的にも。まあ若いにこしたことはないよ。僕にとっては熟女はボール球だしね」

「ですよー、若いっていいですよ」

「ええ本当に、楽しお話をしていますね？二人とも」

ぶふお！

――――

「授業に遅れた。というか生き残れて良かった。流石だ瀬流彦」
スケープゴート

葛葉先生が、現れた！ マギは逃げ出した！

瀬流彦、逃げられない！

そのまんまである。

授業開始ギリギリには到着するはずが、ネギに渡すつもりで制作したプリントを自室に忘れた結果、殆ど反対側に位置する21Aを向かうには時間が足りなかった。

だが走るわけにもいかず、教室に到着したのは5分程過ぎている。

授業中に大きな音を立てるわけにはいかない。

そう考えつつマギはゆっくりと教室の扉を開けた。

だとしたらマギが気がつくべきはその時の違和感……以前新田先生に頼まれたネギ宛てのプリントを渡した時と同じような、そんな概視感を感じ取るべきだったのだ。

「どうしてこうなった……」

扉を開いてみれば、一部すっぱんぼんの生徒たちがそこに居た。

マギにとってそれは全くもって意味が分からない未知の領域だった。教室の中央で、単語を言い合をして、当てられない生徒が服を脱いでいる。

女性は肌を見せれば恥ずかしがるという常識を見事に打ち破る光景に、マギは思わず目頭を押さえた。

ストッパーになるはずの先生は何を……そう考えて思い出した教師の姿はネギだ。

普通の教師が押さえられないものを、まだ教師でもないネギは無力であるにきまっている

そして教室に入ったマギには熱中して気がつきもしない。

例えば医師が患者に対して欲情しないように、マギも生徒の肌を見て興奮するわけではなく、きちんと頭は切り替えている。

というよりも、恥ずかしがるという飽和点をとくに通り越している。寧ろ脱いでないのが異常に見える。

お姉ちゃん＋幼なじみ＋ネギ＋変態とお風呂に一緒に入る事が当たり前などということもあり、性意識がインフレ状態のマギに隙は無かった。

「なにやってんのネギ？」

「に、兄さん？ あつと、えつと、なんて説明すればいいのかな…
…ヤキウケンを通して単語を覚えるってことになったんだけど…
…急にみんなが脱ぎはじめて」

「え、なにそれこわい」

ここの生徒は脱ぎ願望でもあるのかもしれない。
そう思いつつマギはため息をつく。

「これは野球拳というんけど、二人はしらない力？」

ちよつと生徒に対して間違った印象を持ち掛けた時、マギとネギは声のした方を向いた。

そこに居たのはもちろん生徒だ。頭にお団子二つに頬の色が健康的に見える少女と、ちよつと二つほど上の学校の教授が持ちそうな物

理の本を片手に持つ三つ編みの少女。

なんと二人は脱いでいないのだ。

「いや、だから別に皆が脱ぎ願望があるわけではないネ。負けたら脱ぐ、っていうルールなだけヨ」

「明日菜さんとかは最近怪しいんですけどね、脱ぎ女疑惑がかかりますから」

『だれが脱ぎ女よ!』

『明日菜ーっ! 次これー!』

「あーなんと言いますか……ボク怒っても構いませんか?」

「別に構わないんじゃないか? 新田先生とかなら確実に雷が落ちてるヨ」

ですよねー、と超の言葉にうんうんと葉科瀬も同意した。

普通なら怒っていいレベルなのは言うまでもなく、先生が二人とも幼いとあう理由もあるのだろう。

「よし、任せたネギ」

「えっ僕が!？」

一応だが担任である。これを越えてこそ修業だ!と、マギは明らかにおかしい理屈を考えていた。混乱状態にあるのだから仕方ない。

「あーコホン、えーと皆さん!今は授業の時間で、僕が内容を理解していなかったというのもありますけど、勘違いだったのでちゃんとした授業を再開しまーす」

『えー、いいじゃんネギ君! あとちよつとただだよ!』

ネギの張り上げた声に裕奈が反応する。あとちよつとだけ〓無制限ととれるのはボクだけだろうか?

「はい、皆さんそこまで。流石に煩くて苦情がきますんで、そろそろ止めてください」

『大丈夫! 授業中でも煩くないようにって、あと技術部の人達が実験の意味も込めて防音性にしてあるよ!ねー超りん?』

「ハカセ、第一第二防音設備は?」

「えーと、正常に稼動してますよ」

「出入口各部と窓は?」

「多少劣化してますけど、許容範囲です。あと十年は持ちますね」

「パーフェクトネ。任せるがいいヨ皆の衆、たとえ宴会をしようが羽虫の音さえ聞こえないヨ！」

「さっすが超りん！私達にできないことを平然とやってのける！そこに痺れる憧れるう！」

これはひどい。

思わずマギは頭を押さえる。

普通のクラス……マギが日本の学校を学ぶために、学校をテーマにした文学作品（普通の）でもこれはなかった。いやそもそも魔法学院に普通なんてあるだろうか？

「このままじゃビリ脱出なんて……そうだ！三日限りだけど頭が良くなる魔法が……」

そして呟かれる物騒な単語。

マギはため息を一つついてから、キツと生徒たちを見る。

何人かそれに気が付いたけれども気にしていない。

「……三十秒以内に着替えてください。さもないければ……」

窓を全開にします!」

マギが立ったのは黒板に一番近い窓である。

さて、今は暖房がかかっていて暖かい。ではようやく立春が近づいてきた季節に窓を開けた場合どうなるだろうか。

「ちょ、先生やらせないよ!」

そう言ったのはだれだったか。数人、足に覚えのある者、朝倉や美空といったメンバーがマギに迫る、が、わずか数センチ開けた窓の前に撤退するはめになった。

暖かいところにいて、なおかつ裸で、冷気の相手をすることはできなかったようだ。

「はいカウント開始しますよー。いち、にーい、さーん……」

「ちょっとまって、ちょっと待ちなさいよマギ! 皆のせいで私ほとんど裸なんだけどっ!」

「裸で迫らないで下さい前を隠してください、例外はありませんよ明日菜さん? あと十九秒」

比較的間違えなかった生徒はやれやれと肩透かしをしながら制服を着て、そうでない生徒は急いで、窓際の生徒はそれはもう全力で。

素晴らしき防音設備は生徒の悲鳴一つ外に漏らす事もなく、授業は無事再開に向かった。

「……………」

- - - - -

「そういえば……………どうかしたのネギ？」

マギが見たのは、先程から顎下に手を当てて考えるネギの姿だ。

自分が教室から出てくるまでの間に、明日菜になにか言われたらしく、こころなしか雰囲気がしょんぼりとしていて、いつものような元気は無い。

何かあったのだろうか、そう考えたマギに一つ思い浮かぶことがあった。

「……………兄さん僕は、……………魔法で何とかすればいいって思ったんだ」

「?……ああ、魔法を使おうとしたこと?」

マギの言葉にコクンとネギが頷く。

先程発動しかけていた魔法、マギはいったい何の魔法かは分からなかったが、目の前でしょんぼりしているネギを見て、発動した後悔したようなものだったに違いない。

魔法は確かに便利なものだ。逆にその恩恵に浸り過ぎれば普通ということを忘れてしまうだろう。

ネギが俯いていた顔を上げた。

先程よりも目に強い意志があり、マギはそこから一種の覚悟を感じていた。

「だけど僕は先生なんだよね。やっぱり自分ためじゃなくて、生徒のためにやんなくちゃ」

「……で、それに気が付いたネギは何をするの?」

じつとネギの目を見てマギは問い返す。

「僕、このテスト期間は魔法に頼らないで、普通の人として頑張ってみる。それができないなら先生になる資格は僕に無いと思うから」

「……………分かった、ボクもプリントを作ったり、範囲の予想問題を小テストにして纏めてくる。頑張ろう!」

「うん!」

その後の行動は素早いものだ。

底辺に位置するバカレンジャー、まずは彼等の底上げだ。

テスト範囲の確認に単限ごとの教科書を確認し、絶対に出るであろう所を重点に、絵なんかも使ってプリントをまとめ上げる。

何人が担当している先生にどんな場所が出そうか聞いて、直接的で聞けはしないにしても、要点をチェックした。

……完璧だ。応用等はともかく基本を押さえるには十分。基本ができれば次に生きる。次に生きればさらなる土台を造りやすくなる。

そう思いマギはパソコンに映るプリントのデータを見て、満足げに頷いた。

と、そこまでの時にはもう時計の針が12時を刺していることに気が付く。

熱中し過ぎて気が付かなかったのだろう、あくびをひとつしてからパソコンの電源を切った。

そして隣に置いた電話が、鈴のような音の呼び鈴を鳴らしたのはその時だった。

「？……っと、もしもし、スプリングフィールドです」

いくらなんでも夜遅くの電話に眉をひそめつつも、いつもの口調で電話に出た。

『せ、先生ですかーっ！？　よかった……繋がった』

聞こえてきたのは少女よりの女性の声だ。

「ええと、誰でしょうか？」

『本屋……じゃなくて、ええつとええつと……のどこです！宮崎のどこです！』

はて？と首を傾げつつも聞こえてきたのは、どうやら自分のクラスの生徒だったらしい。

名簿帳から顔を思い出し、宮崎のどか、と言う名前を思い出す。

そつえばネギの好みを聞いてきた子だ。

ただど流石にこの時間に悪戯電話するような生徒には見えなかった。それに、声に切迫感がある。

「のどかささん？ …… なにかありましたか？」

『えーとえーと、夕映が頭が良くなる本があるから明日菜さんにネギ先生を連れてまき絵とくーちゃんと楓さんを探検するように図書館の中を持ってこようとして……』

なるほど、分かんない。

その時マギはその内容に頭を押さえた。

錯乱しているのだろう、逆にこちらは冷静な声で言えば落ち着くだろうと少し声色を抑え話した。

「のどかささん？ 少し『良いから代わるって！……あもしもーし、ちよつと電話変わったよ変わったよ。先生聞こえる？』」

変わったのはのどかささんよりも少し大人びた声の女性で、これもまた早乙女ハルカという名前を名簿から思い出した。

「聞こえます。どうかしたのですか？」

『実は……あーなーんと言いますか……』

渴いた笑いをしているその声から、おそらくは後ろめたいことがあるのかもしれないと判断する。

どう考えても嫌な予感しかしないことにマギは身構えていた。

簡単に話せばこうだ。

頭が悪い↓頭が良くなれば良いじゃない↓バカレンジャーにそんなこと無理YO!!↓楽して頭が良くなる本が有るらしいZE!!↓ならば略奪だ↓いざ図書館島へ。

そして何故かせのメンバーにネギが巻き込まれているらしい。

ネギ……いや、これは夜遅くに起きたから判断が鈍くなっていたに違いない。

「そうなんですか……うーんどうでしょう?」

もし頭のよくなる本が本当だとするなら、その本は魔導書だろう。確かに罫があるが、魔法使いが行くならそこそこ深い所までもいけそうだった。

大丈夫ですよ。

そう言いそうになったところをマギは自分に待ったをかけた。

ネギは魔力を封印している。それはどういうことか。

マギならある程度身体の動かし方を知っている。だがネギはバリバリの魔法使い、自分が改めてネギに会う一年前ま

でインドア派の最たるものだった。

当然、図書館島の罾は危険なものもある、それこそ万が一で命にかかわるものも。

「大丈夫……ですよ。ボクが探しに行くので、宮崎さんたちは部屋に戻ってください。明日ボクが言いますから、できれば噂を広めないようにお願いします。では」

『あ、ちよっ』

なるべくいつものように、だが動揺が伝わりそうだったのですぐ電話を切ってしまった。

どうする。

万が一誰かが怪我をしたら？ 万が一取り返しが付かないことになったら？

登録したばかりの携帯電話を引つ張り出し、セルヒコ先生にかけた。が、電源は切つてあるようでつながりそうにない。

弱った、まともに交流して電話番号を知っている魔法使いはセルヒコ先生しか居ない。

万が一対応が遅れたら……今すぐ向かうべきだろうか？

「だめだ、人手はほしい。だけど魔法使いは……そうだ！」

もう一度携帯電話を取り出す。

確かに知ってる魔法使いの先生はいない、だが魔法使いではない先生がいる。

なれない携帯電話の番号を押す。

数回続くコール音に焦りながら、マギは相手の電話につながる音を聞いた。

――――

「やれやれ学園長も無茶を言ってくれ……まああの人よりまだマシか」

夜、もう日付も変わる時間、ぼそりと男は呟いた。

スーツ姿にメガネの下には大きな隈を作り、顔色も月明かりのせいではなく悪い。

が、それほどの疲労がたまる仕事も終わり、後は帰宅するだけである。

気を抜けば睡魔にやられてしまいそうなのを防ぐために、男は……タカミチは窓を前回にして車を走らせた。

タカミチの本来の仕事は教師であるが、魔法先生として海外、魔法世界、NGO等多くの場所に交渉へと行くことも多い。

今回はその最たるもので、紛争地帯での魔法使いの鎮圧、海外での魔法機関への交渉、日本の関西呪術協会への修学旅行のための交渉など、ついでついであるという仕事が増えた。

それも学園長の指示も多く、おまけになぜかどこか行く毎に刺客に襲われた。

いくらタカミチとは言っても疲労はたまる。

しかし自分より幼い魔法使いが頑張っているのを思い出し、軽く頭を振って気合をいれた。

「……スプリングフィールド、か」

魔法世界でなら有名すぎるその名前は、自分の友人である真祖の吸血鬼以上である、その英雄の名前だった。

タカミチもかつてはその『英雄』と同じ団体に所属していて、その姿を見てきた。

それと同時に理解もしていた。その重過ぎる肩書きを追いかけようと走っても追いつけず、持たされた者によってはつぶされてしまうようなものだとも。

突然ハイブレーションの音がポケットから響き渡り、タカミチはハンドルから片手を離し携帯電話を取った。

運転中はまずいか、と思ったのもつかの間。緊急用ではなくプライベートの携帯電話にかかって来たものだ。非常識な時間とはいえ相手にとっては緊急なのかもしれない。

電話の番号が知らないものだを確認したが、それを気にせず通話ボタンを押した。

『……もしもしタカミチ！？』

「その声はネギくん……いや、マギくんか。こんな遅くにどうしたんだい？」

『協力してほしいことがあるんです』

彼が夜の遅くに連絡するのは珍しいな、と思ったのもつかの間、その真面目な声にタカミチは思わず静かに聞き返す。

「……詳しく聞かせてくれ」

マギはハルナに言われた事を自分なりに砕いてタカミチに話した。

それを聞くタカミチの思考は真剣なままだ。もう一日が終わりかける時間である。その時間に生徒が抜け出した、ということも問題な

らば、図書館島ということも問題だ。

本来図書館島には一般資料の他、貴重な文献、魔法に関わる禁書までもが貯蔵されている。無論、それを守るための罫も在る。

学園長も全知と言うことは無い。万が一、生徒が事故を起こしたとしたら？

記憶を弄るのは簡単だ。だがその出来事にマジは疑問を覚えるかもしれない。

『ゴメン、今はタカミチぐらいしか頼れる人が居ない。協力してほしい』

「……………」

その一言でタカミチの腹は決まった。

「分かった。その判断は間違っていないから大丈夫だ。あと数分で向かうから、図書館島の入口で待ち合わせだ。準備は大丈夫かい？」

『！ 分かりました。図書館島の入口の橋に向かいます。どれぐらいで来れますか？』

「大丈夫、あと数分で着くよ」

万が一でも被害は少ない方がいい。そんな当然なことを忘れるとは。

そうタカミチは苦笑しアクセルを大きく踏み出す。
法定速度を大幅に超える速度でタカミチは車を速めた。

が、タカミチの失敗は一つある。

この程度の、さらにはネギが絡んでいる事件に学園長が絡まない理由があるだろうか？ いや、無い。

……目に光りがなかった。

もしもボクがその人物の表情を表すのならその一言に限る。

表情が無く瞳は死んだ魚のよう。なにをされたか頭の中で追いつかない場合でもそんな表情をするだろう。

ボクはといえばなにも考えることが出来なかったというのが現状だ。

なにをするわけでもなく、ただその情景を見ているだけしかなかった。

ガチッガチッガチッガチッガチッ

「……着かないな、このライター」

ガチッガチッガチッガチッガチッシュボッ

そう言つてようやく着いたタバコから煙を吸うと、なんでもないようにタカミチは手を握りしめた。

無論、手にあるのは金属で造られたジッポ。

グシャッと金属が出すには奇妙な音が響く。

そしてそのまま果物の搾りカスのようになったジッポ（故）が地面に落ちて、カランと軽快な音を出した。

だがそれを気にするわけでもなく、タカミチはそのままポケットに手を入れた。

『ふぉっつふぉっふぉ。最後の問題じゃ。「Dish」の日本訳は？』

『みなさんアレです！食器とかメインディッシュとか……』

『あ、分かった！「おさら」ね！？』

ワイワイガヤガヤ

「……………ふっ」

目の前に広がる光景、それはよく聞きなれた上司の声と、それに伴う緊張感のない女子学生の声。

ゴーレムに襲われているという緊張感あるはずの光景に、マジはただ呆れ、タカミチはどこか恍惚の表情を浮かべている。

事情を知らないマジにしてみればタカミチの様子は異常であるが、仕方ないと言えば仕方ない。

NGOでの違法魔法使い結社の討伐に、魔法世界への遠征に加えて紅き翼へ恨みを持つ者の襲撃や、帰界帰国後の関西へ修学旅行の行き先になる可能性を考慮しての話し合い、おまけに関西の強行派に襲われそれらのテロを考慮しての車での移動……

タカミチは人間である。

人間である。

ならようやく身体を休めそうになったのに上記の半分の原因になった学園長が、女の子とはしゃいでいたらどう思うだろうか？

「……ああそうだ、たしかマギくんは感卦法の練習をしていなかったかい？」

声は穏やかである。

まるで悟りを開いた僧侶のような穏やかさ。

当然、半比例するように目は数ミリたりとも笑っていない。

「は、はい」

「それはよかったよ。今から僕は『偶然』マギくんに感卦法を見せるつもりでいて、『偶然』生徒が襲われたのを見つけて、『偶然』間に合わなくて、『偶然』力の限りに助けようとしたら、『偶然』あれは危険が無いことに気が付いた、相違はあるかい？」

「な、無いです」

「うん、大丈夫だね」

タカミチはまるで全てを許す聖母のように口元で笑った。目はどうか？どちらかといえば死んだ魚の方が輝いている。両手を身体の前に出す。

魔力と気を合成する。
拳をポケットに入れる。
銅像、振り向く。

『ふお？ おおタカミチく「居合拳！」ふおおおおお！?』

学園長の計らいなら大丈夫だろう。

ゴーレムによって足場を砕かれ生徒が落ちたののを確認すると、タカミチはポケットに手を入れたまま拳を当てた。

「居合拳！ 居合拳！ 居合拳！！」ちよ……落ち着いてく」右手に氣イ！ 左手に魔力ウ！ 豪殺ウ……居合拳！『ふおおおおおおおお！?』」

あれは怒っているのではない。キレている。

心を無にする事こそがカンカホウを行うための一般的なイメージであり、キレている状態とは自らの今やらなければならぬことに従っているだけなのだ。

……と、マギは納得するしかなかった。でなければ普段温厚なタカミチがああなるハズはない。

砕け散るゴーレム。辺りに漂う静粛、マギはただ冷や汗をかき、タカミチはすがすがしい汗をかいてサムズアップしてきた。

マギは思った。タカミチを怒らせるのはタブーなんだな、と。

結局、テストは2 - Aが最下位になったかと思いきや、マギが遅れてきた生徒のテストを採点して加点したところ、見事一位を手にすることができた。

当然、ネギとマギの最終課題も合格。晴れて魔法使い、しいては先生となった。

これから二人の教師としての生活が始まる。喜ぶ姿を見て、周りの先生たちは苦笑していた。

「なんかさ、いい話に聞こえさせようとかんばってるけど、高畑先

生は……」

「ベッドの上で栄養の点滴を受けながら書類整理とかの仕事です。学園長も同じく」

「……僕は気が付いたんだ。麻帆良学園は想像以上にブラック企業なんじゃない？」

とはいえ子どもの先生がいるような学校である。

瀬流彦先生曰く夜中の仕事まであるような学校である。

何を今更、と言った瀬流彦もマギも揃ってため息をついた。

4話前篇 殺しのライセンス（前書き）

長いので半分に区切りました

4話前篇 殺しのライセンス

一方俺は用事がある場所に向かうために足を動かしていた。

既に四年間歩いた森林に囲まれた道は、季節の変わりが写る以外に変わることもなく、そこを踏み歩く自分も慣れたものだろう。

地面はコンクリートで舗装されてなく、道路の真ん中が少しだけ盛り上がっている様は、数は少ないが車が通った跡がはっきりと分かった。

家から数分歩いた所で、俺は分かれ道に差し掛かる。

その用事の為に、野草に混じって咲く花を幾らか摘み、普段自分が行くことの無いはずの分かれ道に足を踏み出した。

森林のカーテンが日差しを遮り、木漏れ日が地面を照らす。

夏には辺りの自然がマイナスイオンを出す道も、季節が春に差し掛かったばかりの時期には寧ろうすら寒い。

さて、そんな冷えた空気を出しているのは、果たして気温だけなのだろうか。

辺りの温度がシンと冷える。

いつものように着ているカソックを再度整え、俺はその場所に足を踏み出した。

見えるのは石。

灰色、黒などの石細工が辺りの立てられ、直線で舗装された道は先ほどまで歩いていた筈の凸凹道とは大きく差がある。

独特の匂いがするその場所には、自分とは同じように、されどずっと立派な花が添えられていた。

そう、俺は来るはずがない、来る必要がない。

この世界に家族が居ない自分にとって、来ることも在る必要も無い場所。

墓地、俺が訪れた場所は其処だった。

- - - - -

関東魔法協会。

西方より来た魔法使い達の術を使う、自分の中では平凡とはだいぶズレた人達の集まりであり、昔からだいふ浸透してきている団体でもあるらしい。

魔女狩り、という悲劇があつてからは秘匿概念が強くなり、今は裏では魔法というのは有名なのだ。

関西呪術協会。

対して此方は日本独自の魔法形態であり、平安時代あたりに陰陽道の基礎を作られ、そこから発展した魔法らしい。

元より京を護るために形成された神明流剣術は、これと深く密接な関係にあると言える。

京都が在るのが西日本と言うこともあり、呪術者や神明流剣士は殆どが此方に所属している。

だから海外からもたらされた西洋魔法を中心とした組織が、日本に固まるのは仕方ないと言えるだろう。

だがその二つの組織の在り方はかなり似ている。

どちらも人外の力を用いる事には変わらず、環境の整備等の仕事は在るには在るが、それが中心とは言えない。

どちらも在るのは所詮力、傭兵稼業以外には有り得ないのだ。……
まあ龍脈の管理や占い稼業をする人も居るには居るが。

要人の護衛、信用のおける人物への戦力の派遣など、資金を実質的に稼いでいるのはそれらなのだ。

今では殆どの人が何らかの職と併用してはいる。

だが、日本古来からある関西呪術協会は、新しく来た関東魔法協会に仕事を一部奪われてしまっていると言うのが、実質的な対立の原因だと言える。

魔法使いの侵略は数百年前から続いており、今現在近衛近衛門が橋渡しとなって対等な状態まで持ち込ませようとしているところだ。

魔法使いを追い出そうとする過激派なんていうのは、収入を大きく削られたブーどもが多い。

神明流剣士にいたっては、なにしろ氣を扱うにはかなりの鍛錬が必要とする。

多分仏斜里のせいか転生のおかげかで氣のブーストをかけられるチートの俺は論外として、鍛錬をしなければ氣を扱うことはできない。

つまり脳筋がどんどん増える。

詠春がより良い環境を求め静かで涼しい俺の家に来て勉強するのは、学校に付いていくためには必然なのかもしれない。

つか厳しい鍛錬をしつつ上位に食い込んでる詠春は勤勉すぎる。

「つまりは息又キ又キをするために私の出番というわけだ。次はなんのピンク本が好みだ？」

「いい加減にしろよアラヤ、ぶん殴るぞ。……あとはロリコン趣味以外でたのむ」

俺達はその時は、軽口を言う程度には余裕を持ちながら、森の中の

木々を伝って移動していた。

案外ムツツリに目覚めた詠春も、緊張をほぐすように軽口を返しつつも、意識は常に周りに集中している。

無論俺もそうしているし、気分的には気配遮断ランクAぐらいにいるつもりだ。

現在俺らは戦闘状態に入っている。

相手は関東魔法協会からの刺客、傭兵などだ。

関西の過激派に対しての徹底交戦派の一角が、山に攻め込んでくるのは別に珍しい話でもない。

名目上彼らは立派な魔法使いを名乗っていて、それに対抗する勢力、それを悪として滅ぼす大義名分はあちらにある。

此方の過激派についても、誇りに従っての行動なんてものは僅かなもので、殆どがそれを大義名分として、傭兵稼業などの不利益を負った連中だからだ。

さて、そんな奴等を追い出すのが俺のバイトでもあり、訓練内容でもある。

俺も最初は仕事を共にする者達に変な目で見られていたものだ。

なにしろこの身はコトミー、黒の僧衣に紺色カソックという、お粗末にもイメージする関西らしい格好ではない。

だから基本的に詠春と組むことしかないんだよな。

まあ刀だろうが呪術だろうが、結界まで使っている人間を何処の者が特定するのは無理だ。

剣士に神父に魔法使いに結界師呪術師魔術師…二足のわらじってレ

ベルじゃねえ。

子供時代の勉強の如くやってるから、片寄りは有るが一通りはできる。

おかげで詠春には勝てなくなったが。

ただそれだけ実力をつけていたとしても、今回の件については不安を隠せない。

「しかし…今回は妙なものではないか？」

「気がついたのか？」

詠春はやはり驚かず、意識は辺りに集中している。

「当然だ。戦力が過疎化し過ぎている。本山に優秀な呪術師の夫婦が居るが、本当に戦力などと呼べるのは、関西の長を除けば彼ら程度ではないか」

「…だな。有力な人物が殆ど出払っているっていう珍しいにもかかわらず、今回の襲撃か…」

そう、今回の件についてだが、襲撃に対応する人数が少なすぎる。幸いな事に相手は一人だ。どうせ金で雇われた鉄砲玉だろう。だが実力はそれなりに在るらしく、たどたどしくはあるが魔力を探ると、その魔力の量は悪くない。おそらく何らかの魔法で気配を消しているのだろう。

呪術師は前鬼、後鬼を揃えてようやく戦うことができる。だが神明流剣士が居ない今、真正面から戦うにはどうしても後れを取ってしまう。

だから剣士である詠春とアラヤが前に出された。

到達地点まであと少し。アラヤと詠春は無駄な会話を消してより一層意識を集中させると、それぞれの獲物に手をかけた。

「ふむふむふむ。ふむふむ。いや、うん。まいっちゃったな！もう気が付かれたんだ？ まいったまいった。とっとと終わらせようと考えてたのに想定外じゃないか」

それは少年とも見えるような男の声だった。

関西呪術協会の敷地内、マントに三角帽という見た目通りの魔法使いならば、西洋魔法使いであるはずの彼は、敵敷地内に居ることを示している。

だというのにその声は呑気で、まるでお使いにでも行く小学生のような柔らかさがあった。

だが当然だがここは戦場になる場所である。いや、

戦場、と言つ前にここは惨状であると言つしかないのでらう。

「……貴……様ア……」

「あつれー？ まだ生きてるの？ もう儀式も始まるのにそんなじゃ困るじゃないか」

発せられたのは男のすぐ近く。くぐもったように聞こえてきたのは、地面に這いつくばる成人男性の姿と滴る血液だ。そして並べられたのは、魔方陣の形に沿って並べられた人間の姿。

そのどれもが目に光はなく、生きる気配がしない。当然だろう。その全ての人間の胸には楔が撃たれ、唯一意識がある人間の体からは尚も血が流れ続けている。

それはいったいどんな光景か。魔方陣の中心に向かって血は流れる様は、赤い蜘蛛の巣を連想させていた。

「子供好きな悪魔っていうのを召喚したいのに、肝心な子供の血がないんだぜ。相手言う事聞いてくれるのか？」

「……我……々、を、裏切る、つもり、か？」

そう、この生贄にされているもの達こそが、今回襲撃者と呼ばれる
関東魔法協会の魔法使いだった。

「裏切る？馬鹿言っちゃいけない。関西呪術協会に打撃を与える、
っていう事は手伝うし、それに君たちはいらないんだけど。血だけ
でも使ってあげてるだけ感謝して欲しいな」

「……この外道め！！」

「プーー！ い・ま・さ・ら・気が付いたの！？ こりゃ傑作じ
やないか！ 正義の魔法使い様は外道に力を求めたって今の今まで
気が付かなかったのか！？」

顔を引き攣らせながら笑う男は、心底おかしいと言った様子で腹を
抱える。

品が無く、相手に不快感を与えるためだけの笑いは生贄とされた男
の神経を逆なでさせた。

「うーん、君の無様な格好とさようならするのは心から残念だけど
も、ま、これも運命だったってことであきらめてちょーだい（笑）」

だが男の声はもう届いていない。

一定量まで達した血は魔方阵を緋色に照らし、魔力を向けるベクトルが全て円の中心へと向かった。その瞬間、鳥達のざわめきが消えた。

中心へと集まった魔力は黒く変色し、辺りに瘴気が立ち込め始めると、魔力は形を取って現世へと姿を現した。

「……ほう、これはまた贅沢な呼び方をしたものだ。して、何用かね？ 青の子よ」

「ああ、ちよつと子供を攫って欲しいんだ。生死は問わないけど石化されちゃうと困る。頼んだよ、ヘルマンさん？」

- - - - -

それは一瞬の出来事だった。

俺と詠春が反応したのは、急に隠密の気配が解かれたからではない。それを無意味にするだけの魔力の高まりが原因だったと言えるだろう。

同時に俺と詠春の視界に赤い魔方阵が入ってきた。中心にいるのは黒いコートを羽織り、深く帽子を被った男性。明らかに魔族、それも強大な力を持った者だった。

それが辺りに充満する瘴気を中心であつたとわかる。そして、何倍

も場を重くしている光景の中でおかしそうにケラケラと笑う男が一人。

不意に、その男がこちらを見た。

「ッ!!? 詠春!」

「分かってる!」

設計図ダウンロード、黒鍵、投影開始。

親指と人差し指以外に現れたのは計三本の黒鍵。同時に詠春も夕凧を引き抜いた。

「ふむ、あれは潰すべきかね? 発展途上の子等を潰すのはある意味、私が抑えきれなくなりそうだが」

「必要ないよ。僕がプチツと潰しちゃうから。ヘルマンさんはさつさと不浄の血筋を奪ってきてくれよ」

「わかった。では、失礼」

居る世界を間違えるかのような場違いな口調で二人は話し、ヘルマンと呼ばれた男性はやれやれと言った様子で帽子の唾をつかむ。

瞬間、魔力が膨れ上がった。

足元へと流した桁違いの魔力、それは俺と詠春に触れさせることから許さぬ速度で山を一直線に跳んだ。

長距離瞬動術とも呼ばれるその術は、大地に罅を入れるほどの反動を持ってヘルマンを関東呪術協会へと向かわせる。

詠春がしまったと思うより先に、目の前の男がじっとこちらを見透かすかのように見つめてきた。

おそらく十代後半と思われる年齢に、青と白の二枚の和服を合わせて、両手の一つ一つの指には色とりどりの指輪がつけられている。そして何より目に引くのは自然色にはあり得ない、スカーレットカラーの髪と藍色の瞳だった。

おそらくは形の整った顔つきをしているにも関わらず、辺りの雰囲気動揺した俺たちには、それが比喩の悪魔であるようにしか見えなかった。

「んーいつまで呆けているんだ二人とも？ 早く反応しないと僕の後ろのお兄さんたちみたいになっちゃうぜ？」

「！？ ……う…ゲエ」

詠春が男の後ろにあった光景を視界に入れてしまったようだ。

魔方陣にそって、何かのアートのように並べられた中途半端に干からびた死体の山。

胸には白い楔を撃たれ、天を見る眼はすべて濁りきり、生きていることを証明できるものは居ない。

込み上げてくる吐き気に逆らわず詠春は胃の中身をその場にぶちまける。

そして、顔に浮かぶ苦痛の表情だけが、どんな最期を迎えたかを想像させて――

情報転送カット、一部オーナーシンキングオフ、情報による感情の遮断を開始します。

「……ふむ、成程な。これは随分非道なことをしてくれたものだ。主の元へ送られる者たちの祈りさえ、これでは届かぬか」

「うん？ お前は大丈夫なのか？ 若いというのにたいしたもんだな？」

「なに、少し、な。詠春、戦えそうか？」

「……ああ」

改めて刀を正眼に構え、俺は黒鍵を両手に持ち、いつでも動けるよ

うな体制で構える。

おそらく、目の前の存在は自分が生きてきた中で一番ヤバいだろう。それこそ殺気を直接感じられる近衛父や浦島さんより、まだ戦いに疎い自分でさえも分かる狂気を振りまくこいつが。

「そういえば自己紹介がまだだった。殺し合いなんてことやるんだから、礼儀はしっかりしないとね？ 僕の名前は……あー『ブルー』とでもしてくれないかな？ ほら、カッコいいだろ！？ この国だと青色を表すんだぜ！？ 凄いだろ！？」

何がおかしいのか、ブルーと名乗った男は腹を抱えてゲラゲラと笑った。

それは無防備に見えた。いや、見える。だから俺と詠春は同時に動いた。

詠春の連続瞬動とともに放たれた斬岩剣。その隙間を縫うように俺は片手に持たれた黒鍵ノイアクシヨンを放った。

それを防いだのは無詠唱で張られた魔法障壁だ。それに構わず、詠春は斬撃を加える。

「斬鉄、閃！！」

「障壁破棄バースト」

水族館のガラスが粉碎したかのように、障壁の欠片と魔力の濁流が詠春を飲み込んだ。

魔力の無駄遣いだ。魔法使い数人分の魔力をいっぺんに使い切る行為に、俺は間髪入れず黒鍵を投げ込む。

七夜お得意の暗殺術で気配を消し、さらに放たれた角度とは別に地を這うかのように背後に迫った。

そして投影した黒鍵は、かぎ爪のようにして背へと叩き込んだ。

「短い獲物ならともかく、投合剣で接近戦は無理があるんじゃないのかな？」

「ふむ、確かにそうだ」

神鳴流体術に必殺の暗殺術を加えた現在の俺の体術、それをなんでもないようにかわすブルーは、まるで子供をあやす様に俺に答える。

だが、それに対する俺の答えも軽いものだ。

「詠春！」

「応ッ!!」

詠春の応答に反応し、俺は震脚とともに放った拳で、ブルーを引き離した。

飛ばされた方向に居るのは詠春。放たれた斬岩剣による水平方向への一撃をブルーは跳躍で躲す。

予定通りの行動に俺は思わず口元がにやけそうになった。

瞬動で宙に居るブルーへの接近、飛び越えるかと思われたその瞬間、俺は体をひねり地面へと頭を向けた。

そして俺は、ブルーの頭へと手を伸ばす。それを察知したのか、直にはつかめず、指の間に緋色の髪が挟まれた。

「貴様が潰れる」

宙に向けられた足に魔力を高め土台を作りそれを蹴り飛ばす。

その勢いのまま、ブルーの髪を掴んだ俺は、腕を振るい地面、それも岩肌のある場所へと叩きつけた。

ごちゃ、という耳障りな音。

見れば、ブルーと自らを呼んだ男の腹から、鋭利な岩肌が見え、所々からは白い骨が顔を見せている。

ああ、これは死んだな。

すでに死体となったその姿を見て、俺はその”思考”を頭の片隅に”弾き飛ばした”

死体である、ということを理解しても、不思議なことに感情は動かない。ただ、結果を頭の中で表している。

「成程。思考で切り替えられるのは、なにも設計図だけではない、

か」

俺はそう呟く。

「……殺したのか？」

「ああ、心臓を潰した。間違いなく死んでいる」

近づいてきた詠春は顔を青くしてその死体を見た。

仕方がない、の一言で割り切るにはお互いに子供である。

おそらく、まっとうな意識に戻せば俺も数日間は何も食べないような状態になるだろう。

だがそれより先に、やらなければならないことがある。

「召喚した術師を殺したんだ。すぐに召喚された者も消えるだろうけど……早く援護に行かないとまずいな」

そうだ、まだ終わってはいない。

詠春の言葉に俺も返答して、ゆっくりと立ち上がった。

「そうだな。いくら浦島が居るとはいえ、戦力が多いほうがいいだろう。詠春、早く向か

「解放、魔法の射手四千本」

不意に、空を見た。

まるで土砂降りの雨の中、時を固定したかのようにそれらは宙に留まっている。

コンマ数秒で構成されていく魔法の矢、向けられているのはここに居る”三人”

そして、土砂降りは降り注ぎ始める、矢、矢、矢、矢、矢、矢矢矢矢矢矢矢……

辺りに雪崩のような轟音が響き渡る。それは訳十数秒に渡って響き続けた。

そして、山の頂上付近から、巨大なガラスが割れた音が聞こえたのは、それが収まってからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6794k/>

貴方は神を信じますか？

2011年7月11日00時03分発行